

9-1

25-256

大日本地理集成

矢津昌永
角田政治
小平高明

合著

東京隆文館發兌

明治
44. 5. 25
東京

序

明治三十九年陽春、余等大日本地理集成を上梓せしに、意外にも江湖の賞讃を博し暮年ならずして版を重ねる七八に迫り。明治四十一年の暮不幸にして版型祝融の災に罹り市に版を絶つ已むなきに至りしが、好學者の需要衰へずして爾來各地より該書の重版を促すこと頻々たり。然れども該書は一人の筆に成れるにあらず、編中稍々統一を缺く嫌ひなきにあらざりしを以て、余等機を見て切に其の稿を改むるの必要なるを感じ、漸く之に着手したるも公務執筆の餘暇僅に筆硯に親むに過ぎざるを以て進行意に任する能はず、以來、在昔年を閲みする三星霜にして漸く本書の稿を了へたり、本書編纂の趣旨は前書の序文に載せたる所と多く異なるものあらず。今其の一節を摘録せんか。

『戦勝國の榮を荷へる日本帝國の國粹果して如何、是れ外人の類に知らんことを務むる所なり。故に地理に歴史に將た美術に苟も我國情を知るに資すべき誌籍の研鑽は當今外人間の新流行なり。其れ然り、然るに顧みて本邦人の自國を知るの程度果して如何を回想すれば又赧然たらざるを得ず、特に自國地理の智識の如き更に索然たるものあるを覺ゆ。是れ

種々の原因あるべしと雖ども、從來繁簡其中庸を得たる適當の書なかりしも確に其の大原因たらずんばならず、本書は實に此の要望の見地より筆を起せるものにして、先づ國民の指導者たるべき教育家諸君の参考書たるを以て自ら任せり。次に地理研究篤志家諸君の中庸の研究書たるを以て自ら任せり。次に自國の聲價を公平に知らんと欲する經世家諸君の座右の伴侶たるを以て自ら任せり」

前著は實に斯の如き抱負を以て世に出でたり。爾來半十歳、外人の我が國情研究に熱心なること眞に瞠目に値するものあり。然るに顧みて我が國民が自國地理上の智識果して如何遺憾ながら依然として今尙舊の如きなり、心あるもの浩歎に堪へざらんや。即ち敢て自ら措らず、本書を公にし以て世界第一等國の班に列せる我が國の家庭に向ひて忠實なる地理的智識の布教師を以て任せんと欲す。

今改めて著者用意の二三點を列擧すれば左の如し。

一自然と人文との聯絡。從來多くの地理書は、事實を羅列的に記述したる所謂地誌にして地理にあらず、故に本書は自然現象と人事活動との聯絡即ち靜的事情と動的状態との連鎖關係を有機的に説明せんことを務めたり。

二人情風俗の異同。各地の人情風俗の好惡美醜は、以て自己矯風の資となり、發奮の料とすべし、故に本書は努めて此の點に留意したり。されども各地各様の人情風俗は又各人各個の觀察によりて異り、恰も廬山の眞景の俄に窺ふ可らざるものあるが如し、此故に陳腐なりと雖も今尙首肯すべき點多き人國記を假りて之を記述し、間々著者の意見を加へたり。因に著者は他日新人國記を作りて世の批判を乞はんと欲す。

三産業產物の盛衰。各地産業の現状及其盛衰原因を知らば、自己の處世上に資する所大なり、此れ本書が努めて自然人文兩方面より此種の記事に力を注ぎ、大に産業の興隆發達を計らんと欲せし所以なり。

四都邑の盛衰消長。各地都邑の現状又は盛衰消長の原因を研究せば郷土又は都邑を發達興隆せしめんと欲するの心情を起し、小にしては愛郷心、大にして愛國心を涵養するに至るべし。此れ又本書が聊か力を用ひし所なり。

五名勝舊蹟。我が國は到る所山川秀麗にして風光明媚なり、且歴史上の舊蹟尠からず。從て此の名勝此の古蹟を説かば、如何に我が國が風景に富み愛すべき樂土なるかを知らしめ、以て愛國的情操を養ふに資すべし。此れ又本書が此種の材料を豊富にせし所以なり。

六研究上の注意 本書は各編各項に於て、研究上の注意を述べたり。是れ常に地理研究者の采たらしめんが爲めのみならず、教育家諸君の教授上の指針たらしめんが爲めなり。本書は實に以上の如き諸點に留意せしのみならず、又始終經世の見地より記述して、我が國の國情を自然人文の兩方面より説明し、且之を補綴するに詩歌文章を以てし、讀者をして趣味津々の間に地理的智識の收得を計らんことを企てたり。

國運は日に進み人事は月に新なり。從て地理は此の進歩活動に遅るべからず。本書創編に附する半にして恰も韓國併合の事あり、茲に於て本書は末編に朝鮮を加へたり。

今後本書は、絶えず國運の發展、人事の變遷に留意し、新材料によりて版を改め、進歩新なる地理書を以て任せんと欲す。余等薄識不文にして本書の編纂を企つ、固より尙不備の誹を免るべきにあらず。乞ふらくは世間博雅の指導により他日版を重ねるに従ひて完璧たらしむることを得ば幸甚之に過ぎず。

著者の一人は別に本書の姉妹書として出版の時を同うして外國地理集成を世に問はんとす、此書を受讀せる人士は併せて彼の姉妹書に一讀の光榮を與えられんことを敢て切望す。

明治四十四年櫻花滿開之候

著者識

例言

一本書は浩漭なる書冊となすにあたらじ、然れども多方面の事實を蒐集し、殊に六號活字を多く使用せるを以て、材料豊富なるべきを信す。尤も五號の大文字のみにて完全なる主意を爲すと雖も、小文字を見れば尙註脚解釋の如く一層明瞭ならん。

一書中各縣出生の人物を載せたり、始め故人のみを挙げしも、現存の人物をも併せ收めば一層參考となり趣味多きを以て、印刷するまに著者の記憶によりて之を記せり、故に各地によりて精粗の別あり、他日版を改むると共に、漸次古今の人豪を網羅せんと欲す。

一數字は第二十八統計年鑑、農商務省第二十四統計書によれり。河流の長短、灌域、舟筏は内務省土木局統計書による。

一外國貿易は各貿易港とも、明治四十二年度を示し、大藏省通商局編明治四十二年度外國貿易概覽による。

一 韓國併合の結果面積、人口、種族等に左の異同あり、讀者先づ之が訂正を乞ふ。

日本の廣袤(二十八頁參照)

名稱	面積	百分率	名稱	面積	百分率
本州(屬島を含む)	一四七、三三三	三三・三	九州(同)	二七、二〇〇	五・三
四國(同)	一、八〇六	二・七	北海道本島(同)	五〇、八三六	一三・七
臺灣(同)	三、三四二	五・三	樺太(同)	二〇、七〇〇	四・七
朝鮮(同)	一四一、四七〇	三三・六	其他	一、四九・五	二・五
合計	四三三、〇〇〇	一〇〇・〇			
住民	民	(一二五頁參照)			

我國總人口五四、六九八、三三四人に朝鮮人口一二、四八四、六二一人を加ふれば總人口六七、一八二、九四五人となる。(朝鮮人口は韓國通覽による)

種族 (二九頁參照)

我國の種族は大和民族、アイヌ種族、支那種族、臺灣蕃族、ギリヤーク種族、オロツコ種族の外韓族を加へたり。

明治四十四年四月

著者

大日本地理集成目次

第一編 自然地理概説

- 第一章 地球……………一
- 第二章 日本の位置……………二五
- 第三章 日本の廣袤……………二六
- 第四章 日本の地體構造……………三
- 第五章 日本の山系……………三四
- 第六章 日本の地殼の發育……………四
- 第七章 日本の水系……………三五
- 第八章 日本の平野……………三六
- 第九章 日本の海岸……………三六

第一〇章 日本の氣候……………101

第十一章 日本の天産物……………116

第二編 人文地理概説

第一章 住民……………124

第二章 教育……………129

第三章 宗教……………135

第四章 生業産物……………141

 第一節 農業……………141

 第二節 林業……………148

 第三節 水産業……………154

 第四節 鑛業……………160

 第五節 工業……………166

第五章 交通……………176

第六章 商業……………180

第七章 政治……………182

第八章 財政……………183

第九章 兵備……………185

第一〇章 外交……………189

第三編 處誌

第一章 關東地方總説……………194

 東京府……………195

 神奈川縣……………196

 埼玉縣……………196

 千葉縣……………197

 水戸縣……………197

朽木縣 三六

第一章 奥羽地方總說

三六

福島縣 三六

宮城縣 三六

岩手縣 三六

青森縣 三六

秋田縣 三六

山形縣 三六

第三章 本州中部地方總說

三六

静岡縣 三六

山梨縣 三六

愛知縣 三六

岐阜縣 三六

長野縣 三六

新潟縣 三六

富山縣 三六

石川縣 三六

福井縣 三六

第四章 近畿地方總說

三六

滋賀縣 三六

京都府 三六

奈良縣 三六

三重縣 三六

和歌山縣 三六

大阪府 三六

兵庫縣.....六

第五章 中國地方總說.....六

岡山縣.....六

廣島縣.....六

山口縣.....六

鳥取縣.....六

島根縣.....六

第六章 四國地方總說.....六

德島縣.....六

香川縣.....六

愛媛縣.....六

高知縣.....六

第七章 九州地方總說.....六

福岡縣.....六

大分縣.....六

佐賀縣.....六

長崎縣.....六

熊本縣.....六

宮崎縣.....六

鹿兒島縣.....六

沖繩縣.....六

第八章 臺灣地方.....六

第九章 北海道地方.....六

第一〇章 樺太地方.....六

第十一章 朝鮮地方.....六

第十二章 關東州.....六

以上

大日本地理集成挿畫目次

口 繪

朝鮮地圖

卷頭

自然地理概説

地球と月(第一圖)

九頁

地球表面に於ける位置の決定(第二圖)

六

更線圖(日附變更線を示す)

三〇

植物分布圖

二六

誌

淺間火山の圖

三〇

東京市及附近地圖(別葉)

三六—三七

鎌倉古今の地圖(別葉)

三〇—三一

箱根火山彙

三四

目次

日光附近地圖……(別葉)……………三六—三七

奥羽山脈と那須火山脈の二部断面圖……………三九

北上阿武隈兩山脈の断面圖……………三九

鳥海山脈及越後山脈の一部断面圖……………三七

仙臺市地圖……………四四

松島灣附近地圖……(別葉)……………四四—四五

平泉古今の地圖……(別葉)……………四三—四三

木曾山脈断面圖及赤石山脈断面圖……………四五

白山火山圖……………四五

飛彈山脈(日本アルプス)の地圖……(別葉)……………四五—四五

富士帶火山脈断面圖……………四六

富士山頂の圖……………四九

昔時大井川渡しの圖……………四六

間歇泉想像断面圖……………四八

富士山四近の地圖……(別葉)……………四八—四九

名古屋市及附近地圖……(別葉)……………五〇—五〇

新潟港の地圖……………五〇

金澤市地圖……………五九

大津市附近の圖……………五七

京都近傍地圖……(別葉)……………五七—五七

舞鶴附近の圖……………五〇

奈良古今の圖……(別葉)……………五九—五九

宇治山田附近の圖……………六〇

大阪近傍地圖……(別葉)……………六〇—六〇

神戸市街地圖……(別葉)……………六一—六一

中國山脈と白山火山脈との断面圖……………六九

廣島市及吳市附近地圖……………六九

下の關門司附近地圖……………七〇

目次

四

- 一 松江市地圖……………七五
- 一 四國山脈断面圖……………七六
- 一 高松市附近地圖……………七五
- 一 九州北部山脈断面圖及九州南部山脈断面圖……………七三
- 一 矢岳隧道ループ線……………八〇四
- 一 博多附近古今の圖……………(別葉)
- 一 三池港の圖……………八二八
- 一 阿蘇火山の圖……………(別葉)
- 一 臺灣山脈断面圖……………八八五
- 一 支那海に於ける臺灣の位置……………(別葉)
- 一 阿里山森林地圖……………八九〇
- 一 臺北府地圖……………九〇一
- 一 澎湖島地圖……………九一〇
- 一 樺太南部及び關東州租借地の圖……………(別葉)

- 一 大泊及豊原附近……………九七
- 一 京城……………九九
- 一 仁川港……………一〇〇
- 一 釜山府の全景……………一〇六
- 一 釜山港……………一〇八
- 一 元山附近……………一〇一
- 一 平壤府……………一〇五
- 一 平壤及鎮南浦附近……………一〇六
- 一 義州及龍巖浦附近……………一〇八

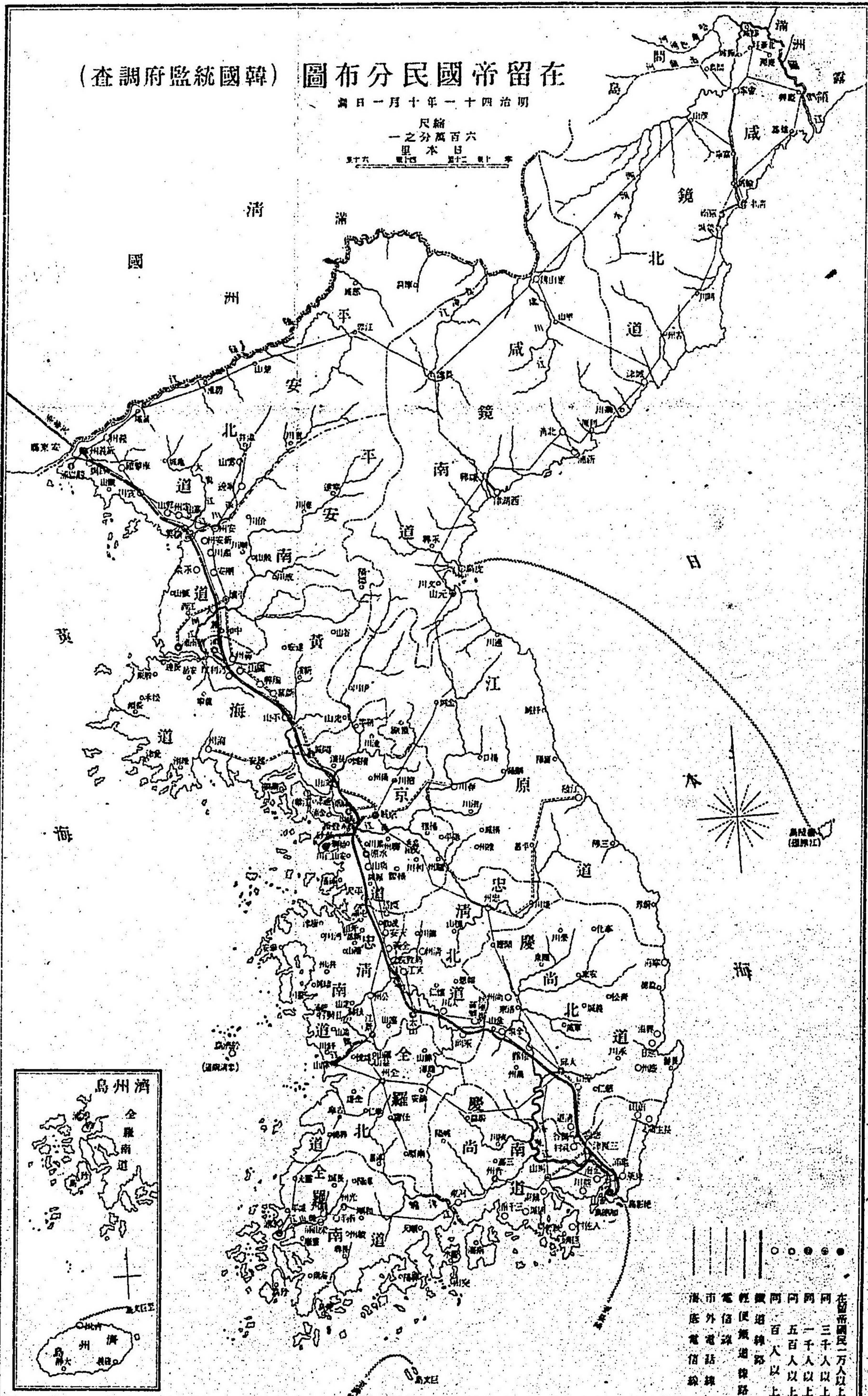
以上

(查調府監統國韓) 圖布分民國帝留在

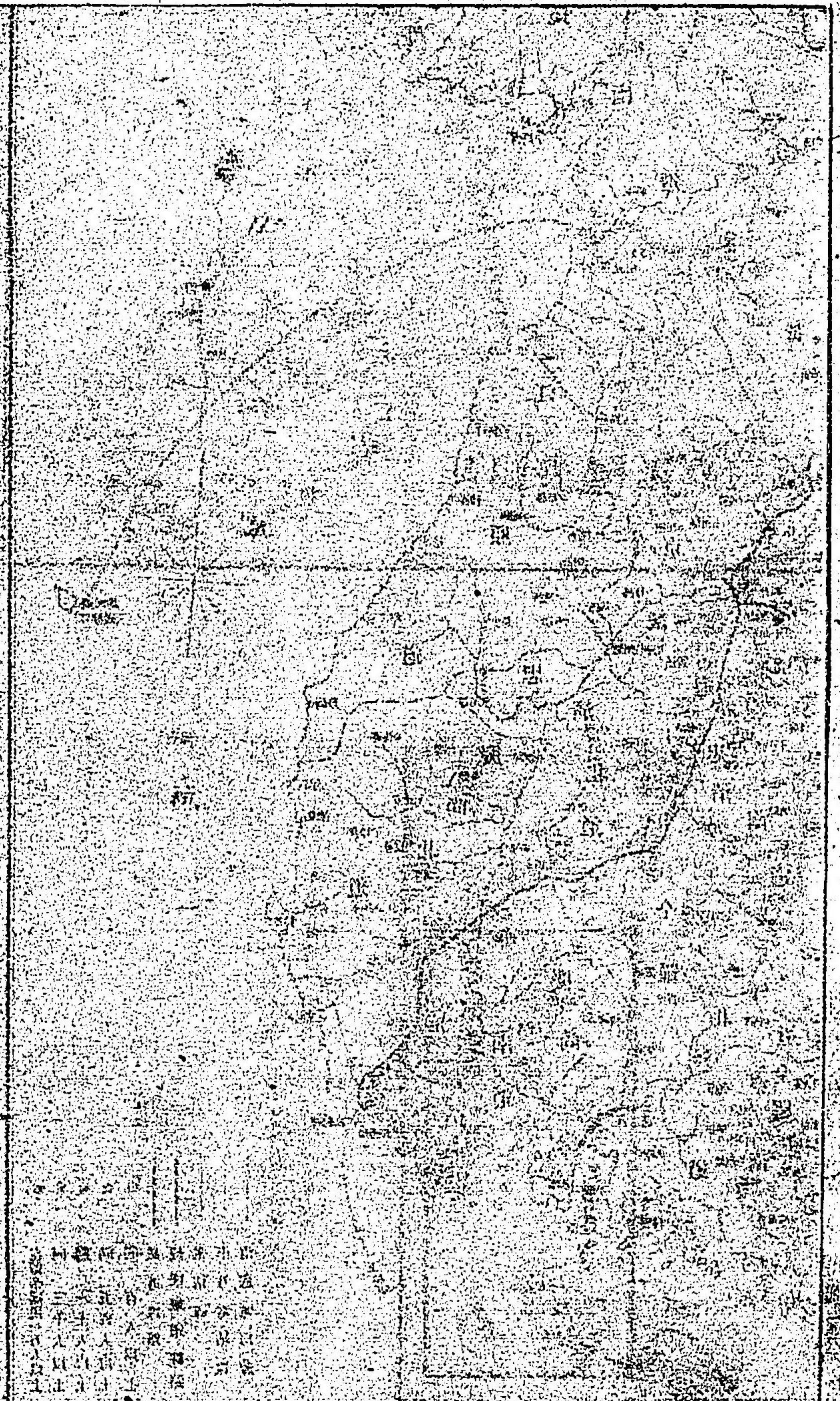
日一月十年一十四治明

尺縮
一之分萬百六

里本日
五十六 四十四 三十二 二十



市	電	經	同	同	同	同	在
底	外	道	道	道	道	道	帝
電	信	路	路	路	路	路	國
信	話	線	線	線	線	線	民
線	線	線	線	線	線	線	萬
							人
							以
							上
							以
							上



大日本地理集成

矢津昌永
角田政治 合著
小平高明

自然地理概説

第一章 地球



太陽及太陽系

【太陽及太陽系】 仰いで天床の壯美を賞し、尙試に羽化して天外遠く翔らんか、吾れに生命の統御者を以てする太陽を描いて、宇宙間更に太陽の如きものあり、而かも其の周圍には、地球の如き星體の運轉するものあると稱せらる、かくて他の方面に深く進まば、亦之と相似たる星群あるを認め得べく、實に天邊雲なきに文をなす無数の星體は、其の大部を擧げて、此等の太陽たりと云ふ。此等の各太陽は常に相互の位置を一定して變動すること

第一編 自然地理概説 地球

となし、されど別に此等に隸屬して其の周圍を廻轉する星あり、前者を恒星と稱し、後者を遊星とは趣味深し、即ち我太陽は恒星の一にして大小五百餘の遊星を率ゐて宇宙間に太陽系なる一星群をなす、我が立つ地球は實に此の太陽系統中の一遊星なり。

【國旗】 國旗は國民の理想を代表す、日章旗を國民の精神とし國號を日本と呼ぶ、朝敵の陽光は我に生氣と活力とを與へ、威嚴と而も同仁とを授く、赤は勇猛に、白地は平和に、一度徳を四海に垂れて、一視同仁なるは、我に於て聯隊旗の旗章なるを見る、吾が國民が過去に、將來に日東の君子國として誇る亦偶然ならんや。

【星霧説】 理學的説明によりて、一般の定説として疑ふ所なき宇宙進化に對する學説、即我が地球の歴史、換言せば太陽系統の歴史は實に西曆千七百五十五年獨逸の哲學者カント、及び殆んど同時代佛蘭西數學者ラフラス氏によりて唱導せられたり、此の説によれば宇宙間には當初稀薄なる瓦斯體瀰滿し、是が集結して星雲(Nebula)となり、尤も遠き遊星の軌道外迄擴がりたりしが、其の衝突等の原因によりて熱を生じ、また廻轉運動を起せり、太陽系も亦この星雲の一なりしが、放熱と共に收縮して廻轉の速度を速め、爲めに廻轉軸に直角の方向(赤道部)に膨れ、遂に幾多の輪を爲し、輪中數多の點に於て凝結を初め、遂に遊星衛星等の許多の天體を成したり、其の所謂輪なるものは今日の土星に於て見る如きものなりしなり。是等は皆同方向に自轉しつゝ、中心體たる太陽の赤道面に近き軌道に沿ひ皆

同方向に太陽の周圍を周れり、而して天體の輪より分れて生じたる衛星も亦之れと同じ運動を續けつゝあり、かくて太陽系中最大天體たる太陽は尙非常の高溫度を保ち、白熱の状態にあるも、我地球の如きは内部の高溫度なるのみにて、外面は既に冷却し月は其體更に小なるを以て、内部中心に至る迄全く冷却し終りたるものなりと云ふ。

今證明するに足るべき事實を擧げんに、

- 一、分光法の研究によれば太陽及諸遊星并に衛星流星隕石等は殆同一物質より成ること
- 【隕石】 隕石はもと他の天體の破片が地球上に墜落せしものにして、是を取りて分析すれば鐵、ニッケル、マグネシウム、カルシウム、ソーヂウム、ホタテシウム、炭素、珪素、燐、硫黃、酸素、窒素、水素等一として地球上に存在せるものならざるはなし。
- 又三稜鏡を以て日光を分析する時はスペクトラムを得、其の色彩暗線を研究するに地球の物體より現はす、スペクトラムと同一なるを認む。
- 二、各遊星の自轉公轉の方向は、太陽の自轉の方向と一致せること。
- 三、各衛星の自轉公轉の方向は主星の自轉の方向に等しきこと。
- 四、諸遊星の軌道の平面は太陽の赤道面と一致すること。
- 五、諸遊星の密度の大なるものほど中心體たる太陽に近く、又之と反對に遠きものなど其の扁平の度大なり。(地球太陽間平均距離九一、四三〇、二二〇哩なり)

星名	直徑	直徑の割合	太陽迄の距離	密度
太陽	八八〇〇〇〇哩	(地球 ^テ トシテ) 一〇九、三〇	(地球太陽間の距離の單位)	二五
水星	二九九二	三八	〇、四	一三一
金星	七六六〇	九四	〇、七	八五
地球	七九一六	一〇〇	一、〇	一〇〇
火星	四二一一	六三	一、五	七四
木星	八六〇〇〇	一一、一六	五、二	二四
土星	七〇五〇〇	九、四九	九、五	一三
天王星	三二七〇〇	三、九〇	一九、二	一三
海王星	三四五〇〇	四、六二	三〇、一	二〇

六、地球の密度中心に近くに從ひて大なること。
 七、土星に環を有すること。
 八、地質學上古代程地熱の強盛なりし證據、又太陽、地球、月等の今日の情體。

【地球の形狀及び太さ】 吾人一小立脚地點より見れば、實に天平狀と解せし古代思想も

天圓地方と云ふ支那の古語も徒らに今日より一笑し去らんは怨多きことなるべし、抑地球の形が圓球狀を爲すとの説は西曆紀元百四十年埃及地學の鼻祖トレミー氏に出で、其の後マシエルランが世界一周の壯舉は之の主張を愈々信せしむるに至りてより、爾來測量術の進歩發達は漸く精細に證するを得るに至りぬ。今地球の圓體なる證として左に數項を擧げん。

- 一、海岸に於て入港の船舶は最初に橋頭を認め漸次橋身船體を見ると雖、出帆の際は初め船體より没して、尙橋帆を認め漸く遠ざかるに従ひ橋頭をも望み得ざるに至る。
- 二、地平面の廣狹は位置の高低に從つて異なること。
一萬二千餘尺の富士山の頂上よりは富士見十三州とて遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、安房、上總、下總、常陸、下野、上野、長野を見ることを得べく、其視半徑五十六里に達す。若しそれ二萬九千餘尺のヒマラヤ山の頂上より見れば視半徑八十餘里に達すべきなりと云ふ。
- 三、常に一定の方面に進めば終に出發地點に歸着すること即ち世界周航の如きは是れり。
- 四、地平線内の眼界は常に圓狀なること。
- 五、地表上東西兩地に於て太陽の出沒の時間に差異あること。
- 六、月蝕の月面に投射する地球の陰影の圓形なること。
- 七、太陽若くは太陰は同時に地球の全面を照らすること。

八、南北地を異にすれば恒星の高度に差異を認むること。

九、遠距離に於ける水面上、等高なる三本の楕は一直線なるべきに實際は之に反し中央のものは突出して見ゆること。

地球の球形なること以上の例證によりて知るを得べしと雖實は眞の球形にあらず、兩極に、扁平なる楕球(扁球)をなす、是れ地球が其の回轉より生ずる遠心力の爲めに中央の部分の膨大したるに依る。

斯く地球を扁平楕圓體と考ふれば地軸を含む所の地球の断面は皆同じ楕圓體なるべきも、赤道に平行なる地球の断面は圓なるべき等なるに、精しく論じ來れば赤道も亦眞の圓にあらずして長徑と短徑とあり(長徑を含む子午圈は西經八度十五分)。而して扁平楕圓體たる長短兩軸に於ける半徑の長さは

兩極半徑 六、三五六、〇七九米

赤道半徑

六、三七七、三九七米

にして其の扁平度(兩軸の差を長軸にて除せるもの)は約三分の一に過ぎず、故に直徑六尺に對し實に僅々二分の差、即地球の長短兩半徑の差は五百米に過ぎざるにより殆球狀に近きものと見做して可なるべし。

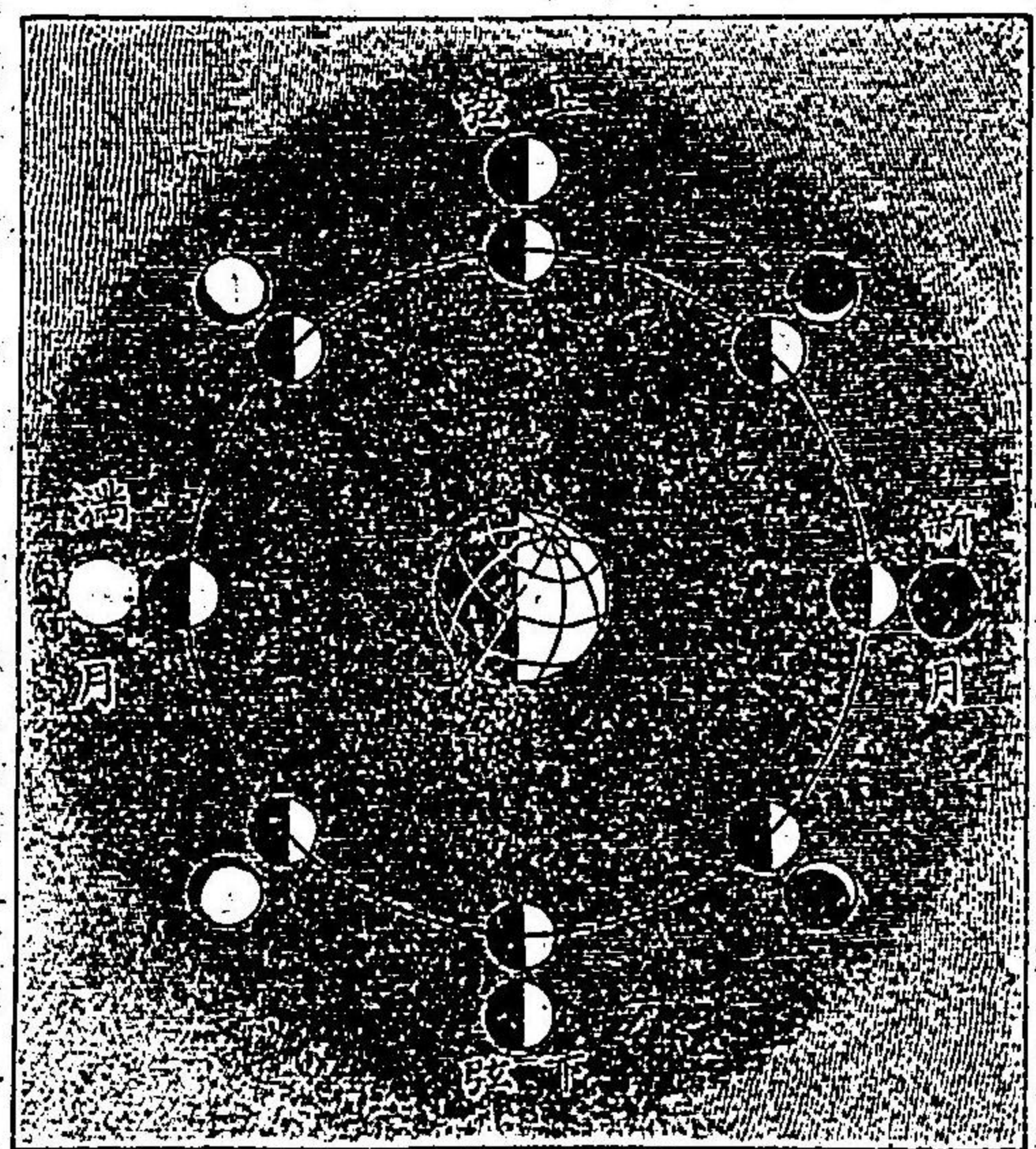
地球の大きさは宇宙の宏大なるに比すべくもあらず、實に細微なる一小世界にして僅かに太陽の百二十五萬分の一に過ぎざれども、是れを吾人の身邊より觀れば想像の及ばざる程なり、而して斯くの如き球體の一大塊は其の周圍は約四萬千即一萬百八十五里(三角測量に基く緯度の長百一十千にして、三百六十倍すれば地球周圍の長さを求め得)なりとす、今一時間二十哩を走る汽車により周行すとしても、日數五十を費すべし、又其の直徑は一萬二千千乃至一萬三千千にして面積は凡そ五億一千万千(約三三〇〇萬方里)なりとす。

【地球の運動】 蒼天の空球狀なるを日月は東に出で、西に没し、我が地球は恒久靜止の位置にあるが如しと雖、其の實非常の速度を以て運行して止むことなし、則ち一は地球が其の地軸の周圍を西より東に旋動して二十四時間に一回轉をなす自轉と、更に斯く回轉しながら三百六十五日四分の一を以て太陽の周圍を軌道に従ひ一回轉する公轉とあり、公轉の際地球の天空を經過する道筋を軌道と云ふ、此の軌道も亦殆圓形に近き楕圓形にして、太陽は其の燒點の一にあり。

【晝夜、四季の別】 地球の公轉、自轉及び地軸が軌道面に約六十六度半の傾斜を爲す結果は晝夜の長短、四季の變を生ず、地球自轉の結果は絶えず太陽に對する方向を異にし、

一自轉間に二晝一夜を生ず、即太陽に面しては晝となり、背いて夜となる、若し地球と太陽との位置の關係一定し又地球公轉するとも地軸にして軌道面に直角なりせば溫度の變更晝夜の長短はなかるべしと雖、實際地軸は軌道面に約六十六度半の傾斜をなすが故に、一年の中太陽が赤道以北の地の直上に來るときと、赤道以南の地の直上に來るときとあるに因る、即ち地球が軌道を進みて(春分)三月二十一日に至れば太陽赤道の直上に到り、各地晝夜平分にして、太陽は正東に出で正西に没す、此れより太陽は次第に赤道以北の地を直射し、北半球に於ては晝長く夜短く、又暖氣を加へ六月廿一日頃(夏至)に至りて其の極に達し、太陽は北緯二十三度半の所謂北回歸線上に直射し、北極より二十三度半までの地は太陽地下に没することなく、南極より二十三度半までの地にありては地上に出づることなし、故に北半球は夏の時候なり。此後太陽は南に歸り、凡九月廿三日(秋分)に至りて、又再び晝夜平分となりて、北半球の秋となる、爾後太陽は南に遠かり、十二月二十一日頃(冬至)に至りて太陽は南緯二十三度半の南回歸線上を直射し、北極圈及南極圈内にては夏至と全く相反し、北半球は日光斜射して冬枯の殺氣を呈す、此より晝夜又漸く平分に復し、去春到夏循環して究まるなし。

【地球と月】 月は地球の四分の一弱(二千五百五十二哩)の直徑を有し地球が太陽の周圍を公轉すると等しく、凡二十九日三分の一即一ヶ月の時期に於て地球を一周し、一自轉をなす、吾人は太陽の反射光によりて月を見る時に其の形狀を變し美觀と興味を加ふ、之れ其の位置によりて盈虚を生じ、太陽及地球と共に一直線上にある時は新月又は満月にして互に直角なる時は上弦又は下弦なり。



の影を月面に寫す時月蝕をなす、即日蝕は月影にして、月蝕は地球の影なり。

地球面上より見る時は太陽及月の大きさは略同大に見ゆれども、太陽の直徑は月に比して

凡四百倍なるも、其の地球よりの距離も亦凡四百倍あるを以てなり。又太陽及太陰は地平線にある時は、天空に高く懸る時よりも大に見ゆ、これ光線空氣の原層を通過するが故に、其の屈折すること大なるが爲めなりと云ふ。

月は斯く小なれども、太陽に次で吾人に取りては最重要なるものなり、月の引力が太陽の引力と結合して潮汐の干満を來すことが、航海者に取りての關係、港灣の浚渫に利し、水夫に取りて無上の用務を爲すのみならず、詩歌に歌はれ、文人墨客の資料となるのみならず、觀る人をして自ら心裏に審美の波を湛えしむ。

【二日、一年、曆】 一日、通常吾人の稱する一日は太陽日と云ひ、太陽の一南中より次ぎの南中との間に經過する時間にして、之を地球の眞の一日自轉即ち星日と云ふに比すれば、約四分(三分五十六秒五五六)長く、而かも地球と太陽との距離は常に變化し、地球が太陽に近き時は其の回轉速度大に、之に反する時は小なるが故に、回轉の速度は一年中常に變化するものなり、従つて一南中より次の一南中迄の時間も毎日多少の差あるべきは勿論なり、されば斯く不等なる太陽日を日常用ふべき時の單位となす能はず、これによりて總ての太陽日の長さを平均し、之を平均太陽日と稱し、此長さを時、分、秒に分ち計上す。

一年、一年も一日と同じく、地球が眞に太陽を一週する平均時三百六十五日六時九分九秒なる恒星年と云ふを用ゐず、日常平均太陽日を單位とし、太陽が春分點を連續して二回通過する時間の三百六十五日五時四十八分四十六秒^{時以下、秒ノ一}により計算す。

曆 又便宜に依り人爲的に一ヶ月を日の整数倍とし一ヶ年を月の整数倍とし其内の各日に名を付したるものを曆と云ふ、我が國にては貞享二年支那より來れる太陰曆即今日云ふ舊曆を使用したりしが、明治五年十一月以後太陽曆を採用することとなり、同時に明治五年十二月三日を六年一月一日とし、今に及べり、されど邊陲或は海岸の地にありては、尙一般舊曆に據る所ありしが、明治四十三年より曆の上にも太陰曆を絶版することなれり。太陽曆に於ては三百六十五日を以て曆平年と爲せど、實際平均太陽年は前既に述べし如く三百六十五日四分の一にして、四年間に約一日の差を生ずるを以て、四年毎に一日を加へ三百六十六日の一年を設けて之を閏年と云ふ、然れども一年の端數は一日の四分の一に充たざるが故に、四百年を終ふれば略三日の差を生ず、依りて世紀の終即百年目は平年とし只世紀の數か四にて整除し得べき時に限り其年を閏年とし、四百年間に三日の閏年を廢することゝせり、斯くの如くすれば差異極めて僅少となり、三千年を經過するも尙一日に達

せざるを以て、之れによりて一致せしむ。

明治三十一年五月勅令第九十號、神武天皇即位紀元年數の四を以て整除し得べき年を閏年とす、但紀元年數より六百六十を減じ、百を以て整除し得べきもの、中更に四を以て其商を整除し得ざる年は平年とす。

【太陽曆ノ沿革】 シーザー曆 グレゴリー曆 太陽曆に閏の起る原因は、地球が太陽の周圍を廻る時間の端數にして、即ち地球の公轉によりて太陽を一周する時間は自轉する一晝夜の三百六十五倍と約四分一なり、此約四分の一——精密にいへば五時四十八分四十六秒七秒なる端數は頗る面倒にして此を切り捨つれば其が積り積つて終には正月に櫻が咲たり、紅葉したりすることになる、故に之を鹽梅する爲に閏といふものが設けられた譯である。今日の太陽曆はローマのシーザーに依て作られ、此曆の制定されたは、實に羅馬開基後七百八年、基督降誕前四十六年なり、其までの羅馬はママ曆にして、毎年曆を定むるは僧官の役目なり。然るに此役當時に政治家の爲に私を行ひ、選舉の時機を早めたり遅くしたりせんが爲に、故らに曆を變更したるにより次第に時候の差異生じ、シーザーの頃には曆上の彼岸は眞の晝夜平分時より三月も前に來るといふ始末にして、故にシーザーは大に天文學者を會し、全然曆の改正を斷行し、太陽に關する事を廢し、専ら太陽のみを主とした太陽曆を制定し、其年には特に九十日を加へて、一年四百四十五日の一年として、時候の差異を正せり、此シーザー曆では太陽の回歸年を三百六十五日と六時間と算定せしを以て、四年目に一日の閏を設け、平年三百六十五日、閏年三百六十六日とせり。從て大の月を三十一日、小の月を三十日とし、一、三、五、七、九、十一の奇數月は六、二、四、六、八、十、十二の偶數月は小とし、獨り二月のみは閏年は三十日、平年は二十九日と至極規則正しいものに定めたり。然るに此曆は一年につき十一分と十三秒の誤算あり、此誤算は誠にしつゝなれども歴代で山となり、夫より千六百餘年を経たる千五百八十年代には、三月二十一日にあるべき彼岸は其月の十一日に來れり、換言すれば曆の日附が地球の眞の位置より十日も

遅れたることを發見せり。故に時の法王グレゴリー十三世は伊太利のヴェニスに世界の天文學者を召集し、曆算の協議を凝らしたる結果曆を十日間進めることとし、同年十月五日を十五日と改め、曆法に改正を加へたり、即ち從來のシーザー曆の四年に一日即ち二十四時間の間に於ては時間を超過す、其の超過は即ち約百分の三だけ間の時間が多過ぎる、故に百回閏を置く所を九十七回にして略精密なり、百回の閏といへば四百年間なるを以て此四百年間に三回閏年を省けば可なり、此算法により四百年に三度閏を省くことに決定したるものが即ちグレゴリー曆なり。所で此四年に一度の閏を省くは四百年に三度省く間はいづれの年に定むべきかといふに成るべく判り易い年を佳とす、故に歐米諸國にては基督降誕紀元年數の四で割り切れる年を閏年と定め、尙紀元の年數を百で除し切れる年は閏年でありながら閏を已めて平年とし、四百で除し切れる年は閏を其儘置くとせしめり、我國では明治五年太陽曆を採用した當時は「神武天皇即位紀元年數より六百六十を減じ四を以て整除し得べき年を閏年とす」とありしを以て、日附だけはグレゴリー曆に符合せしめしも實はシーザー曆を採用した姿となれり、故に明治三十三年は西曆の千九百年で此年依然閏を其儘に置くに歐米諸國より日附が一日遅れるを以て三十二年五月勅令を發せり。曆上の逸話 曆に關する歴史上の逸話多く、而も此を知らざれば曆に就て最も普通なる事柄にても解すること能はず。例へば七月と八月と大の月が二月も長くに何故に二月を二十八日とし、他の月よりも三日乃至二日も短縮せしめたるか、此等は歴史上の因縁を知らざる時は解す可らず。二月の二十八日なる理由 現今世界の各國に行はれる太陽曆は其源は羅馬に發す、然るに羅馬の古曆たるロミラス曆にては一年を十ヶ月とし、マーチ(今の三月)を正月と定め、後ママ王此を改正して二ヶ月を加へ一年十二ヶ月とせり、此時シヤヌア(一月)とフェブア(二月)とは附加へられたり。當時シヤヌアは歳首、フェブアは年末に加へられたるを以て、順序は今と顛倒せり、其後現今の如く順序は變更せられたり。當時の羅馬人は晝夜平分時即ち彼岸を重んじし昔より三月を正月とせし習慣とは、其の前に來る月を以て歳末と同様に取扱へり。此習慣にてシーザーが太陽曆を採用し、始めて平年を三百六十五日閏年を三百六十六日とせし時二月を他の小の月よりも一日減じ、平年二十九日、閏年三十日とせり。然るにシーザーが不慮の兇變に遭るや、羅馬人は彼が功績殊に曆の上に於る功績を頌する爲め、從來クインクツリウスと云ひし彼の誕生月(七月)に彼のジュリナ

ス、シーザーの名を冠してジュライと改稱せり。其後シーザーの子ガイウス皇帝に即くに及び、國民が其父になせし所を、自ら爲して其名を不朽に傳へんと欲し、其誕生月(八月)のセキスツリスと云ひしを改めてオーガストと稱せしめたり。然るにシーザーの太陽曆にては奇數月が大にして偶數月が小なるを以て、隨て八月に自己の名を冠しても父の誕生月七月とは違ひ小の月なるが故に面白からず、專横なる彼は平年二十九日なる二月より一日を取り、此を自己の月に加へ七月八月と大の月を續け、從て爾餘の月は奇數月を小とし、偶數月を大と改めたり。之れ二月が平年二十八日、閏年二十九日たる所以なり。

西洋月名の由來 此歴史上の說明に依て、二月の特に普通の月より短い理由は判然せしと共に、語學上の智識を有するもの、月名に關する疑問をも氷釋せしむるを得べし。即ち今日歐洲語に於て月名を呼ぶに一月より六月までは祭典の名を以てし、七八の兩月はシーザー父子の名、九月より十二月までは羅句語の數字を基礎としたるに、現時の月の呼稱は二月月づゝ選れてセアテンバーのセプトは七を意味し、オクトバーのオクトは八を意味するが、實際は九月十月の名となれり、ノーベンバー、デセンバーにおいても同じく、此等は皆ロミユス當時における十ヶ月の月名がママ曆に至りて新にシヤヌアリーとフエグアリーとを附加せられたに依て二月宛繰延されたに原因するものなり。

東西人情の相違 曆の研究を爲す上において著しく感ずるは東西人情の差違なり、シーザー曆は千五百八十年法王ケンゴリーに依りて改正せられ、此改正が歐洲一般に行渉るには餘程の年月を要せり、即ち法王の勢力で舊教國は比較的早く此を採用するに至りしも、新教國は容易に採用せず、殊に英國の如きは千六百七十年代に至り漸くケンゴリー曆を採用せり。而も其時日附を他の諸國と一致せしむる爲に、勅令を以て十一日だけの日附を飛せしを以て労働者の多數は王宮に押寄せ、十一日間の労働賃金を支給して我等の損失を償ふにあらずんば此勅令を奉ずる能はずと怒號せり。此等の事は日本人には滑稽に感ずれども一般に保守的なる歐洲人には中々以て滑稽所にあらず、現にケンゴリーが曆法改訂以來三百五十年に垂々とする今日まで尙希臘教を奉ずる露國人は未だに此に従ふことを肯せず、露國民は未だシーザー曆を奉じ當時十日の差なりしものが十三日の差を生ずるに至りし今日まで改めず。全世界中獨り特殊な正期を奉ず。此等歐洲人の眼より見れば年の暮に約三十日も日附を飛ばされ、明治五年の十二

月三日を翌六年の一月一日とせられたるも何の苦情もなかりし我國人の如き進歩的氣象の盛んなるものが習慣を保持する執着力の乏しきか乃至は無頓着なるか判断する能はざるなり。然し曆法改正の布達に何の苦情もなかりし我國人は爾來三十八年を経た今日に至るも、尙舊曆を併用し愈々曆面より舊曆を削除されし明治四十三年以後も月齡により推算して舊曆を喜ぶものあるは、實に滑稽の極なり、是れ我國人の熱考を要すべきことならずや。

春王正月の解 然し一國にて二種以上の曆を使用せしものは必ずしも珍らからず、古來其例甚だ多し、彼の春秋に春王正月とあるものは孔子が周を宗とするより其正期を奉じ特に周の曆に依れりと断はりしものにて、而して我國にては舊曆を新曆に改めた年、即ち明治六年の新曆に舊曆が相當したる月日を以て歴史上の月日と定められたり。一例をいへば神武天皇の御即位は正月元日であるが新曆明治六年の二月十一日が舊の元日に當りしを以て爾後毎年二月十一日を紀元節と定められたり、此は歴史上の月日を其時候に合して傳へんとしたるより起りしものにて、今日地方に行はるゝ一月遅れ曆なるものは、此と同じ理由を以て存在せり。

埃及の曆 尙ほ埃及の古曆は世界中最も早く發明されたる太陽曆にて太陽の盈虚に關係せず、一年十二ヶ月三百六十五日とし、毎月は必ず三十日、大小の區別あることなく、年末に五日の閏を附したるものなり。然るに此にては四年に一日の過剰が生ずるを以て四年目に一日づゝ五日の閏を四日としたり、此曆は最も古き曆としては聯合に最も合理的ものなり、又以て當時埃及の文明が非常に進歩したることを証すべし。

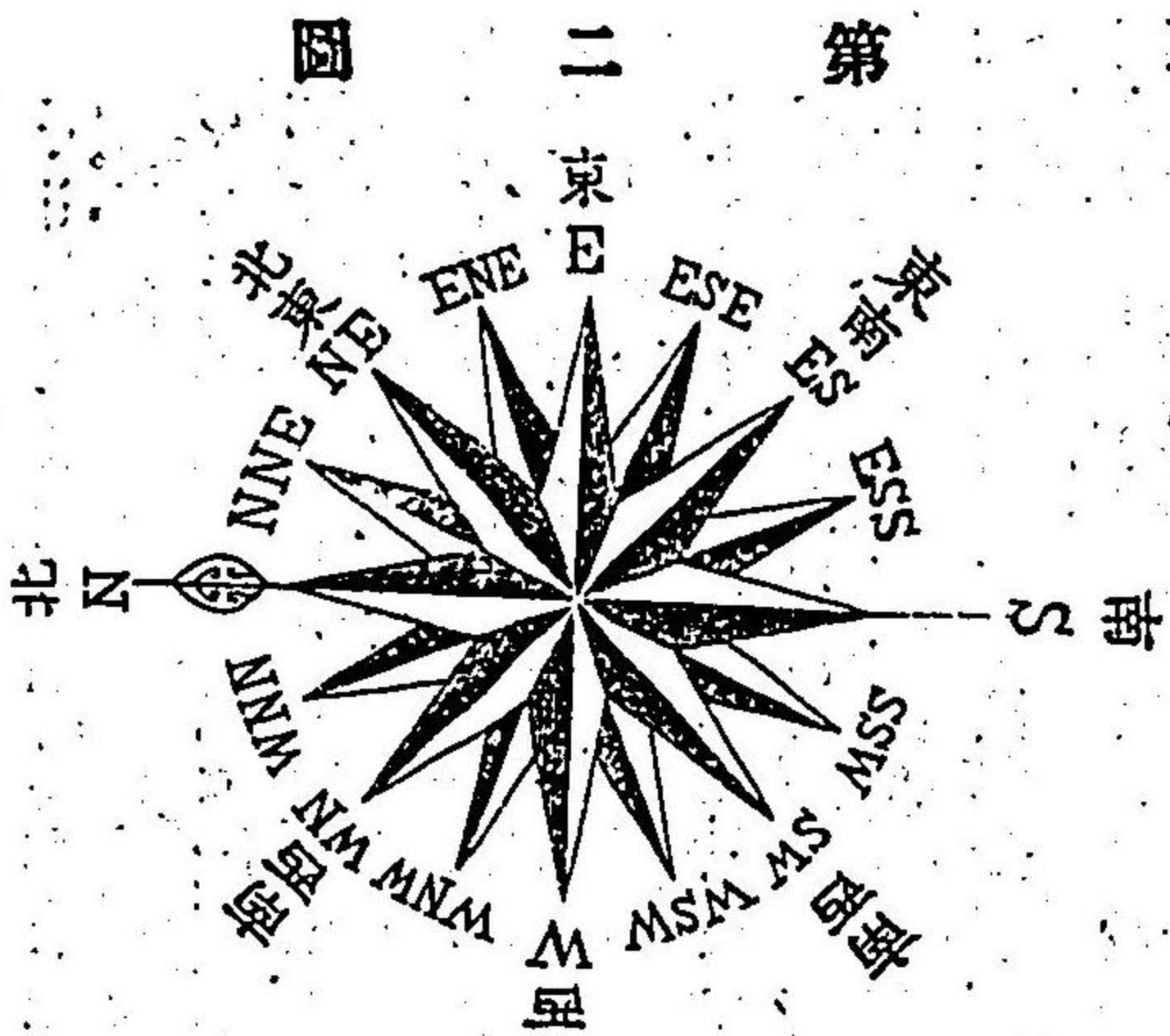
【方位】 東西の方位は春分秋分の日に於ける日出日没の方向により之を定むべく、之に直交せる方位を南北と云ふ、北方は北極星又は磁針によりても略之を知ることを得べし。而して東西南北を四方位と云ひ、更に八方位、十六方位に分つべし。

【方位の定め法】 方位は普通磁石針によると雖、磁石針必ずしも正北を指すものにあらず、磁石方位と稱し、眞北位より西又は東に偏するを常とす。日本にて磁針は約四五度西に偏するなり。眞に方位を知らんと欲せば、北極星によりて眞北を定め之によりて他の方位を求むべし。

其法は北斗七星の下部の第六星と第七星との距離約五倍の所に輝く一星あり、是れ北極星なり。此星は其位置必ず一定すれば、此星に當る方其地の正北なり。已に真北を知らば他の方位は自ら知るべし、而して四方位、八方位、十六方位等は二圖によりて知ることを得べし。

【地球表面に於ける位置の決定】

地球表面に於ける一地點の位置を決定するには、緯線及經線と稱する二線に依りて之を定むるとを得べし、地球表面上に南北兩極より等距離の地點を聯らね二大圓線を描き之を赤道と稱す、是れ即ち緯度を計る基點なり、之に平行して等距離に圓線を東西に描き各之を九十度に劃し、兩極に及ぶ、而して赤道と其の一地點間との角度を以て其の地點の緯度を定め、其の赤道以北にあるときは北緯と稱し、以南にあるものは南緯と呼ぶ、即赤道は〇度にして漸次南北に進むに従ひ其の度高まる、一度を六十分に分ち、一分を六十秒に分ち、而して赤道より南北各二十三度半に當れる緯線は回歸線といひ之に南北の名を冠す(又北を夏至線南を冬至線とも云ふ。)又兩極より各二十三度半にある緯線を稱して南極圈或は北



南緯と云ふ。

次に兩極を通じて、赤道と交叉する縦の線を經線と呼び、其の方向が赤道より南(午)北(子)に當るを以て子午線の名あり。子午線は通計三百六十度に等分し一地の經度を數ふるに普通列國規約により、英國綠威天文臺を通過する子午線を本初子午線なし、是により東西に東經幾度、西經何度と數ふ、經度を度分秒に分つこと緯度に同じ。斯くの如く經度と緯度とによりて、地球上各地點の位置は容易に定むることを得べし。即ち我が東京天文臺の位置は東經百三十九度四十五分北緯三十五度三十九分なりと。左に我國重要地たる測候所の位置を表示せん。

地名	北緯	東經	地名	北緯	東經
鹿兒島	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	那霸	二六°〇〇′	一三〇°〇〇′
宮崎	三二°〇〇′	一三〇°〇〇′	鹿兒	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
三浦	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	熊本	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
佐須	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	佐賀	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
口津	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	長崎	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
大原	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	福岡	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
大分	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′	門司	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′
			唐津	三三°〇〇′	一三〇°〇〇′

下ノ開	岡山	宮津	淡田	松山	神戶	京都	和歌山	津	名古屋	岐阜	武豊	福井	金澤	甲府	東海	前橋	福島	山形	札幌
120°30'	135°00'	140°00'	145°00'	150°00'	155°00'	160°00'	165°00'	170°00'	175°00'	180°00'	185°00'	190°00'	195°00'	200°00'	205°00'	210°00'	215°00'	220°00'	225°00'
廣島	境	四郷	高知	徳島	大坂	宮津	伏見	七日	四日	清水	彦根	長野	新野	横濱	水戸	宇都宮	秋田	青森	函館
130°30'	135°00'	140°00'	145°00'	150°00'	155°00'	160°00'	165°00'	170°00'	175°00'	180°00'	185°00'	190°00'	195°00'	200°00'	205°00'	210°00'	215°00'	220°00'	225°00'

経緯度の測定

【経緯度の測定】 地球の自轉は二十四時間を要し、従つて經度一度の旋轉に四分時を要するを以て、經度十五度を隔つる地點にありては正に一時間の時差を生ずる割合となる。されば今某地の經度を知らんと欲せば某地の時刻に合せ置きたる時計を携へ、知らんとする某地の地方時との時差を知ることによりて測定し得べきなり。又緯度を定むるには、地平線上北極星の高度を測るにあり。是れ地球は絶えず旋轉すれども地軸の方向は殆ど變ぜざるを以て、北極星の位置も亦變ずることなく、北極に於ては之を天頂に仰ふぎ赤道にては地平線上に望むべし。又北極星の觀測不便の處にありては、位置の既に定まれる他の恒星を以て代ふることありと知るべし。

標準時

【標準時】 太陽の方向に準據したる時刻を其の地の地方時と云ふ。地方時は經度の異なるに從ひ變ずるものなれば、交通複雑なる文明國にありては、その不便を償はん爲め、一定の子午線上に於ける時刻を以て一國又は一區域内の時刻と定め、之を標準時と云ひ、各地同一の時刻を用ふることとせり。我が國にては領土の擴張と共に、中央及西部の二標準時を定め、之れに準據することとなせり。

中央標準時

中央標準時 東經百三十五度の子午線に於ける地方時を中央標準時とし、琉球沖繩島以東は之に準ふ。百三十五度は由良海峡、播磨國明石微東、丹波國福知山の西、丹後國の西部なり。

西部標準時

西部標準時 東經百二十度の子午線に於ける地方時とし先島諸島以西臺灣澎湖島地方は之に據る。百二十度線は臺灣と澎湖島間に當り、中央標準時より、一時間の差あり。即ち英國綠威子午線との間に航者は九時間後者は八時間の時差を生ずる理なり。

日附變更線

日附變更線 時刻は經度を共に異るものにて、經度十五度に一時間の差を見る故に、日附變更線ヲ示ス



内地より臺灣に到らんには一時間後れしむべし、されば今茲に東西に進航するに船あり

とせば、西航する船の一日は二十四時より長く、東航する船の一日は之より短し、かくして其差積りて地球を一周し歸る時は、自然日付に差を生ずる不都合ある理なれば之を一致せしむる必要あり。日付變更線(經度百八十度)を定め、西向して此の線を越ゆるものは一日を抜き、東する者は一日を重ねることとせり。

氣候帯と氣候

【氣候帯と氣候】 地球表面の太陽熱收受の量は、常に晝夜の長短に關するのみならず、緯度の高低によるものにして、之れにより地球の表面を左の氣候帯に分つを得。

熱帯

一、熱帯 赤道の南北に於て兩回歸線内にある地を含む(即二年二回太陽の直射を受く)されば此帯の氣候は、四季氣温の差極めて小にして、晝夜氣温の差却て四季氣温の差より大なり、『熱帯の冬は夜にあり』と云ふ、眞に至言なり。高温多雨は熱帯氣候の特性にして所により時に大旋風の氣候を變化せしむる外は、氣候の變化極めて小なり。

寒帯

二、寒帯 南極圈内及び北極圈内にある地を包括す、一年に一回は太陽の出没なく、太陽は二十四時間地平線下にありて永夜の日生ずることあり、兩極にては尙半年晝にして半年夜の奇觀を呈す、寒帯の氣候は、氣温甚低く、西風常に吹き、且四季氣温の變化最大に、冬の頗る長きを以て特性なりとす。

温帯

三、温帯 熱帯と南北寒帯との間、即兩回歸線より兩極圈に至る迄の地域を含有す、太陽決して直上に來ることなく、又常に出没して永夜の日を生ずることなし。此の帯中の氣候は、四季變化の有様頗る著しく、内地は海岸より雨量少く、四季氣温の變化大なり、従つて大陸性氣候と海洋性氣候との二大別あり。

【氣候帯の區分法】 獨逸の、ブーレン氏は一ヶ月平均の等温線を以て氣候帯を區分するの標準とし、即ち攝氏二〇度の等温線にて圍まれたる地域を熱帯とし、零度及び二〇度等温線の間に圍まれたる地域を温帯、零度の等温線にて圍まれたる地域を寒帯とせり。

氣候

【氣候】 氣候即風土は一定の時期に於ける天氣の變化にして、時と場所とにより各地甚複雑なるものなりと雖、曩に云へる如く各氣候帯に於ける變化は稍律すべきものあり、而してその變化の主因は大要左の如し。

緯度の高

一、緯度の高低 之れ場所に於ける原因にして、即水平的異同を云ふ。氣温の本源は素より太陽熱にありと雖、受熱の次第は熱線が一度地表を温めて之が輻射するによるものなれば、寧ろ下部より暖まるものと考へて差支なかるべし。されば緯度の高低によりて太陽は直射し或は斜射するを以て、直射する低緯度の地は其の温度尤も強く、それより緯度を數ふるに隨ひ斜射するを以て温度も亦微弱となる。故に赤道附近は太陽一年に二回直上に

土地の高

來るにより高温なれど、兩極に近づくにつれ、漸次低下するは太陽の高度漸次低くして地を斜射するによる、されば氣温の高低は緯度の高低と全く反比すると云ふを得べし。

二、土地の高低 前と同じく場所による原因にして、即垂直的差等を云ふ。氣温は主として地面の放熱より來るものにして、一般に高所に上るに従ひ氣温の低下するは一は上層空氣の稀薄なると、氣流の轉換迅速にして温め難きに因ると雖、畢竟するに土地の面積小にして、輻射面の狭きに因る。高山の頂上の温度低く、平地の温度高き所以は其の輻射面積の廣狭に因るものと知るべし。

水陸の分布

三、水陸の分布 陸地は温度を受容すること速きと共に放射することも亦早し。之れに反し水は徐々に熱を受けて徐々に之を放射するが故に、沿海地の寒暑を和ぐるに比し内陸は其の差大なり。

山脈の方向

四、山脈の方向 山脈は温熱及び風を遮り、雨雪を下す。山脈の方向若し北半球の、南方に於て南北に連亘せんか、日光を遮り、温暖なるべき地向寒風の襲來すべく、温度從つて低下するも、北方に於て東西に山脈蛇蜒たらんか、全く之に反すべし。而して南半球は又北半球と相反す。而して高山或は山脈の重疊する地方は嵐多く氣温低きを常とす。

風の方向

五、風の方向 北半球にては南風を受くる地方は温度高く、北風の多き地方は低し。南半球に於ては全く之に反す。是れ風は其の吹き起る地の温熱を取りて、之を往く先き先きに傳播するを以てなり。

海流の影

六、海流の影響 洋海は温熱の收散遲緩なるにより氣温に影響を及ぼす。而して長く保蓄する熱が其の流動作用たる海流に依て其の分布に至大の關係を與ふるものなり。暖流に洗はるゝ海岸と、寒流の接近せる海岸とは自ら氣温に高低を見る。即我が北海道又は奥羽地方に於ける東西兩海岸に於て氣温の差あるは之れが爲なり。其他、土質の相違、濕潤と乾燥、沃瘠等の如き、或は森林の有無は、以て温熱の收受散に影響し、寒暑の激變を防ぐも、草野沙漠は寒暑共に激し。斯く氣候は水陸温熱收受散の關係及び之に伴ふて起る風雨の影響とが其の重なる條件にして従つて之を傳播し、或は調停防止する地理自然の状態に依り、各地其の趣を異にするものなり。

第二章 日本の位置

位置を表示するに、便利上之を隣接せる四周の國際よりするものと、一は地理學者の所設にかゝる經緯度に依るものとの二つとし、前者を國際上の位置とし、後者を數理上の位置として之を述べむとす。

國際上の位置

【國際上の位置】 (四周の境域による比較的推定)我が國は亞細亞洲の極東、北太平洋中に羅列せる島嶼國にして、東北より斜に西南に延び、宛かも蝸牛の脱殻して東北に匍匐して角を振るの狀を呈せり。東は渺茫たる北太平洋に枕み、北は千島海峡(オホーツク海)并に北緯五十度線を以てアジアロシアと境し、西は日本海、黄海、東支那海、及び臺灣海峡によりてシベリア、韓國清國と對し、南はバシー海峽を隔て、アメリカ合衆國領フロリダ諸島に、東南は南島島(Mareus)硫黃島より、ウエーク島(Wake) マリアナ諸島(獨逸領)に連る。全長凡二千三百里の間に斷續して世界の最狹長國として、南米智利に比すべく、形勢は東亞の海岸を掩ふ一列の防波堤と見らるべく、外人夙に花彩島の贊辭を冠せりと。

由來陸塊を以て外邦に隣接することとなりし純然たる海境國も、茲に版圖の擴張は明治三十八年九月五日ポーツマ
スに於ける講和條約調印終了と共に、島嶼國たるの國籍は免るべからざるも、純海國として英本國等とこれを同
じくせざるに至れり。

數理上の位置

【數理上の位置】 (經緯線に基ける正確なる數理上の計定)

極西、東經百十九度十八分 (澎湖島水按澳花嶼西端)

極東、東經百五十六度三十二分 (千島占守島東端)

極南、北緯二十一度四十五分 (臺灣恒春廳至厚里七星岩南端)

極北、北緯五十度五十六分 (千島アライト島北端)

故に南僅かに熱帯に入る外、總べて北温帯内にあり。而して其の中央緯度は三十六度二十
分 (水戸、高崎、上田、金澤) 等にして、韓の南部、黄河流域、ペルシアの北端、小アジ
アの南端、ギリシアの南端、ジブラルタル海峡、北米合衆國の中央と其の緯度を同じくす。

位置より見たる利益

【位置より見たる利益】

健全なる姿勢を保ち、良好なる位置に立てる邦國の隆昌に越

く可きは敢て多言を要せざるべし。然らば我日本は如何。
一、我が國は島國なり。海は障壁なく、進取膨脹は自由なるべし、而して交通の多くは
海洋にあり、文明の輸入は猶よくを海洋に負ふ。他邦と陸接する境域僅に樺太の一部のみ

なる本邦の、開國以來大陸の戦亂に關與せるなく、他國の侵害を受けたることなく、獨立
して能く穩健なる發展を爲すことを得、史績に汚點を止めざるも是れ本邦自然の形成に負
ふところ多し。

二、健全なる姿勢は東亞を擁し大洋に張る。東亞の全面を掩ふ我日本の姿勢は、自ら東

洋の覇權を掌るべき使命を有するが如し。文明の夙に胚胎せるの國、新知識の收容に多忙
なる國として、世界最多の人口を有する支那大陸と海を隔て、相對し、地理學者が大と不
可測との言を冠らしめたる全亞細亞の、文化啓發の嚆望を双肩に擔ふ。世界の何れの國と
雖事を東亞に爲し、利權を東亞に擴張し維持せんとせば、之れが防波堤として立つ帝國に對
して憚なき能はざる可し。富源窮まりなき北米大陸を東に控へ、南は南洋諸島の珍品異産
を收むべく、西北はシベリア鐵道により陸路歐洲に通すべし、斯く東西洋の距離は短縮せ
られ、世界の列強相競ふて、互に商業上の利權を獲得せんと之れ努むる時、而して其の刻
下の競争場裏は太平洋にありと云へば、又以て皇國の位置が兵要上、商業上、交通上如何
に良好なる位置を占むるかば、自ら明かなるべく、之を利用して造化の惠澤に酬うるは、
一に國民の責務なるを自覺せざるべからず。

第三章 日本の廣袤

位置上我國が如何に有利なるかを明にしたれば、茲に尙位置上の利益を遺憾なく收め得て之を利用し發展する丈の地積及自然狀態が有望なるや否やを説かん。

約二萬九千方里を計上するの面積を有する我が國は、六大島、二列島、二群島とに大別す而して周圍一里以上の島約五百もあり、總數は四千に近しと稱する數多の島嶼より成れり中央の最大島を本州(本土)と云ひ、次ぎの大島は北にありて十州島(北海道本島)と謂ひ九州、臺灣、樺太之に次ぎ、四國島之に次ぐ、二列島は千島及琉球の列島にして、二群島とは小笠原及澎湖島を云ふ、其の他重なるもの佐渡、淡路、對馬、隱岐、壹岐等なり。今各島の面積、大小の比例を示せば左の如し。

土地	本地	屬島	合計	百分比例
本州	一四,四九,三二 <small>方里</small>	六,九二	一四,五七,三三 <small>方里</small>	四九,六
十州	五,〇五,六	二七,〇九	五,〇八,六七	一七,三
九州	二,三二,六六	三〇,五,六	二,六三,二二	八,九

臺灣	二,三二,八五	五,六〇	二,三八,四五	七,六
樺太	?	二,〇七,〇〇 <small>方里</small>	二,〇七,〇〇	七,〇
四國	一,一五,二四	二九,四	一,一八,〇七	四,〇
千島	一,〇二,四	—	一,〇二,四	三,四
琉球	一五,九	—	一五,九	〇,四
小笠原	四,五〇	—	四,五〇	〇,一
澎湖島	四,一七	三,二	七,三九	〇,五
佐渡	五,三	—	五,三	〇,一
隱岐	三,八	〇,一〇	三,九	〇,〇
淡路	三,五	〇,四	三,九	〇,〇
壹岐	八,五	〇,八	九,三	〇,〇
對馬	四,五	〇,七	五,二	〇,一
總計	二六,三三,三	四二,五	二六,七五,八	一〇〇,〇

尙之れに關東州租借地二二八方里我國と特殊の關係を有する韓國の一四一四七方里を加れ

は實に四萬三千五百四十八方里(二十五萬九千五百余方哩)となり。廣袤上より見る時は末だ英、露、佛、米等に譲る數等にして到底、一大強國たるの資格を有するものと云ふべからざるなり。(樺太の面積は精確ならず。二千方里、又は二千二千方里)

三連の弓形と稱へたる如く、狹長なる帝國は幅員尤も廣き所にて尙六十里を出です、(長さ幅の〇、〇四八)長さは濶さの約二〇倍に相當するを以て、其の規模の小なるは明かなり。

【七大強國の面積人口】 最近の調査に據りて世界七大強國の面積人口を示せば左の如し、(但し領地を含んで併せて清國を附記す。)

英 國	(面積人口)	二、〇〇〇、〇〇〇方哩 三、〇〇〇、〇〇〇人	露 國	(面積人口)	八、〇〇〇、〇〇〇方哩 一、〇〇〇、〇〇〇人
米 國	(面積人口)	三、〇〇〇、〇〇〇方哩 一、〇〇〇、〇〇〇人	獨 國	(面積人口)	三、〇〇〇、〇〇〇方哩 六、〇〇〇、〇〇〇人
佛 國	(面積人口)	四、〇〇〇、〇〇〇方哩 六、〇〇〇、〇〇〇人	伊 國	(面積人口)	三、〇〇〇、〇〇〇方哩 三、〇〇〇、〇〇〇人
埃 國	(面積人口)	三、〇〇〇、〇〇〇方哩 三、〇〇〇、〇〇〇人	清 國	(面積人口)	三、〇〇〇、〇〇〇方哩 三、〇〇〇、〇〇〇人

第四章 日本の地體構造

日本群島は亞細亞洲の東沿岸に於ける地理學者の所謂陸島の一部にして、大陸縁邊を圍める一大山系の海上に露出せるものなり。即ち群島の全形三弧を畫き、臺灣島及び琉球、本土(中央)、千島の三彎より成立し、南西より北東に連亘せり。

臺灣琉球彎、南方、臺灣を起し、先島群島となり、琉球諸島となり遂に薩南諸島より九州島に來りて本土彎に接続す。臺灣にては支那南部及びフィリピン諸島と一葦帶水を隔て之れより琉球列島の一大彎を成して北東に延ぶ。其の方向支那南清の山系と略同じければ恐くは彼れと同一系統ならん。而し、琉球は單に此の山系のみより成るに非らずして、此の隆起帶の周圍は珊瑚礁にて構成せらるるもの少からず。

本土彎、九州島、四國島、本土(本州)北海道本土、樺太島其の他の島嶼を包括する中央群島を本土彎(中央彎)と云ひ、三彎中最も宏大なるものにして二箇の地體構造より成れり。其の一は南西の方より來り、九州島、四國島並に本州の西部を貫きて本州中央部に赴くを南彎と云ふ。南彎は遠く支那の崑崙山系の地體骨格と同一系統の構造する所にして、

之を南日本と云ふ。其の一は北北東の方、樺太島より北海道に亘り宗谷岬より北海道本島を貫き本州の中央部に達するを北緯と云ひ、地體の骨格は樺太山系と同一系統の構造する處にして之れを北日本と云ふ。

南日本と北日本とを區劃する線は富士、釜無、犀、姫川を通する鴻溝なり。

真狩山系 支那の西方バミール高原に起り中流を東西に連亘し、遂に揚子江の下流附近に於て海に没し再び本邦に現はれ九州南部山脈、筑紫山脈(九州北部山脈)四國山脈、紀伊山脈となり志摩に至り伊勢海に没し、三河に現はれ遂に赤石山脈となる。其の一派は筑紫山脈に接続して、中國山脈、丹波高原、美濃飛騨高原となり、以て信濃の境上に至り共に富士帯火山脈と接続す。

樺太山系 樺太より起り十州島(北海道本道)に亘り、蝦夷山脈日高山脈となり中央を南北に走り、本州に來り中央分水山脈、北上山脈、阿武隈山脈、關東山脈、羽越山脈となり甲、信、武の境上所謂富士帯火山脈に接続するものなり。

此の南北二大帯の結節せる處邊に於て現出したる高峻の隆起を富士帯とす。南方遙にマリアナ群島より起り、硫黄列島、小笠原群島、豆南諸島を経、伊豆半島となり、本州島を南北に横断して、南北日本の境界線をなす。

然り而して本土帯は日本海の陥落と共に西北方より壓力を被りて東南面に向て彎曲し、太平洋に面する即南東面の地體にありては地層整然として發達し、新古の水成岩層規則正

しく排列をなし、又火山岩に乏し。之を外面又は表面と爲すべく、此西面の日本海岸にありては地層甚だ錯雜して火山岩多し、之を内面又は裏面と稱す。此の表裏兩面の分界接合に當れる縦断線は中央線と呼び、火山は多く此の線に沿ふて噴出せり。而して中央線以東の地を表日本と云ひ、以西の地を裏日本と云ふ。

千島帯、カムチャッカ半島に起りて、千島列島を北々東より南々西に連亘する火山脈に屬する隆起帯にして、遂に北海道本島に接続す。

第五章 日本の山系

地形細長く四周繞海の帝國は、土地の相貌亦複雑にして、山は幾多の小區劃を爲し、島國たり山國たる特殊の自然人文の情趣を伴ふ。されば島國として海を知り、山國として山を知り、此れが人文と相關の裡に、皇國の前途を尋ぬるは、將に吾人國民の本分を完うする所以にあらざるなきか。

臺灣山脈

【臺灣山脈】 主幹山脈は即臺灣山脈にして地體構造上臺灣琉球系に屬す、本島の山脈は其の趨勢簡單にして主幹山脈は、島の中央より稍東に偏し島の長軸に並行して分水嶺をなす、起端は南岬の北部に起り、北々東の方向に蜿蜒し、雪山近傍に於て北東に轉じ、蘇澳附近にて海に入る。新高山は其の最高峯にして海拔四千米を越へ實に本邦第一の高峯なり其他高峰尠からず。島の北部には大屯火山脈の噴出するあり。西南澎湖島より來り、尙北東して沖繩島の西部より薩南諸島を経て霧島火山脈に連る。臺灣山脈には、直径二十余尺に亘る大槍を有する山林あり、臺灣の財源たる樟腦樹も亦之の山脈の所産たり。

九州南部山脈

【九州南部山脈】 九州南部の骨格をなせるものにして、薩摩の西海の飯島に起り薩摩の

北部より東北に走り、日向の西部に於て稍南北の方向に近づき南々西より北々東に向ふ。肥後の南部は即ち此脈にして、高峻山岳尠からず。市房山は九州第二の高峯にして肥日の境上に屹立して、海拔千八百二十米を指し、其北には祖母岳高聳して肥豊の境上にあり。海拔千九百八十五米、これ九州第一の高峯なり。それより此脈は豊後水道に没す。

霧島火山脈

【霧島火山脈】 九州南部山脈の西南にあり。川邊七島(寶七島)より、口之永良部島の新岳(七六四米)及硫黃島より。九州本土にては開聞岳(九二七米)に渡り、櫻島を起し、霧島山に至り其勢甚だ盛なり。

九州北部山脈 筑紫山脈

【九州北部山脈】(筑紫山脈) 九州の内帯山脈にして、初めは九州南部山脈の主軸と平行して西南より東北に走る。されど筑前御笠川の横谷に截れて東西二個の山塊となる。東は筑豊煤田を含める小山塊にして、西は背振山塊なり。此脈は東北に走りて馬關海峡に没す。

阿蘇火山脈

【阿蘇火山脈】 九州南北兩山脈の峽間に噴出して、肥前の多良岳(二二三米)に起り、温泉岳(二四八六米)に連り、熊本の西、金峰山を起して本脈の盟主たる阿蘇山に連接す。阿蘇火山は肥後の東境に聳え、世界に著名なる大火山なり。其の最高は高岳にして海拔千六百九十米に達す。その北に九重火山あり、その東北に鶴見岳(二四八〇米)及由布嶽(一七一

七米)の兩火山あり。阿蘇火山脈地方は集塊岩廣く分布すれば、流水の浸蝕を受けて奇景を造る奇怪の絶壁、峽流等自ら詩趣を湧然たらしむ。豊後の耶馬溪、肥後の小耶馬溪の如きものは是れなり。此脈は豊後の國前半島の双子山を起し、四國に入り、紀伊半島を渡り、三河の寶來寺山に連る。

四國山脈

【四國山脈】 四國島の北部に主軸を有し、西南西より東北東に走る。石槌山は脈中の高峰にして二千九十七米、劔山は脈中の最高峯にして、海拔二千二百四十二米に上る、別に讃岐山脈なるものあり、吉野川の縦谷を隔て、四國山脈の北を走り、鳴門海峡に没す。

中國山脈

【中國山脈】 中國地方の脊梁をなす山脈なり。東西に走り、高原性にして、五百米の山陵不規則に蜿蜒す。千米以上の高山少し。西は長門より起り、山陽と山陰との境界となり、數箇の三國山を起し、東に走り丹波高原を経て、美濃飛驒高原に連る。

丹波高原

【丹波高原】 中國山脈の東部にして琵琶湖に至る間に蟠る山塊を云ふ。其の西南部大阪灣に臨みて六甲山塊あり、其の北に與謝山塊あり、前者は最高九百米、後者は七百米を越えざる邱陵地なり。而して丹波高原第一の高峰は比良山(二二二二米)にしては琵琶湖の西に聳えたり。

白山火山脈

【白山火山脈】 中國山脈の北方にありて一連の脈を爲さ、れども西は三瓶山、次に大山等を起し、丹波高原の北部を走り、盟主白山に連る。

能登火山脈

【能登火山脈】 日本海上に孤立する山陰の孤島より、隠岐列島を経て能登半島の北部を起して佐渡に通せるものは能登火山脈の噴出せるものなり。

紀伊山脈

【紀伊山脈】 西は四國山脈を受けて紀伊半島の骨格をなすもの、東に走り三河の渥美半島に連る、大臺原山は脈中の高峰にして千六百八十五米に聳つ、熊野川の上流を隔て、西に大峰山陵あり、最高峰を彌山と云ひ、千九百二二米あり。紀伊山脈と、紀の川の流向を東に連ねて、伊勢國榑田川に連る縦谷を隔て、北に和泉、金剛、笠置、鈴鹿の四山脈あり。

赤石山脈

【赤石山脈】 西は紀伊山脈の末端を受けて渥美半島より東北に走り、天龍川を横きりて其の東部に蜿蜒する雄峻なる山脈にして、最高峰を赤石山とし(三〇九三米)に聳つ。

木曾山脈

【木曾山脈】 赤石山脈と天龍川を隔て、西に起伏する山脈にして、南々西より北々東に延び、其の脈中の最高峯を木曾駒ヶ岳(二八八〇米)となす。

飛驒山脈

【飛驒山脈】 信濃と飛驒との境上に崛起し、尤も雄峻なる山脈にして三千米に近き諸峯

を頂き、我國最高連嶺とす。一に乗鞍火山脈とも云ふ。御嶽、乗鞍岳、硫黄岳、立山等の諸火山を崛起す、何れも雄大なる山峯にて本脈を作るを以て、近時日本アルプスと稱せらる。

【飛驒高原】 飛驒山脈の西方飛驒を中心として西は美濃の北部、越前の東部に大高原あり全然五百米以上の高原にして、一に美濃飛驒高原とも云ふ。

【伊吹山脈】 濃尾平野の西部に起れる山脈にして、飛驒高原の西南部に連る、鈴鹿山脈の北にして、西には琵琶湖を隔て、丹波高原と相對す。

【齋達山脈】 白山山脈の北に起り、飛驒高原の北西、富山、金澤の平野を隔て、能登半島の頸部に蟠屈する山脈にして、齋達山は主山なり。(六八六米)

以上は已に我國の地階構造に付て述べたる所謂南嶺山系(崑崙山系)に屬する諸山脈にして、以下北嶺山系(樺太山系)に就いて述べんとす。

樺太山系と崑崙山系とは東は足尾山塊、關東山脈、西は木曾山脈、赤石山脈と接合、對曲す(對曲とは兩山系又は兩山脈を起せる褶曲が衝突して相對し屈曲せるを云ふ)此の南北の二大山系が互に相衝突せる本州中部は、對曲若くは斷層等諸種の地殼の變動を生じ、爲に二山系の方向たる、東北より西南に向へる線に、直角をなして地脈の罅裂線に當る處に

於て、地熱は劇烈なる噴火作用を逞しくして、こゝに海内第一の高山たる富士(三七七八米)を主峯とせる富士帶火山脈を噴起せり。

富士火山脈

【富士火山脈】 此の火山脈は、南はマリアナ群島より硫黄島、小笠原群島、豆南諸島、伊豆の火山半島を起し、箱根火山麓より盟主富士山となり、甲信の境上にある八ヶ嶽(二九三二米)、立科(二五三〇米)を経て信濃北境の高妻(二四二五米)、黒姫(一九八二米)、等より越後の妙高(三四五四米)焼山(二四四〇米)等の火山を起せり。

關東山脈

【關東山脈】 富士帶火山脈の東にある所謂對曲山脈にして、三ヶの山塊に分る。北は上野下野の境上に蟠屈せるを足尾山塊とし、千曲川の上流甲武信境上に纏結するを秩父山塊とし、その東南に群峙するを丹澤山塊とす。三山塊弧を畫きて關東の平野を擁せり、秩父山塊は最も高峻にして甲武信嶽に二千四百五十八米の高峯あり。

筑波、八溝山脈

【筑波、八溝山脈】 前者は關東平野の北にあり、後者は常陸と下野との間により、北に走りては阿武隈山脈に連る。

阿武隈山脈

【阿武隈山脈】 磐城の中央を南北に走り、餘り高峻ならざれども、一連の脈を爲し北は阿武隈河口に至る。其最高點を矢大臣山(二、一三四米)とす。

北上山脈

那須火山
中央分水
山脈

越後山脈

島海火山

蝦夷山脈

【北上山脈】 阿武隈山脈の北東、石巻灣を隔て、北上川の東を蜿蜒として南北に連亘す、最高峯早池峯は千九百九十六米の高きになる。

【那須火山脈】(中央分水山脈) 樺太山系の内帯なる中央分水山脈は奥羽の脊梁をなして南北に蜿蜒連亘し、殊に那須火山脈は分水山脈中に噴起し雄峻となる。那須火山脈は淺間山より北東に向ひ、榛名、赤城、日光火山彙、那須火山彙等、一直線に走り更に北に至りて吾妻、藏王、駒ヶ岳、焼山、岩手山、八甲田山、恐山等の諸火山となり、遂に十州島の擔振火山脈に連続す。現今盛に活動せる活火山尤も多く、本邦火山中最も噴出の激烈なる火山脈なり。

【越後山脈】 信濃川の東に起り、越後と上野、下野、岩代、羽前の境を蜿蜒し、駒ヶ岳(二二三〇米)飯豊山(一八八〇米)、朝日岳(二二四四米)、等は脈中の高峯なり。

【島海火山脈】 那須山脈の西に日本海岸を南北に走る、南は羽前の月山、盟主島海山より、森吉山、を経て岩木山に連る。

【蝦夷山脈】 北海道本島の中央を北々西より南々東に縦貫す、その北部を天鹽山脈と云ひ、南部を日高山脈と稱す、ヌタクガムシユベ(二二五四米)を最高峯とし、石狩岳(二

〇三五米)ピバイロ岳(二〇一七米)オプダテシケ(一九八〇米)等の活火山一列をなし、高峻なる山脈なり。

【擔振火山脈】 北十州道の西部にありて南は本州島の那須火山脈に接續す、北は利尻島に連りその北には増毛火山群あり。

【千島火山脈】 シベリアのカムチャッカ半島より起り南に走り、千島列島を噴起して北海道本島を東より西に亘り、蝦夷山脈と丁字形をなして結合す。

我が國は斯く地形狭長なるに國內山嶽重疊するを以て、殆んど二十五里以上海岸を離れることなく、而かも世界屈指の火山國とせらる。蓋し我國は亞細亞大陸の東縁に彎狀をなし東に深き太平洋の陥没地あり、太平洋は五大洋中最も深き海盤なるを以て大陸の、此の深き海に沿へる縁は大に地殻に弱所を生ずるや明なり。されば火山の多大多数は現今太平洋及其の沿岸地方に世界火山脈總數の大部分を集合し噴起並列せり。即南米よりアラスカに至り此れよりアレウト諸島を経て我が千島列島に連り、本島を經過して東印度諸島に接續するものにして、地球上尤も長大なる火山帯なり。爲めに火山脈は太平洋を圍繞すと云ふも不可なけん。而して我が國に於ける火山の數は二百以上を算し、其の中活動の顯著なるもの

は六十に及ぶ即左の如し

- 千島列島 一五、 北海道本島 八、
- 北日本中央部 一〇、 北日本海岸 三、
- 中央日本 一、 豆南諸島 九、
- 飛騨高原 二、 中 國 一、
- 九州中部 四、 九州南部 三、
- 薩南諸島 四、

火山の餘

【火山の餘勢】 温泉 其地の平均氣温以上の温度を有する礦水を湧出するものを温泉と云ふ。其の原因は地熱の作用に基くものなれば、従つて其の湧出も亦火山脈の通過せる地方に點在するを常とす。而して我國は有名なる火山國にして、數條の大火山脈縦横に通過するを以て、勢、温泉の存在する箇所も夥多なる等なり。泉質によりて炭酸泉、硫黄泉、鐵泉、鹽類泉、酸性泉等の別あり、其の最も温泉の湧出多きは富士火山脈、那須火山脈地方なり。而して其の數五百を下らず。温泉の湧出するや、各種の礦物を溶解せしめ、之を沈澱堆積して、鑛脈なる地中の富を化成す。加之、温泉は病魔を治癒し精神を爽快ならし

むる生理上の効驗あり。温泉の奇與する効果また大なりと云ふ可し。

間歇泉

【間歇泉】 湧出又は噴騰が略、一定時を距て、週期的に消長ありて、規則正しく熱湯と熱蒸氣とを交互に噴出する温泉を云ひ世界に其の所在多からず、有名なるは北米合衆國、氷州、ニウヂーランド及び本邦なりとす。而して本邦には陸前玉造郡、鬼首村吹上温泉及び伊豆熱海温泉は共に立派なる間歇温泉なり(熱海温泉説明は伊豆國熱海に詳説す)この外明治二十年頃迄は北海道室蘭附近なる登別温泉も亦間歇温泉なりしが今は然らず。

間歇は幾多年月を経過する間に其噴出模様に着しき盛衰消長ありて、遂には全く間歇的噴出を休止するに至ることあり。又地中に貯積せる熱湯蒸氣が一度噴出して後再度噴出する迄には岩石の裂罅より滲入する水の一定量の新供給を要すること明瞭にして、是れ噴騰の間歇的に起る所以なるべし。

地震

【地震】 我國は有名なる地震國にして古來激烈なる地震尠からず。而して火山に關係なきに非らざるも火山地震と稱するは火山が噴出せんとして其周圍の地盤を震動するものにして、範圍極めて狭し。我が國の大地震は概ね地熱が漸次冷却するがために地皮の褶曲を爲し爲めに斷層を生じ所謂地[○]地震(斷層地震)を起すもの多く且慘害を及すこと大に範

圍も亦廣し。又陥没地震なるものあり、地下水の爲めに疎鬆なるか脆軟なる岩石溶解せられて、地中に大空洞を生じ、その上部の地盤を支へる能はずして陥没するより生ず。この例は我國に乏し。

山岳とは如何

【山岳とは如何】 抑も山岳なる名稱は通常土地の情況によりて一定せず、山國にては多く甚だ高き地面の突起に限りて用ゑらるれど、平原國にては低き隆起も尙山の名を付する如く、山脈、山系、山彙等の用ゑる方も亦心すべきなり。

要するに山岳とは陸地の著しく隆起せる部分を云ひ、地理學上にては之を海面に比して其の高度を定むるものとす、されば山岳と稱すべきものは陸地平均の高度即海拔直立二千三百尺(七百米)以上に達する隆起たらざるべからず、此の高さに達せざる隆起は之を丘陵と云ふて可なりとす。而して山脈とは衆嶺の相連続して蜿蜒たるを云ひ、山彙とは山岳が群をなすもの即群峰の累々彙集するを呼び一に山群の名あり、山系とは並行する數條の山脈若くは同質の數個の山群、山彙が隆起帶の同一の軸に沿ふて存在する場合に之を總稱するの用語なり、と知るべし。

山岳と趣味

【山岳と趣味】 山岳は實に多くの興味ある問題を吾人に提供す。山の研究は單に詩的

趣味を有する文人墨客の話題に上るのみにはあらず。

山は地球の光榮にして實に生命の根源なり。「あらゆる自然の景色の始めにして、又終りなり」と云へるも宜なり。吾れに喜悅と平和とを與へ、健康と精力とを付與す。而かも山間の自然は比較的自由と幸福と高潔とに満たされたり。行雲悠悠、流水淙々、河川の暴進、湖水の静止、夕陽に變る美的色彩は得も云はれず。之れが自然的現象に干與し、人文發達上に保守と守成とを訓えて吾人の活動に影響す。而かも地理上の營力が最大活劇を演ずる舞臺にして、今も火山の建設は吾人の眼前に進行しつゝあり。試みに詩才なき者に筆を與へて隨意に其の畫せんと欲する所を畫かしめんか、彼れは必ずや摺鉢を伏せたる形に曲線を下に二三本並行させて曰く富士山に川なりと呼ぶなるべし。無風流のものすら富士山を解す。思ふに江山洵美の讚聲、山なくんば何ぞや、狹長なる高山を引して南溪其の人の叙文も、國粹の保存は山間にあめとの詞を藉り來りて、吾人は愈々邦國の天賦を自然上に樂むものなり。

第六章 日本の地殻の發育

地球の表面即ち地殻は、創成の初めより今日の状態をなせしものにあらずして、幾多の時代を経過し、各種の變動作用を受けて、遂に複雑なる構造を見るに至れり。最初地球が火熱の状態より放散冷却して最表面に薄膜を生じて地殻を成し、これより後漸く厚さを増すと共に内部に包藏せられし熱液も、亦冷却して其の容積を減せるにより、地殻は或は褶曲し、或は断裂して凸凹を生ぜり。而して既往の岩石は風雨流水によりて露爛崩壊して、又流水の爲めに漸次運搬せられて水中に沈澱し、氷の下壓を受けて凝個して水成岩を構成するに至る。斯くて水成岩は或は内外力の作用により、裂罅を造り、地殻の内部に藏せられたる熔岩は其の弱點を求めて噴出す、之を火成岩とす。斯くて常に絶えざる滄桑の變、地震の災、幾度か構成崩壊を繰返し以て今日に至りしものなれば、頗る錯雜混綜すと雖、地質學者は地殻中に埋藏する動植物の遺骸たる化石の種類を研究し、比較調査によりて地層重疊の状態を観察し、以て地殻發育順序を知ることを得たり。今其の順序新古を大別して四代とす。

一代中に生成せし岩層を總稱して界と稱し、一紀中に生成せし岩層を系と稱し、世中に生成せし岩層を統と稱し、以て地質系統をなす。而してこれ等地殻の成りし時を代と呼び、代は更に紀に小別し、世に分つ之を地史年代と云ふ。

- (一) 太古代(界)
 - 1 片麻岩紀(系)
 - 2 結晶片岩紀(系)
 - 3 寒武利亞紀(系)
 - 4 志留利亞紀(系)
 - 5 盆紀(系)
 - 6 石炭紀(系)
 - 7 二疊紀(系)
 - 8 三疊紀(系)
 - 9 侏羅紀(系)
 - 10 白堊紀(系)
- (二) 古生代(界)
 - 11 第三紀(系)
 - 12 第四紀(系)
- (三) 中生代(界)
- (四) 新生代(界)

以上の如く歐米諸州にては五系に區別し各山層には各々特有の古生物を藏するも本邦に於て其石炭系下部に相當するもの、外完全なる化石を發見せず故に五系に區別する能はず唯々一括して秩父系と爲すも可なり

始新世(統)
漸新世(統)
中新世(統)
鮮新世(統)
沖積世(統)或は氷期

日本群島も古來より今日の狀態を呈せしに非らず、初紀(太古)にありては點々たる島嶼の散布せしに過ぎざりしが、第二紀(古生)、中生(第三紀)(新生第三系)を経て、遂に當紀に至れるなり。

太古界

一、太古界 此の地質は地球上最古の地殻をなせるものにして、其の生成の時を太古代といふ、正確なる化石を發見せず。地球の最下部を組織するものにして、厚さ凡三萬米に及べり。而して地質の尤も古きは片麻岩にして地盤の基盤を成し最下層にありて幾多地層之を被覆し、其露出廣からず。然しながら地體の構造を知るに最も必要なる地層にして、些少の露出せる岩盤と雖も、注意して調査せざる可らず。此の太古界の岩石は地熱と壓力との爲めに甚だ皺襞褶曲して變性し、其の結晶片岩の如きは恰も薄片の紙の如く剝取することを得るなり。此の時代には片麻岩、結晶片岩に伴ひて花崗岩の大噴出あり。我國にてはその分布の區域廣からず。其の露出面積約九百二十万里に過ぎずして即ち全面積の百分の三、四二に當る、而して此の岩石より成れる地方は蝦夷山脈、阿武隈高原、關東山脈、赤石山脈、飛騨高原等より三河、紀伊の一部に露はれ、四國の中央を東西に走りて九州の西部に出で琉球諸島、臺灣山脈に屬す。御在所、竹貫、(二所共に)三波川(上野の國界、神流川の支流、三波川による)阿武隈山脈(三波川)

古生界

はその露出の著しきを以て有名なり。

二、古生界 太古界の上に沈澱せる厚さ一萬五千米の一大岩層なり。古生代は地殻變動の頗る旺盛なりし時代にして、歐洲に於ては前表の如く地層を分ちて五とし、各時代地層より時代區分の標準と爲るべき特有化石を産すれども、本邦此の時代の地層中には、未だ海底にありしを以て、草木發生せず。却て紡錘蟲、放射蟲、珊瑚蟲、海百合、軟體動物等の化石を産するのみにして、石炭紀層と石炭紀以前層との二層に大別し得るに過ぎず。然れども岩層の性質より、深海成層(秩父古生層の如き)と淺海成層(小佛古生層)とに略區別することを得。秩父、小佛共に關東山脈に屬し、其岩層は八王子より丹澤山に向ひ西北西に引ける一線の以北を秩父、以南を小佛層とす。就中御荷鋒層は最も古く、秩父層、小佛層之に次ぐ。其露出は北上、關東、赤石の諸山脈及び紀伊、四國、九州に於て太古層を掩ふて著しく發達し、飛騨以西丹波を経て中國に至る地方も、其の露出少しとせず。露出面積三千四百四十六万里、全面積の百分の十二、七四を占め、殆んど太古界の四倍に擴がる。想ふに此の時代の末葉に地層は一大變動を被り、我が群島の骨格は茲に成れるが如し。

中生界

三、中生界 古生界の上に、發育生成せし地層にして、其の發達古生界に及ばず。且つ

初紀の三疊系の沈積は殊に狭く、侏羅系の岩層も其頒布區域北陸及中國に限る。獨り白堊系のみは廣く大平洋面に發達し、北海道より九州に及べり。即ち北上山系の東南部、阿武隈山系の東北部、秩父、志摩、紀伊、阿波、土佐に顯れ、瀬戸内海の南に一帶を爲し、九州の天草島及び北海道蝦夷山脈の西部より樺太島に連る。此の中生界の面積は、僅かに千九百三十五方に過ぎず。即全面積の百分の七、一五なり。これ始めより中生層の發育狭かりしにあらざるも、中生代の前後に起れる地盤の大變動の爲め、堅實ならざりし本界の地層は、陥落消失せし所多きが故なるべし。

新生代
凝灰岩時
代

四、新生代 當代の初めには、前代末期の火成岩大噴出の餘勢を受け、地熱作用の活動盛にして、一方には諸種の火山岩噴出し、多量の新物質を地上に加へ、他方には水成岩海底より褶起して、世界の大山脈に成れり。即當代の前半なる第三紀は火山噴出物沈積して凝灰岩を爲し、廣く北日本の北海道に頒布し、南日本の内側、瀬戸内海の窪地及九州の北部東南部にも狭き區域を爲し、延きて千島臺灣に及べり。而して地殻が最後に棹尾の大變動をなし、時なされば、地上水陸の分布を始め、山川平野の配置に、大變革を來したり。此第三紀を分ちて新舊の二層とす。舊層は岩質稍堅く、九州北海道等に有望なる炭層を挾

洪積層及
沖積層

み、北日本には陸羽地方に多大の鐵脈を包藏し、佐渡、院内、小坂、河仁、荒川等の鐵山皆此の中にあり。植物化石に富む。新層は脆弱にして壞れ易く、石炭を闕き鐵脈を有せざるも、越後以北の日本海沿岸地方は石油を産出し貝化石に富む。要するに、本邦を利する鐵産は主として此時期の生成なり。第四紀は沿海及び山間の平地に發育し、洪積及び沖積の二層に分つ。此紀は火山の噴出作用尙熄まず、洪積期の河流並に河口に沈積せる礫層の上に、其の噴出物を堆積せるのみならず、處々に圓錐形の火山を噴出し、其の掩ふ所廣大なる原野、雄峻なる山岳を爲し、有史時代に及ぶも火山噴出の作用は全く消滅せず、屢々猛威を逞ふせり。而して洪積層は東京附近の高臺の如く稍高隆なる臺地を造り、時に那須野ヶ原三方ヶ原、日向臺地、十勝臺地の如き巨礫累々たる不毛の原野をなせり。沖積層は現今尙生成する地層にして、主に河流が洪積以前の地層を削磨して其の粘土、砂等を河畔湖邊海濱の最低地に沈積したるものなれば、地勢概ね低濕にして、溝渠四通し、交通容易なるのみならず、地味豊饒にして農業盛に行はれ、人民茲に集合す。要するに本界は土地の筋肉にして、中生界以上の岩石は土地の骨格たり。富の淵源、人事の活動皆茲に於てす、眞に國の盛衰發達は此の地層の多少によると云ふも誣言にあらざるなり。實に日本群島の面積は

此の時代に於て著しく増加せり。即本界は一萬二千七百十三方に及びて被覆し、全面積の百分の四六、八七を占む。

此等の地層の發達すると共に各時代を通じて火成岩の迸發あり。古期噴出岩即ち舊火成岩たる花崗岩は太古、古生の二代中に噴出し、中生代に入りてその勢衰へず、本州中部地方近畿地方、中國地方に露出せるもの即是れなり。今日見る所の火山は概ね新生界の初なる第三紀以後の活動に屬し、從てその噴出物たる、新期噴出岩と稱する所の所謂火山岩も、亦この以後に表はれたるものなり。今新古兩期の噴出岩兩種の分布面積を擧ぐれば左の如し。

古期噴出岩類	面積	二、八六三万里	百分比	一〇、五八
新期噴出岩類	同	五、一八五万里		一九、一六

(以上に於ける面積の百分比は全面積を二七、〇六二万里に對比したるものなり)

第七章 日本水系

日本の水

我が國は四面環海にして、山岳丘陵に富み、寒暖二潮流其の海岸を洗ふを以て、氣候濕潤降雨饒多なり。從つて河川沼澤多く、灌漑の利便を得ること大なれば、樹木能く繁茂し、豊饒なる耕地尠ならず。若し山脈を土地の骨格なりとせば、河川は是れ國土を縦横に流るゝ血管なり。されば道路は神経系統とも見るべく、都會は神経節を作れるものと見る可し。山は實に地上の光榮にしてまた生命の根源なりとは、先に述べたり。河も亦然り實に生命の根源なり。河の灌漑は平坦に肥沃に、交通運輸の便、灌漑汲水の利あり。或は其の落差を利用して水力電氣を起すを得可く、自然に産する魚介菱藻を漁るべし。

我が國は國土の形勢狹長に、山脈の急斜峻險なるを以て、長大なる河流を養ふ能はず、廣大なる湖沼を湛ふるを見ず、流れは概ね急峻にして、交通舟輪に便するもの尠し。只急湍起し來る水力に至つては、是れ天與の賜もの、之を活用するに於て、其利計る可からざるものあらん。彼の霖雨の際、忽ち決河溢流して沿岸に蒙らしむる災厄の如きは、之を人為に由りて防止す可きのみ。

鈴鹿川八十瀬も同じいはなみの

春 満

音になり行く五月雨のころ

然れ共、我が國亦稍々長大なる河流を涵養し得べき場合なきにあらず。即ち

- 一、山脈と平行するもの
- 二、山脈の他の側を破り、他の側に向て流るるもの
- 三、大平野を流るるもの

以上三個の條件に適合するもの、多くは長流なり。就て推考せば、必ず首肯する所あらん。流域の主人は谷にあり、而して山頂より流下する水は山軸を分水嶺として兩側に落ち、谷に依りて低きに就き、茲に一の流域を作る。今便宜の爲め之を三分して上流、中流、下流の名を付す。但し此の区分は、各區域に於て特別なる形勢の存在するに依るのみ。

上流、河床の傾斜急に、兩岸峙ち、河幅廣からず、水流従つて猛烈に、所領を擴張して河道となすを以て、時に急湍直下飛瀑の壯觀を見る。(破壊)爲に舟行の利を缺くも、兩岸の景趣を添ふ。

中流、河床の傾斜峯間を去るに従ひ漸次緩漫となり、幅も廣まり流勢も亦激しからず、

上流

中流

豁開け、沿岸の邦土に灌漑の便を興へ、諸所より支流を入れて水量次第に増すにつれ或は停溜して湖沼を爲し、漸く舟楫の便あり(破壊、建設)

下流、流域愈々擴まりて、河幅廣く、水深く舟を浮ぶべく、平和建設の専務となり、河灣を爲して宗朝するあり、潟をなすあり、又數流に分れて三角洲を形成するありて、所謂新陸地の經營に努むるなり。従て灌漑は廣大肥沃なる平野を開き、農産饒に人文繁庶なり(建設)

下流

我が國河川の多くは、上流中流を有するに止まりて、眞の下流を具備せるものは至つて少なし。中には只上流の形象を具備するに過ぎざるものあり。以て我河川の一般を推すに難からざる可し。

我が國は已に述べたるが如く、山脈蜿蜒として地勢急峻に、従て各方面に向つて流路を作る。即ち山脈の趨勢に従ひ、兩側狭き斜面を走るもの多し。此の斜面區域を大別してオホーック海系、太平洋系、瀬戸内海系、東支那海系、臺灣海峽系、日本海系の六つとなす。

樺太島 幌内川

太平洋海系

十州島

斜里川、網走川、常呂川(三五)、通別川、落着川、頓別川(二五)(以上北見)

十州島

西別川(二八)、風連川(二二)(以上根室)、釧路川(三三)、鹿路川、茶路川、十勝川(五二)(以上釧路)、
幌別川、元浦川、三石川、染退川、新冠川、厚別川、沙流川(三五)(以上日高)、
鷺川、厚賀川、勇拂川、苦小牧川、小糸魚川、別々川、白老川、敷生川、長流川、
國縫川、遊樂部川(以上膽振)、落部川、烏崎川、折戸川、磯谷川(以上渡島)、沙泊川、
戸切地川、茂邊地川、大龜川、知内川、福島川(以上渡島津輕海峽に屬す)

本州島

奥入瀬川、下市川、馬淵川(二五)(以上陸奥)、久慈川、小本川、閉伊川(陸中)、北上川(七九)、
鳴瀬川(二五)、名取川、阿武隈川(七七)(陸前)、真野川、新田川、請戸川、
木戸川、夏井川、鮫川(磐城)、久慈川、那珂川(四二)、利根川(七一)(常陸)、江戸川(下總)、
中川、隅田川(三〇)、六郷川(一八)(武蔵)、相模川、酒匂川、早川(相模)、
狩野川、鈴川、富士川(三八)、安倍川、大井川(四六)(駿河)、太田川、
天龍川(六〇)(遠江)、豊川、矢作川(三九)、庄内川、筏川、木曾川(五五)(尾張)、町屋川、
鈴鹿川、雲出川、柳田川、宮川(三二)(伊勢)、熊野川(三七)、古座川、日置川(三一)、
右田川、紀ノ川(四七)(紀伊)、吉野川(四二)、勝浦川(一五)、那賀川(二八)(阿波)、
奈半利川(一三)、御尾木川(一〇)、物部川(二五)、仁淀川(二六)、波川(二五)(土佐)、
九州島、美々津川(二八)、名置川、垂門川、大丸川(二五)、一ノ瀬川(三〇)、大淀川(二五)、
加江田川、廣戸川(日向)、葵田川、新川、上別府川、甲斐川(薩摩)

瀬戸内海系

黄海系

臺灣海峽系

日本海系

九州島

萬ノ瀬川、川内川(四六)(薩摩)、球磨川(二四)、緑川(二二)、白川、菊池川(肥後)、
矢部川、筑後川(三五)(筑後)、武雄川(肥前)

四國島

天鹽川(七四)、コタンハツ川(天鹽)、石狩川(九六)(石狩)、余市川、古平川、美園川、
尻別川(三六)(後志)、見市川、相沼内川、厚澤部川、及部川、石崎川、茂草川、(渡島)

十州島

香東川、綾川、觀音寺川(讃岐)、加茂川(一〇)、重信川、肱川(一〇)、
山國川、驛館川(豐前)、大分川、大野川、

岩木川(三二)、赤石川(阿波長瀬川(陸奥)、能代川(三二)、御物川(三五)、子吉川(羽後) 鼠ヶ関川、月光川、日向川、最上川(六二)(羽前)、三面川、荒川、阿賀野川(五七) 信濃川(一〇〇)、二内野新川、荒川、姫川(越後) 黒部川、常願寺川、神通川(五二)、射水川(五八)(越中)、犀川、手取川(加賀)、九頭 龍川(三二)(越前)、由良川(三〇)(丹後)、大川、竹野川、朝來川、矢田川(但馬)、加 露川(因幡)、天神川、日野川(伯耆)、簸ノ川(出雲)、神門川、江川(五〇)、高津川 (石見)、阿武川(長門)

九州島 遠賀川(筑前)、松浦川(肥前)

以上の如く數多の河流ありと雖ども、所謂上流、中流、下流を有するものは、唯北上川、利根川、木曾川、淀川、吉野川、筑後川、信濃川、石狩川等に過ぎずして、彼の大井川、熊野川、球磨川の如きは單に上流と中流とのみを有す。然れども、我が國の生産地域が、如何に河畔にありて存するかは、左の表によりて之を見ることが得べし。

河系	田	畑	全國耕地との割合
御物川及能代川	一〇〇,〇〇〇町	三五,〇〇〇町	二、六六
最上川	七四,〇〇〇	三四,〇〇〇	二、一五
信濃川	九二,〇〇〇	六四,〇〇〇	三、一〇

北上川	九四,〇〇〇	八六,〇〇〇	三、五八
阿武隈川	七二,〇〇〇	四三,〇〇〇	二、二九
利根川	二八九,〇〇〇	二四八,〇〇〇	一〇、六八
木曾川	一〇四,〇〇〇	六四,〇〇〇	三、三四
淀川及大和川	一二四,〇〇〇	六二,〇〇〇	三、七四
筑後川	八二,〇〇〇	四三,〇〇〇	二、四九
計	一,〇三二,〇〇〇	六七九,〇〇〇	三、四〇三

日本全國耕地の三分の一強は、以上十一河の河畔にあり。如何に河流の德澤の至大に、從て人文の發達に及ぶ影響の絶大なるかを知るべし。

河流と水害、されど一度思を返して水系の全局を達觀せば本邦の如き地勢にありては、往往洪水を來して、水害を蒙れること頗る大なるものあり。殊に近く明治三十一年に於ける水害は最も著しく、水災ありし河川は二百を數へ、度數一千を超え、損害金額六千萬圓に垂んとす、之に依りて考ふるも、我國の河川が土砂を海岸乃至河域に堆積し、土地の形成を助くる多きを想像すべく、同時に水害豫防の最も緊要なるを知る可し。而して堤防一部部の破壊は、災害を廣大なる面積に及ぼし、或は十數里の流域に亘りて、汎濫の威を逞ふす。即ち同一低地に居住するものは常に共通の利害を有し、其の豫防工事の如き共力之に

河流と水害

當るの要あるも、實際に於ては云ふ可くして行ひ難きものあり。爲に政府は森林法、河川法、砂防法を制定し、之を政府事業として治水の經營を怠らず。即ち利根、木曾、富士、天龍大井、北上、最上、阿武隈、信濃、阿賀、吉野、筑後、淀の十四川は内務省土木局の直轄に屬し、その他は所在府縣をして水害に對する豫防工事に當らしむ。

水力利用

水力利用 本邦の流域が如上の悪影響を受くると雖、一面に於ては此の狂奔急湍の水力を利用して、大工業を企圖するに足るは、又以て考慮に値するものと云ふべし。

夫れ水力利用の簡便にして、費用の低廉なる、蒸氣力使用に比すれば少きは十分の一、多きも三分の一に過ぎず。而して水力使用は、其の費用の廉なるのみならず、蒸氣力に勝る點五あり。今左に之を列記せん。

- 一、水力利用は蒸氣力使用に伴ふ、瀝離破裂等の危険なき事
- 二、水力利用には機關手及び火夫等を要せざる事
- 三、水力を利用せば黒烟を吐き散らし、近傍に迷惑を及ぼし衛生に害を與ふる事なき事
- 四、水力利用には石炭を要せざる事
- 五、水力利用には機關運動の閉止、中止ともに唯々水門の手柄ハンドルを一二轉せば事足る故に

蒸氣力使用に比して、動力を傳ふる迄に、金と時間とを要せざるなり。我が國は到る所、水力を利用し得べき河川、瀑布に富み。全國に放棄しつゝある瀑布、河川等の水力を利用せば、大約三百萬馬力を發生し得べし。而して蒸氣力を以て同一の馬力を得んには、石炭及蒸氣力使用に要する機關手、火夫等の費用を合せ算するときは一ヶ年三億圓以上を要すと云ふ。豈莫大の價値にあらずや、將來殖産工業上に及ぼす天恵は、實に偉大なりと云ふべきなり。

河流と人生

河流と人生 河は宛然人體の血路の如く地を作り、地を豊饒ならしめ、社會の進化を助長す。地の生氣は實に此の流れに因りて活くと云ふべきなり。而して單一なる河流よりも網狀多岐せる河川系統の灌漑が、多く膏腴なる地積を提供し、百般の生業其の地に起り、交通運輸を資けて、經濟的都府を建設せるは歴史の證明するところなり。今史を緝いて人類生活區域の變遷を考へば、幾萬の生靈は河によりて移動し、河流に沿ふて發展し、建國の規模の總てが、河溪に建てられたるを見る可し。憶ふに本邦の地勢南北に延長する千餘里、而して幅員六十里を出づるの地なく、山岳重複して短距離の南北兩斜面に分水す。從て急湍直下或は奇勝の崖を爲し、山紫水明の風光、詩人墨客をして憧憬せ

しむるのみならず、其の浚なるものに至りては、能く殖産興業の天資をなし、本邦經濟界を資くる一にして足らざるなり。されど此の造化の巧技は、時に吾人をして治水問題を叫ばしむるの損害を蒙らしむること屢々なり。不知、惠澤を寄與する本邦の河系は、一面瞬時の間に恐るべき大害を與ふることなきにあらざるを、是れに對しては更に河源をなす森林涵養の如何に必要なかを議せざる可らず。然るに今や各地森林の亂伐せらるゝもの尠からず、大に寒心に堪へざるなり。

斯く河流が吾人に對する惠澤と妨害とは、到底生活の縁を河水に求むるの間之を如何ともなすこと難し。否却て利用すべき點は大に利用し、其の妨害となるべき所は之を河道修築、治水工事によりて防がざる可からず、此の治水工事の如何は其國の文野を卜すべきものにして、彼の韓國の如き河流が自然的良好なるに拘はらず、治水工事に力を用ひざる爲め、大に其利を滅殺せられつゝあり。之に反し近時獨逸が孜孜とし治水工事に熱中し、到る所の河畔には河川改築會社なるものを設立し、河流の利用を計りつゝあるは、大に吾國の學ぶべき所ならん。

河流が人生に與ふる效能は、已に述べたるが如く、各種萬様なれども、今之を概括して左

に記さん。

(イ) 物質的效能

- (1) 灌溉の便、肥土沈澱の利
- (2) 河水飲用
- (3) 舟楫の利
- (4) 河岸利用(道路開墾 鐵道布設)
- (5) 魚藻の利
- (6) 河水利用(水力電氣 運河開通)
- (7) 礦物採取の利
- (8) 舟遊、游泳の利

(ロ) 精神的效能

- (1) 河畔は文明の發源地
- (2) 河は審美的趣味を涵養す
- (3) 河は人心の修養に利あり
- (4) 河は宗教心を養ふ

此の外物質的利得として、生物の傳播に付て大なる效能あり。假令は深山谿谷より植物の種子を傳播し、又魚類を産卵生育せしむる等尠からざる利得あり。而して埃及文明のニール河畔。アッシリア、バビロニア文明のエウフラト、チグリス河畔。支那文明の黄河楊子江畔。印度文明のガンガ、インドス河畔に發源せる等、如何に河が人文に貢獻せるかを證すべし。又河畔の風景が詩人墨客は勿論、凡ての人々に向つて美的心情を誘起せ

しめ、知らずくの間純雅ならしむる効果は實に偉大なり。

曲渚廻汀百里程。

水禽拍々弄春晴。

烟波不動檣聲穩。

臥看桃花過澗江。

渡邊精所

何等の美情何等の妙趣ぞや、若しそれ

底ひなき淵やはさはく山河の

淺き瀬にこそあななみは立つ

索性法師

誦し來つて誰か一種の精神的修養を感得せざるものあらんや。又ガンガ河、インドス河が印度人に、ニール河が埃及人に與へし宗教心は、皆人の首肯する所ならん。(人生地理學)

湖沼

【湖沼】 水の地上を流る際凹地に至りて湛えたるものなり。其の凹地に湛えんとする水量が、蒸發量よりも常に多く供給さるゝことによりて湖沼を生ず。凹地と水とは湖沼の素因なり。然らば凹地は如何にして生ずるか、其の原因は數多あり雖とも、之を大約左の如く分類し得可し。

其の成生の營力より湖水を分ちて二種とす。

一、流水其他自然の營力によりて、地面に窪地を生じ、水を湛へたるものは即ち固有性の湖

の湖

二、地面に窪地ありしにあらざれども、土砂等の堆積の爲めに一方又は四方を堰き塞ぎて生じたるもの即ち堰塞性の湖

固有性湖

一、固有性湖 二種あり。(イ)内力によりて成れるもの。(ロ)外力によりて成れるものは是れなり。

(イ)内力生成湖 (1)火口湖、火口原湖 何れも火山作用によるものにして、火口湖は火山

の噴火口内に水を湛へたるものを云ひ、北海道の支笏湖、又乗鞍山には三十餘ありと云ふ。火口原湖は火口湖の一種なれども、少しく生因を異にし、即ち阿蘇山、箱根山

等の如き、複成火山の火口原の一部に水を湛へたるもの。(即ち外輪山内に)箱根蘆の湖の如き是れなり。

(2)斷層湖(陷落湖) 地表(即地皮)の褶曲及び斷層又は陷落によりて成りたる其の窪地に水を湛へたるものにして、(但褶曲の谷に水を湛へたるは我が國にはなし)琵琶湖、濱

名湖(近江)江津湖(肥後)の如き是れなり。

(3)海跡湖 汀線の下りたる爲め(或は土地の隆起したるため)往古の海底が陸地となり

其一部の窪地に水を湛へたるもの、即ち霞ヶ浦、北浦、小河原沼(陸奥)の如き是れなり。

(ロ)外力生成湖 (4)河跡湖 河流の河道が變じて、舊河道の窪地に水を湛へたるもの、即ち印旛沼、手賀沼等利根河の沿岸に尠からず。其の他大河の流域には此種の者多し。

(5)氷河湖 昔時氷河が流れて陸地を浸蝕したる窪地に水を湛へたるものを云ひ、此種の湖水は我が國にはなし、而して氷河湖に固有性湖と堰塞性湖と二種あり。

(6)風成湖 風が砂を飛ばして凹地を作り水を湛へたるものにして、我が國には其例少し。此種のもの中央亞細亞に多し。

堰塞性湖

二、堰塞性湖 も亦(イ)内力によりて成れるものと(ロ)外力によりて成れるものとの二種あり。

(イ)内力生成湖 (7)裾野湖 火山破裂又は噴出の際、其噴出物にて流水を堰塞して作りたるもの、富士山麓の諸湖、猪苗代湖、諏訪湖の如き是れにして、近くは明治二十一年磐梯山破裂して、其麓に杓原沼を作れり。

(ロ)外力生成湖 (8)澤湖 風が海岸の砂を飛ばし、堆積して作るか、或は河流土砂を運搬し風波と衝突して沈澱堆積する場合に生ずるものにして、北陸地方の瀨、北海道の猿間湖其他海岸にある諸湖、中海、八郎瀨の如き是れに屬す。三景の一たる天橋立の如きは澤湖の未成品なり。

(9)山崩湖 霖雨其他の爲め、山間に於て山崩れを爲し、巖谷を堰塞して水を湛へたるもの、明治二十二年大和國十津川にて此種の湖を生じたり。

(10)氷河湖 氷河の運搬せる堆石、泥土によりて堰塞せられて水を湛へたるもの、我が國には其例なしと雖ども、アルプス山中又は北獨逸地方に多し。

(II)生物湖 生物の作用によりて、溪谷等が堰塞せられて生じたるもの、我が國には其例なきも、北亞米利加ロッキーマン脈地方には海狸が流木の上に巢を作り、河流を堰き止めて作れるものあり。

以上の諸湖の内(1)(2)(3)(4)(7)(8)の六種は我が國に於ける最も普通なるものなり。今我が國に於ける、重なる湖水を各島に分ちて擧ぐれば左の如し。

(里数は周回尙國名は上段より括弧迄)

十州島

猪苗代湖(二〇) 網走湖(二二) 能取湖(北見) 風鈴湖(障周湖) 塘路沼 阿寒湖(釧路) 風連湖
 (一五)(根室) 支笏湖 洞爺湖(膽振)

本州島

小河原沼(一四) 十和田湖(二〇) 十三海 平沼(陸奥) 八耶瀨(二五) 田澤湖(羽後) 品井沼(陸前)
 猪苗代湖(一七) 檜原湖(岩代) 福島沼(越後) 霞ヶ浦(三六) 北浦(二五) 酒沼(常陸) 印旛沼
 (一一) 手賀沼(下總) 中澤寺湖(五) 下野) 赤城湖 榛名湖(上野) 蘆湖(相模) 富士八湖(廣
 湖 山中湖 辨天湖 西尾連湖(甲斐) 諏訪湖(五)(信濃) 濱名湖(遠江) 河北沼(七) 北沼(加賀)
 川口湖 檜進湖 本栖湖 西ノ湖(駿河)

九州島

琵琶湖(肥後) 池田湖(薩摩)

臺灣島

打狗沼

我が國の湖沼は以上の如く、北日本に多く南日本に少く、而も火山脈の貫通する地に多く、又廣袤の大なるものなし。今重なる湖水の周邊に住する人口と、其縣全體の人口とを比較すれば、以て湖水の所在附近に與ふる影響を推知すべし。故に左に之を示さん。

湖沼	所在	周圍	縣邊人口	湖に接する人口	摘 要
琵琶湖	(滋賀) 近江	五十九里 三十二町	六九二、一〇二人	湖東八郡人口 餘四十二萬二千	滋賀縣の生命にして甲賀郡を除きては殆んど縣内湖に接せざる郡なく物的的に影響すること實に大なりとす。 栗太郡四八六〇九、野州郡四三九六二、蒲生郡九〇九〇五、神崎郡三七一〇二、愛知郡五一八五一、犬上郡六九七六一、阪田郡七〇六三八、東淺井郡四一〇九四、彦根郡二、〇六四八、長濱町一、一六四六、膳所町六〇四二、草津町五三六四、八幡町六五五〇、日野町五八二三、八日市町五三六九 伊香郡三、三八六一、高島郡五、一四〇五、大津市四、一〇四二、今津町四七六三
霞ヶ浦	(茨城) 常陸	三十六里	二五九、一五七人	行方郡五萬三千 稻敷郡九萬二千 新治郡十一萬四千 鹿岸郡七萬一千	湖北、石岡町一、三七八〇、高濱町三、二七六、小川町三九九六 湖東、玉造町二六二六、麻生町三九〇七 湖南、江戶崎町二九五六、湖西、土浦町一、二〇八二 突鍋町三二五四
猪苗代湖	(福島) 岩代	十六里 十一丁	一一三、一五〇五人 二、九四九五	耶麻郡八萬二千 北會津郡三萬三千 沼津郡四萬八千	湖の北岸に猪苗代町三〇〇四、若松市三、七三二一の繁昌は此の湖に依ると大なり

諏訪湖	河北潟	印旛沼	八郎潟	中ノ海 安道湖
信濃(長野)	石川(加賀)	千葉(下總)	秋田(羽後)	島根(出雲)
四里二十	六里二十	十二里	十五里	十六里一 十三里二
一三九〇三五 四七〇〇	七七、四〇九二 二九、二五九	一三四、二五七八 四九五〇〇	八九〇、〇三九 六一、五〇〇	島根 七三、四二〇〇 一七、四〇〇〇
諏訪郡 九萬八千餘	河北郡七萬七 石川郡十一萬 三千餘	印旛郡 十二萬餘	南秋田郡十二 萬九千 十萬三千	島根縣八、八 能登郡八千 千、鏡川郡二 二萬八千 鳥取縣四、四 郡十一萬四千 千
湖東に上諏訪町一、三四〇五 湖西に六 六三〇あり	湖の東岸に津幡町三五四〇、金澤市(一 〇、八六八二)より日本海に至る荷物運 漕はこの湖に因る。上金石町七二八二、 湖の川となりて海に注ぐ所あり	湖南の沖積平原の上に佐倉町七五三五、 白井町三〇一一、湖東の成田町は五六九 八にして北方へ湖水の流出して利根に注 ぐ所安食町四五四一立てり	湖に近く日本海あれば人口比較的多から ず	境町 五九八二 米子町 一、九二五三 安來町五三九三 松江市 三、五九四三 平田町六四二三 廣瀬町 四、四三六

湖沼と人生

湖沼と人生 河川が奔馳逸流して止むなき間に、凹地に淹滞留して湖沼を作り、一面四邊に灌溉し、或は調停、濾過器の作用をなし、氾濫を防止し、一面に沈澱器となりて沖積土を殘すことは、下章平野の段によりて知るを得べし。

湖沼が吾人に及ぼす影響は、常に泥沙を沈積して清水を送り、又は水源の供給者となり、或は灌溉の利を資け、交通の利を興へ、氣候を調和し、且間接に人心を融和す。見ずや湖邊の秀光なる風致を。所謂青山清澄影を鏡面に倒投するの佳趣は、我國の如き山秀で水清き國に於て初めて見る可し。併もこは清情に就て云ふのみ、生産的方面より見れば或は植物の發生を助け、或は水族の飼養場とり、魚類の人工孵化場となる。若し夫れ湖沼が操舟練習に好適の場所として、夏期各湖畔に歡聲を聞くを思はば、海國民として、常に享受する湖沼の惠澤の大なるを想見す可し。既に此の風光を有し、而して又生産的特色を有す。閑靜幽遠を以て都人士の轉地療養場となるが如きは敢へて歴擧するにも當らざらんか。彼の山間の湖沼が絶佳の風趣を以て都人士を娛しむるのみならず、水電原力の供給をなし、平地にあるものは灌溉と交通とを資け、地峡部にあるもの地峡開鑿の動機を興る等は、是れその所在に由りて人文に寄與する方面を異にするのみ、一般的効果に於ては、共に閑却す可からず。

之を要するに河川湖沼の直接間接人生活動の上に貢獻する効果は殆んど枚擧に遑なきなり。常に自然の美を添へ詩趣に富み、以て多大の快樂を寄與するのみならず、その奔流

滞留して生活上の有形方面に及ぼす、所謂生産力を増大せしむることに於て、吾人は短小なる河川、廣袤大ならざるの湖沼(總べて比較的の言とは云へ)も其の有力なることを絶叫すると共に、是れが利用に努め、天與の恩恵を空しくせざることは、膨脹國々民の期して忘却す可からざる所なるを信す。

以上記述せしものと共に、其外湖沼の人生に與ふる影響を概括すれば左の如し。

- 一、灌溉の便
- 二、運輸の便
- 三、魚藻の利
- 四、運河開鑿
- 五、水力電氣を起す
- 六、氣候調和
- 七、濾過作用(濁水を入れて清水を排出す)
- 八、衡平作用(洪水を防ぐ)
- 九、風景の美
- 一〇、飲料水を給す
- 一一、舟遊、游泳の場所となる

第八章 日本の平野

我國は地形狹長にして且つ島嶼の群集より成り、剩さへ激烈なる内方の影響を蒙りし火山作用の形跡によりて土地の起伏著しく、稍雄大重厚なる山脈の景致に乏しと雖も、山岳到處に蜿蜒して所謂山嶽國たるの名稱に負かず。されば國內一般高原性を帯び低地は僅かに全土の七分の一を占むるに過ぎず。其低地の僅に山脈の間に散在する小平野たる知るべきのみ。

●(高地)陸地の高低により地理學上に於ては之を山地、高地、低地、鍾地の區別を爲す。高地は七百米突(海拔)以下二百米突以上の高度を有する土地を云ひ、(此以上は一般山地とす)山地に比しては生活上の缺點少なしと雖も氣候割合に激烈にして、寒暑の差著しく、地味肥瘦相交はり、耕耘より寧ろ牧畜に適し、交通は稍不便なれども、一方に急流を利用し得るの利ありとす。

●(低地)二百米突以下の土地なれば、海面より、割合に高からざる高度にありて、平坦の地面なり。此の中には平原、沼池或は三角洲等を總括し、以下論ずる如き起成の別と効益とを與ふるものとす。

然れども、此の小平野は實に帝國の富源に對し重大なる關係を有す。古來瑞穂國と呼び、豊葦原と唱へしも、皆これの小平野ありて初めて其理由を解すべきなり。

山脈を以て地體の骨格とせば、平野は之を廠ふ所の筋肉にして、その骨格の發達並に血管

たる河川系統の關係により發達成生したるものなり。故に山脈と平野と此兩者は決して個別的に考へ得べきにあらず。而して今我國の平野を見るに多くは左の三つの中何れかに屬するを知る。

- 一、河谷平原 谿谷にして四圍高地に限られたる間に開展せるもの。
- 二、沖積平原 河水の灌域に土砂の堆積し、或は湖沼の水排出したる爲め、湖底乾涸して表はれたる沖積土より成るもの。
- 三、沿海平原 土地の隆起作用と、河川の土砂沈澱より成れる海底地或は山地、臺地の緩漫なる斜面にて海岸に接する低地。

【平野の分布】

【十州島】 十州島は南北に貫通する蝦夷山脈と東西に走れる千島火山脈が、國の中央に於て十字形に交叉するのみならず、西方に膽振火山脈南北に走るを以て低地も從つて其の縁邊に三角形をなして開展せり。

石狩平野 石狩川の流域に當りて、長さ三十七里、濶さ五里餘に渉る日本三大平野の一にして、地味肥え灌漑の便多く、北海道開墾の中心となる。

平野の分布

石狩平野

天鹽平野

南東平野

天鹽平野 天鹽川の灌域に開展し、面積七千二百餘丁歩あり。地味肥沃なれども未だ開墾に至らず。

南東平野 千島帯火山脈と日高山脈との間に狹まれ、各流域を領有して沿海地方に開展せる三つの平野を包括す。之れを位置の上より名稱して南東平野とす。

- 十勝平野 十勝川の沿岸二十餘里に擴がり、農業牧畜に適し開拓漸く進めり。
- 釧路平野 釧路川に沿ひ、濕地多く、地味良好ならず。
- 根室平野 十勝釧路の兩平野に連接し、根室灣に臨む。標津、西別、風蓮川の沖積土より成り、肥瘦相交れども牧畜耕耘に有望なり。

斯くの如く三平野より成る此の平野は其の地積、歐羅巴隨一の工業國たるベルギーの面積の半よりも廣しと云へば、亦以て其の利用上看過すべからざる所たるを知るべし。其他、北見の沿岸に狭少の低地を有するも、砂丘處々に連り、加ふるに北海に面するを以て、開墾のこと割合に進歩せず。

【本州島】 本州島の平野は、中央脊骨山脈の東西に連亘し、尙之れに並行して數條の山脈の起伏するあるを以て、重に海岸の傾斜地にあり。從ひて規模亦大ならず。其中著名な

奥の平野

奥の平野 北上、阿武隈兩河谷の平地を總稱し、陸中の中央より南方陸前、磐城、岩代に亘る大平野なり。分ちて三大平野とす。

北上平野 脊梁山脉と北上山脉との間に開け、土地曠濶なれども、地味餘りに良好ならず。

宮城野 仙臺灣邊より南部は阿武隈河の下流、北部は北上川の下流に連る。一に仙臺平野と云ふ。古來詩歌の名題として人口に膾炙せり。

阿武隈平野 脊梁山脉と阿武隈山脉との河谷にして、福島及び白川の平野此の中にあり。土地肥え、耕耘牧畜に適す。

相馬平野 阿武隈山脉を隔て、磐城の海岸に開く。

八戸、青森の平野 北上川の上流、馬淵川の流域八戸町を包圍せる一帯の地を八戸平野とし、青森灣邊に擴かる一帯を青森の平野とす。

津輕、秋田の平野 岩木川流域を占有するは津輕平野なり。秋田平野は能代、御物の流域に開展する一帯とす。

相馬平野

八戸、青森の平野

津輕、秋田の平野

最上平野

最上平野 最上川の流域を占め、南北數十里に達す。東北屈指の沃野なれども、氣候宜しからざれば、従つて十分の開發を見ず。

會津平野 山脉四面を遶りて、中に會津の盆地を作る。昔時湖底の乾涸したるものなるを疑はず。地味肥沃にして數流の灌漑をなすを以て農耕に適す。

越後平野

越後平野 信濃、阿賀野の二大河其の間を流れ、長さ殆んど四十里に達して、日本海濱を南西より北東に延ぶ。地味佳良なれば耕すべく、其の西、荒川流域なる頸城平野と共に越後米の産に名あり。

此の他、富山平野、高岡平野、加賀平野、福井平野等あり。富山平野は神通川の流域に、高岡平野は射水川の沖積土即越中米の産地たり。而して加賀平野は手取川に沿ひ、九頭龍川畔に福井の平野開展せり。

關東平野

關東平野 利根川の兩岸三四十里に擴がり、實に我國第一の大平野たり。幾多の支流を有する利根川及び其の下流なる霞ヶ浦、北浦、印旛沼等の恩恵を蒙る所謂武藏野の大部は沖積層の平野にして、土地の隆起と、此の河流の沖積とによりて陸地となりしものなれば地味肥沃にして、實に我國の寶庫と稱すべく、且つ此等の河川が交通運輸の利便多きは云

大宮盆地

ふ迄もなし。坂東太郎と武蔵野と兩對象名詞は實に本邦に於ける重要な平野を意味せり。
大宮盆地 關東山脉陥落の遺片たる、秩父山塊中荒川の涵域に當れり。

甲府盆地

其の外伊豆の長者原、遠笠野、富士山の四近、即ち富士の裾野も近時漸く開發せらる。
甲府盆地 此の地も上古會津と等しく大湖なりしも、富士川其の南に流れ出で、ここに平野を爲せり。

濃尾平野

此の外、遠江の三方原、牧野原、盤田原、伊勢の海濱等も亦名あり。
濃尾平野 木曾川及び此の支流の沖積と土地の隆起に因りて起成せる沃野にして、尾張美濃に亘る大平野なり。古今戦亂の巷となり、人烟稠密の都邑地となれるも、尙未だ開拓の餘裕ある所なきにあらず、地味豊饒にして、灌漑頗る利便なり。されど河床高きにより年々水害を蒙ること亦大なり。

近畿地方の平野

信濃にて、善光寺平、松本平、諏訪平、伊那平、佐久平、は何れも河系に沿ひて開けたり。其の他、駿遠參に涉りて、豊川、安倍川、大井、富士、天龍の諸川の下流に開けたる平野あり。近畿地方の平野は地味肥沃に、風景秀美に、史上の事蹟に乏しからざるは一は平野の賜なりとす。

攝河泉の平野

攝河泉の平野(畿内平野) 安治及び大和川の沿流地にして生産力豊かに、人烟亦密なる所たり。我國經濟界の主腦として、内國商業の中心を以て任ずる大阪は此の中に立てり。安治川の沙泥が河口に沈澱堆積する程度を檢するに、明治八年に深さ八尺ありし所と、十九年に深さ八尺ありし所を測量するに、十九年の所は八年の所より百間沖に出づ。而して築土作用は十一年間に百間の割合なり、其の急速なる實に驚くの外なし。

京都及奈良平野

京都及奈良平野 何れも湖底たりし地。即ち京都平野が巨掠池、其の他諸所の沼は以前の遺跡にして、淀八幡は湖水の排水の爲めに裂開せし口なりとす。奈良平野は金剛、笠置兩山脉の中間に湛へたりしもの、大和川の金剛山脉を横斷して西流したる爲め、乾涸したる盆地なり。

和歌山平野

和歌山平野、上野盆地 紀伊半島は山脚沿岸に迫りて平地を剩さず、只紀ノ川の下流地に狭小なる平野を作る、之を和歌山平野とす。笠置山脉の東なる伊賀に稍々高原性なる上野盆地あり。

中國の平野は彼の中國山脉分水嶺となりて、河流は南北に分流す、而かも幅員狭ければ概して、河系短小に、平野も従つて沿岸河谷の小なるもの夥し。

播磨平野

播磨平野 播磨國の大部は平野にして播磨の四大川の灌漑する所の大平野なり。

岡山平野

岡山平野 備前の平野にして東大川、西大川によりて沖積せられたる大平野にして、又

吉備平野とも云ふ。産物饒に殷賑の平野なり。

玉島、福山平野

玉島、福山平野 川邊川の流域の平野を玉島平野と云ひ、蘆田川の流域は福山平野と云ふ。

広島平野

広島平野 安藝國の太田川の灌漑にして、又大なる平野なり。土地肥え農産豊に、広島市は其中央に建てり。

此外備後の北方に三次盆地ありて三次川の灌漑を占め、山口平野は周防の海岸にある平野なり。兩者餘り廣大ならず。

山陰道は山陽道に比すれば中國山脈の數多の支脈によりて狹窄せられ、大なる平野少く、漸く河岸沿海に於て狹小の平野あるのみ。即ち鳥取、倉吉、米子の平野は日本海斜面の水系によりて成れるものにして、加露川の流域なるものを鳥取平野、天神川は倉吉、日野川は米子平野にして何れも肥沃の平野なり。宍道湖及中海に瀕するは出雲平野にして、簸の川、神門川の沖積によりて成れるは神門平野なり。以上何れも米綿等の農産に富む。

四國島

【四國島】 四國は一般高原性を帯ぶるを以て、平地は重に海岸に接する處に之を見るの外、面積の大なるものなし。

徳島平野

徳島平野 吉野川の沿岸にして、其の河口より西に延長すること數十里、伊豫、土佐兩國の境を浸し、其の幅亦廣濶に四國第一の平野なり、地味頗る肥沃にして農産に適せり。されど河水の氾濫するありて悲境に陥ること屢なり。

讃岐平野

讃岐平野 讃岐北方一帯沿海の廣野にして、西方伊豫東部の平野に連なり。概して山岳の傾斜地に屬す。

高知平野

高知平野 仁淀、物部二川の沖積土に開く。小規模なれど四國島南部唯一の平野とす。又伊豫の高繩半島の海岸にも小平地あり。

九州島

【九州島】 九州島は二大山脈交叉するを以て割合に廣漠たる平野あるなし。

筑紫平野

筑紫平野 筑後川の流域を占め、筑後、肥前に跨り九州第一の大平野なりとす。筑後米の産多し。

肥後平野

肥後平野 往昔海水を湛へたる處、菊池川、白川、緑川の沖積土に土地の隆起を以てし即ち熊本の四周に開展す。地味肥沃に肥後米の産地たり。

人吉盆地

人吉盆地 日本三奇流の一たる球磨川の上流を領し、素と薩北の出水平野と連接せしもの、中間に火山性諸山の成生により其の間を遮断せられしもの、如し。弧形にして往古湖底たりし地なり。

出水平野

出水平野 薩摩國川内川の流域に開け、米及び烟草の産出多しとす。其他豊前國大野川、大分川の灌域を大分平野と云ひ。日向國の東方沿海に狭長の平野あり之を日向平野と云ふ。何れも未だ開墾遍からざる廣漠の平原なり。

臺灣島

【臺灣島】 稍東方に偏して、縦断せる分水山脉あり。されば東側は峻険に、海岸絶壁をなし、平地は島の西半部に開展す。地味概ね肥沃なり。

臺北平野

臺北平野 淡水溪の沖積せる平野にして、全島第一の肥沃地なり、米作二回の收穫ありて殊に名あり。此の外臺中以南には、邱陵地の西に各河系を擁して沿岸に向つて大なる平野を開展し、砂糖の産額尠からず。されど猶ほ一般に開拓の餘地多し。

樺太島

【樺太島】 本島は地形狭長なるに西岸山脉及び東岸山脉の爲めに、廣き平地を見ず。岨内川の流域は廣大なる原野をなすと雖、沼澤的地域を含むを以て、農耕に適せず。南方豊原を中心としたる内淵、鈴谷、ルータカ川の流域には平野開展せり。西部沿岸の低地は濕潤

にして且つ段丘諸所にありて耕耘には良好ならず。

如上の有様よりすれば我國の平野は重に山間に發達せる即ち先の成因によりて(一)に關する河谷平野多く、第二を沖積の平野とし、沿海平野は割合に狭小なるものなりとす。而して之を全體より通觀すれば、概して北日本に多くして南日本に少きを知るべし。

平野と文化

平野と文化 (一)、溪谷平原と沿海平原とは各々特獨の長所を生成す。見よ溪谷の民は四顧障壁を以て限られたる自然城廓の一劃を生活區域として、茲に耕し茲に衣食す。交通の便なかりし時代と雖も、其の間に於て最も融和統一せる安固なる社會を形成し、平穩なる生活を續けしなり。之れに反し沿海平原の住民は、其の活動の範圍は廣濶に、生計を自由なる海上に求むるを得可し。されば其の精神上に享受する感化も亦た異り、溪谷住民の生業が農業なるに比べて、沿海住民の多くは漁業にあらざれば、半漁半農を以てするは自然の勢にして、其の兩者各獨特の技能と生活とを營むや明なり。

(二)、平野の人文發達上に及ぼす影響 平野と云へば平坦なる地面にして、而かも平野は障壁を造らず、従つて交通運搬に利便多く、有無相通して利益の交換は愈々斯かる處に於て遺憾なく行はる。況んや地上の尤も豊饒なる生産力は之を平野に俟つに於てをや。即

ち禾穀蔬菜の成熟は農業生活の基礎を與へ、發生を促し、村落此の地に榮へ、都市の發達また此の地に於て見るべく、所謂生存競争も亦平野に於て劇甚なり。之を我國三千年の史蹟に徴するも、殆んど河系に據りて人文の發達を致し、世々の事蹟は凡て平野の間に行はる。蓋し斯の如きは獨り我國の史實のみにあらざる也。

且つや境界なき地積は、識見卓抜にして器度宏濶の人を産するに適するものあり。其他凡ゆる方面より觀察して平野が直接間接に、人文の發達上に提供する効果の甚大なる、實に歴史は平野によりて常に裝飾せらるると云ふも、敢て過當なりとせず。

地勢研究の必要

◎地勢研究の必要 何が故に山脈の蜿蜒起伏を知る必要があるか。何が故に平野の展開大小を知る必要があるか。何が故に高原丘陵の有無を知らざる可らざるか。換言すれば地勢を研究するは何の必要ありて然るか。是れ實に重要な問題なり。茲に簡單なる數項の題目を擧げて研究の資に供すれば、

- (一) 地勢と交通との關係 山間是不便、平野は利便、河流は利用
- (二) 地勢と物産との關係 山間は林産物、丘陵原野は牧畜、平野は五穀蔬菜
- (三) 地勢と職業との關係 山間は林業鑛業、丘陵は牧畜、平野は農業商業工業

- (四) 地勢と民質との關係 山間は正直にして頑固、平野は伶俐にして輕薄
 - (五) 地勢と風俗との關係 山間は質朴、平野は奢侈
 - (六) 地勢と氣候との關係 山間と平野とにより溫度雨量に差あり、山脈の方向は溫度雨量風向に差あり
 - (七) 地勢と風景との關係 山間の風景は多種多様、平野は濶大平凡
 - (八) 地勢と政治との關係 山間と平野とは民政上、軍政上大に異なる
 - (九) 地勢と人口との關係 山間は人住不適、高原は人口稀少、平野は稠密
 - (一〇) 地勢と文化との關係 山間は未開、平野は文明
- 以上の各項は互に因となり果となり、關係連絡して其影響を與ふるものにして、尙十分の研究を要すべきなり。

第九章 日本の海岸

海岸

【海岸】 陸地の海洋と接する所を海岸と云ふ、その水陸の分界線を海岸線といひ、通常潮汐干満の平均水準面に於ける水陸の分界を以てこれを定む。故に海岸線は屈折一定せざる曲線たるを免れず。

されば海岸線を通観すれば、陸及び海洋の形状を知ることを得べく、而かも海岸線延長の多きは海岸に海角、半島、灣港、内浦の多きに因するを以て、船舶の出入便利多く、彼此の交通を助け、有無相通じて物産或は智識思想の交換を爲し、以て地方開化の導引たり。宜なり、識者夙に海岸線の長短は、國の文野を卜するに足ると唱導せるや。

（海岸線の變化）海岸線は地質構造と密接の干係を有し、地殻の變動によりて常に變化するものにして、岩層の走向及び傾斜の状態並に岩質、以前の地形、土地の昇降によるものなれば、地史の各時代に於て大變遷をなせるものと知るべし。

海洋中人世に密接なる干係を有するは深さ二〇〇米以内の淺海にして、殊に河口港灣の入口、航海の通路附近は其の深さ、流れの方向及び速度、暗礁の位置等を知悉するの要あり。故に文明國にありては何れも常に海洋の調査をなし、精密なる海圖を編成して、海上交通の安全を期する海洋調査局の設けあり。

我國は世界第一海岸線の長き國なり。希臘は西洋文化の先達として、海岸線の長きを稱せ

らるゝも、面積五方里に對し海岸線一里の割合に過ぎず。又那威は世界有名の漁業國として知らるれども、希臘と其の割合等しく、英國は由來海上王として世界第一の海運國貿易國を以て任ずるも、七方里に對し海岸線は一里の割合のみ。然るに我國が面積約二萬九千方里に對し海岸線の延長は實に七千七百餘里を數へ、面積三、八方里に對し一里の割合を有するを以てすれば、海國として勇躍す可く、如何に我國の望多きかを知るべし。

面積と海岸線とを正確に比較せんには、陸地と等しき面積を有する圓を算出し、此の圓周の長さ、其の陸地の海岸線の長さとの比を定むべし。されど、又海岸線の總延長を以て面積を除し、海岸線の長さの單位に就ての面積の割合を見ることも亦便利なり。

今我國の主要なる大島に就き海岸線を比較せば

島別	海岸線	面積	海岸線一里に付面積
本州 <small>(屬島ヲ含ム)</small>	二、四七五 ^里	一、四、五七二 ^{方里}	九、五 ^{方里}
九州 <small>(同)</small>	一、八四七	二、六一八	一、四
四國 <small>(同)</small>	六七六	二、一八一	一、七
十州島	六五〇	五、〇八四	七、八
臺灣 <small>(澎湖島ヲ除ク)</small>	三〇〇	二、二五三	七、五

全 國 七、七七一 二九、三三四 三、八
 樺 太 三三六 二〇五七 六、一
 斯く我が國は面積に比して、海岸線の延長は實に世界無比に、從て水運と國防の利便とは之を他國に譲らざるなり。尙仔細に觀察するときは、到る處海岸屈折状態の變化の多様なる、以て吾人活動の上に及ぼす好影響實に尠少からず。

六大洲の海岸線

歐羅巴洲の進歩せる、亞弗利加の今日迄野蠻の風習を脱せざる、海岸の形状に依ること大なりとす。今參考の爲め六大洲の面積と海岸線の割合を表示すれば次の如し。

洲 名	海岸線の長さ	海岸線一哩に付面積の平方哩數
亞 細 亞	三六〇〇哩	四七二
北亞米利加	三〇〇〇	二八三
歐 羅 巴	二六〇〇	一四三
南亞米利加	一六〇〇	四〇六
亞弗利加	一二五〇	九二〇
濠太刺利亞	九〇〇	三三三

この割合よりすれば、歐羅巴は亞細亞の三倍にして、亞弗利加の四倍、北亞米利加の殆ど二倍、南亞米利加の二倍以上なり。

風折の状態は岸質の差異によりても多少其の趣を異にす、而して其の岩質には砂岸と岩岸との二種あり。〔砂岸〕内陸の交通には都合良きも海上の交通には甚だ不便なり。而して砂岸は海濱砂丘を造り、有用植物の發育

を妨げ、耕種栽培に少からず悪影響を及ぼすと雖、九十九里ヶ濱或は東北地方に於けるが如く、水産肥料を供給し、又鹽田貝類を養殖すると共に、又一面に於ては松影清涼の白砂磯濱に詩興を湧かしむる風景上の特趣あり。〔岩岸〕岩岸は砂岸に反し船舶の寄航便なるのみならず、餘り深からざる海岸は、水産上見通すべからざる貴重なる貢獻を人類生活に與ふ。即ち海藻類の繁殖する所殊に昆布、和布、海苔、寒天草等の産物は悉く岩岸に産する所、而して海藻類の繁殖場は又魚類の産卵所にして、北海道沿岸の鯨魚場は此の岩岸なり。されど一般に陸上部は奇抜なる風色を顯はす外、重に漁民の繁殖を見るのみ。

〔海岸の價值〕海岸の状態異れば特殊の影響を吾人に與ふると雖、若し此の間に於て障礙を造り交通を杜絶するあらんか、良好なる海岸の形勢を有するに於ても、特殊の關係あるにしても、敢て其の用を爲さず。故に海岸を人類活動上利用する點よりすれば、其の價值は主として之を交通の便否に歸決せしむるを得べし。即ち氣候の爲めに妨害さるゝ憂なく、背後と自由に交通し、平野に連接することの必要なり。尙風波を避け得るの天然の屈曲に富み、斷崖の根底部に臨める適當なる汀線なること等は、尤も大切な要件なりとす。

今我が國の各島の海岸を検し、更に日本海方面と太平洋方面との瀕海を對照して研究せば更に興味多きことならん。

樺太島の海岸

【樺太島の海岸】 發達著しからず、島形鹿角に似て、其の又出せる所に當り多來加灣を抱き、南端には中知床岬、西能登呂岬により亞庭灣を擁するの外、海岸の出入極めて少なく一般に砂濱多し。

十州島の海岸

【十州島の海岸】 本島の海岸は概して平直の處多く、島嶼少し、但南部海岸は稍屈曲あり

り。即北海に瀕する一帯は殆ど直線をなして屈曲なく、良港に乏し。而して太平洋方面に至れば根室灣、厚岸灣、噴火灣の如き二三の港灣を有し、多少の出入を見るべく、此れより津輕海峡に入れば函館灣あり。西方日本海に面する地方には、多少の出入あるも一般に屈曲の多からざるを知るべし。

本州島の海岸

【本州島の海岸】 變化多く太平洋方面、日本海方面とも各その特色を有す。

太平洋岸

日本海岸

海岸は屈曲多し、従て港灣半島海角の出入甚だ多し、故に繁榮なる港、殷賑なる都會甚だ多し。 海岸は屈曲少し、従て港灣半島海角の出入甚だ少し、故に繁榮なる港、殷賑なる都會極めて少し。

海岸線 千三百一十一里

海岸線 六百五十一里

(北端なる陸奥の三厩より長門の赤間關に至る、日本海岸に比し海岸線二倍強)

(北端なる陸奥の三厩より長門の赤間關に至る)

太平洋方面

太平洋方面(瀬戸内海を含む) 裸岩多き犬吠岬を限り、自ら北部と南部とは頗る其の狀態を異にす。東北方面は火山脈の方向と平行する、所謂太平洋式の海岸をなし、南部海岸の海岸線は主山脈と傾角をなす大西洋式に屬す。犬吠岬より仙臺灣に至る迄は砂濱多く平直

にして曲折少し。仙臺灣著名なる松島群嶼の風光を賞し、牡鹿半島を廻れば地貌少しく其の相を異にし、所謂リアス式海岸を爲し、數多の岬岨鋸齒の如く駢出するは北上山脈の山脚の爲めなり。馬淵川口以北は平沙の濱多し。然れども犬吠岬を南廻してこれより南海岸に航すれば長汀曲浦、港灣頗る多く、其の重なるものを擧げ來れば東京灣は房總、三浦の兩半島に擁せられ相模灣と相隣り、伊豆半島を越ゆれば、『早乙女や田子に植込む富士の影』の絶佳なる駿河灣あり。遠洲灘を過ぎ伊勢海に入るの所に渥美半島は西に向て挺出し、知多半島灣内に出で渥美灣、伊勢海に分つを觀る。伊勢海を出づれば志摩及び其の附近は又リアス式海岸を爲し、面積六五方里に對し、海岸線一里の割合にて、我國に於ける海岸線の最も長き地方なり。戰國時代に海事熱心家小濱氏、九鬼氏を出し、徳川時代に河村瑞賢出で、明治初年近藤真琴を出す、我國の海軍及び海運を振興せしめし、人材の先後此の地に輩出せしも偶然ならざるの心地す。尙ほ紀伊半島に沿ふて、紀州沖より由良海峡を過ぎ大阪灣に入るべく、以西馬關海峡に至る二百四十海里、所謂日本内海の稱ある瀬戸内海は海岸屈曲極めて複雑にして、數多の島嶼海中に基布し、その沿岸線の全長は七百海里に涉れり。風景清絶、航客の旅情を慰むるのみならず、内海の地理上の價値は帝國の一特色

日本海方面

たるを以て特論するの至當なるを思ふ。成因は地皮の斷層及び水蝕作用に依るものなり。
日本海方面 日本海に面する地方は太平洋岸に比して海岸線單調に、西方に出雲半島の突出、中央に丹後半島、若狹灣、越前半島、能登半島出入せると北方に羽後の男鹿半島あるの外、概して良灣佳港に乏しく、殊に冬季の風浪は航行或は碇泊を妨ぐ。此れ裏日本海岸の發達に大々的關係を有するもの、大に注意するを要す。而して北には、下北、津輕の突出により陸奥灣をなす。

四國島の海岸

【四國島の海岸】 本島の海岸線は地積の小なるだけ、其の延長も大ならず。されど多少の屈曲あり、九州に對する西岸と紀伊半島に對する東岸とに於ては稍と著しく、瀬戸内海に面する部分之に次ぎ、太平洋面は弓形に凹み室戸、足摺の突角あれど概して單純なり。

九州島の海岸

【九州島の海岸】 本島は日向の海岸を除いては一般に複雑にして到る處に大灣入あり。即ち東海岸の北方海岸には別府灣、佐伯灣より細島に至る間多少の出入あり。北部玄海灘に面して福岡灣、唐津灣及び伊萬里灣等屈折彎曲に乏しからず。肥前の西北部は半島灣に富み、海岸線の長さこと全國無雙にして、古來我國文化輸入の門戸たりしは偶然にあらずるなり。即平戸瀬戸を過ぐれば彼杵半島南より挺出して鯛の浦を抱き、尙其の南に野母崎

臺灣島の海岸

出でて海内第一の天然良港と呼べる、長崎港は此の中にあり。島原半島は筑紫海、千々岩灘を限る。筑紫海南に宇土半島突出し。其の南方天草島との間は八代海なり。其の他本島の南岸には鹿兒島灣、有明浦あり。實に九州島は港灣の夥きこと、到底他島の及ぶ所にあらずるなり。

海流

【臺灣島の海岸】 地積九州より僅に小なるに過ぎざれども、海岸の發達は充分ならず彎曲屈折に乏しきこと諸島中第一なり。西岸は延長稍著しきも出入少く、遠淺なれば良港に乏しく、只淡水、安平、打狗等二三あるに過ぎず。南岸は南灣の小灣入あるのみにして、獨り東北部の海岸は稍出入多く、本島唯一の良港と稱せらる、基隆港あり。東海岸もまた出入少きのみならず、斷崖絶壁をなし、蘇澳、花蓮港の如き小港を存するのみ。
【海流】 海面には二種の一定の水流あり、一は即ち引力の作用に因りて生じ一日に二回其の進行方向を更ふる潮汐にして、一は航業者或は漁業者の外容易に認めざる常に一定の方向を取る海流なりとす。而して潮汐は暫く置いて今は只海流に就て少しく記する所あらんとす。海流は生活に至大の關係を有し、即ち之れが(一)水産上、(二)氣候上、(三)航海上に與ふる影響及び生物分布上に及ぼす關係は著しきものなれば、我國の近海を洗ふ海流の主要

は之を察知し置くこと肝要なり。

〔海流〕海中に於ける河の如きものなり、されど陸上の河の如く兩岸を有せず、河底の勾配もなく、附近の海水の静止せる間に於て顯著なる運動をなし、殆一定の方向を取りて流れ、靜穩なる海水を河床とする運動、即ち海水中の河なり。

我が日本近海の流れを擧ぐれば次の如し。

黒潮(一名日本海流)

暖流 小笠原環流(小笠原を繞る)

對馬海流(千島の西岸に至る)

千島海流(親潮とも呼び、仙臺灣附近に來る)

寒流 樺太海流(黄海に入る)

來滿海流(黄海に入る)

暖流、寒流の別は、其の流れの温度が空氣の平均温度に對して比較し、高きか低きかに依りて之を云ふ。

黒潮 黒潮は赤道流と稱する暖流の一派にして、即太平洋の北、赤道流がフィリッピン群島に至りて北に曲りたるもの。臺灣の南端より日本海流と稱せられ(臺灣の東にては臺灣洋流の名あり)同島の東岸に沿ひ琉球列島の南を沿流し、北緯二十七度の邊にて二派に

黒潮

分れ、其の一は九州の南岸を洗ひ、四國の沖より紀州の南岸に達し、之より伊豆七島の東を流る。其色深藍色なるを以て黒潮の名あり。殊に御倉島と八丈島との間に於て流域甚だ分明に、黒潮川の稱あり。それより野島崎の近傍に於て方向を北に轉じ、金華山に到れば再び北東の方向を取りて漸く海岸を離れ、太平洋中に赴きアレウト海流となる、是れ黒潮の本流なり。而して其の速度は臺灣の東より九州の南に至る間一日平均約五〇哩にして、九州の南より紀州の南迄の間は、最大速度一日約六〇哩なり、其れより房州半島の東北に向ふに従ひ幅も増大し、速度も亦一日一五〇哩に達す、黒潮の温度は夏季平均二十八度位にして、冬季は臺灣附近に於て二十三度、本州附近にては十七度に達す。

對馬海流

對馬海流 北緯二十七度、東經百二十六度宮古島北方に於て日本海流より分岐したるもの、北流して對馬海峽を経て日本海に入り所謂對馬海流となる。其の慶尙海峽(對馬島の北方)よりするものは韓半島の東岸に沿ひて流れ、シベリア沿岸の海中に消滅す。其の對馬海峽よりするものは本州島北海道本島の沿岸を洗ひ宗谷岬を廻りてオホツク海に入り寒冷なる樺太海流と混じ、千島列島の西岸に沿ひ北上するもの。今一つは日本海の東部を流れて津輕海峽を経て千島海流と衝突して消滅す。其の速度は日本海に於て一日三〇哩にして北に至るに従

つて滅す。筑紫の不知火は此海流中に棲息する夜光蟲と稱する單細胞小動物の發する燐光なりと云ふ。

小笠原環流

小笠原環流 小笠原附近より西に向ひて流るゝ逆流にして、南より來り小笠原附近より東北に曲りて同島の東を流れ、北緯二十九度の邊に於て西に轉じ、東經百三十六度邊より西南に向ひ、又同百三十四度の邊にて南に屈折し更に東に轉じ、小笠原島を一周せるものなり。

親潮

親潮 即ち千島海流はオホツク海の東北、ベンジンスク灣 (Pensinsk) (シベリア沿岸)より起り、カムチャツカ半島の西岸に沿ひて流れ、半島の南端に於てベーリング海峽より來る一派の弱流を併せて千島列島の東岸を南西に進み、根室水道に達し、宗谷海峽より來れる暖流に會し、之れより尙根室釧路の南岸を洗ひ噴火灣に入り、再び南に折れて一派は津輕海峽に入りて對馬海流に合し、一派は陸奥の東海岸に沿ひ金華山沖附近に達す。此寒流は其色暗濁にして黒潮の暖流とは容易に判別するを得べし。而して溫度は平均十度内外なり。

來滿海流

來滿海流 オホツク海の西北より起り、アジア大陸の東岸を南流し、樺太島の北端に衝突し、東西二派となり、西派は間宮海峽より日本海の西邊に沿ひて流れ、慶尙海峽の間を走

樺太海流

りて黄海に入る、是れ即ち來滿寒流にして、東北季候風の吹く時は臺灣海峽に於て尙此寒流を認むべし。東派は樺太海流なり。

樺太海流 樺太島は其の西岸を來滿海流に洗はるゝと雖、其の東岸は他の寒流に洗はる、之れを樺太海流となす。來滿海流に比すれば稍微弱なり。末流は宗谷海峽を経て日本海に入れども暖流の爲めに其勢を殺がる。

海流の影

海流の影響 水産上 近海を洗ふ海流が、水産物の種類と關係あることは絮説を待たざるも、我國が世界三大漁場の一として、無二の天恵國と稱せらるゝも亦海流に富むが故なり。寔に海洋に望み多く、共有の寶藏を有する本邦人が、海上の研究を忽諸に付すべからざるや云ふまでもなし。

北海道廳にては數年前より渡島、北見、根室等の各要所に海溫觀測所を設置し、潮流并に溫度の變遷、魚族に及ぼす事項を調査中なるが、今日まで得たる現象によれば、北海道の沿海に於ける海流中、最も著しきは千島より來りて南海岸を洗ふ寒流と、日本海より來りて西海岸を洗ひ、終に宗谷海峽に入る暖流、即ち對馬海流の二とす。而して千島海流が南海岸漁場に與ふる處の成果は、彼の鮭、鱈、鱈等の魚群を北より南に遷移せしめ、或は

昆布を繁生せしむる如き其の重なるものにして、亦た對馬海流が西海岸の漁場に及ぼす成果中最も著しきは、彼の鮑の専ら此の海岸に産して遠く利尻、禮文島に及ぼすが如き又鱒、鮭、鯉等の暖流に多きが如きはなり。而して其の産する處の昆布が、東海岸南海岸と所産を異にするが如きは、總て海流の結果に外ならず。其他オホツク海より來りて宗谷海峡に入る處の海流が鮭魚を宗谷近海に齎し來り、更に北海岸と西海岸とに分進せしむるあり。或は太平洋より北海道を経て北進する黒潮が、南海岸に鮭、鯉等を送るありと雖も、前二流に比すれば其の關係甚だ少し。千島群島附近は潮流甚だ複雑なれば容易に測知し難きも、暖寒の二流ありて寒流はオホツク海及びベーリング南海より來り、北千島諸島の兩測を洗ひ、色丹の東方を過ぎ北海道の南岸に出づるものにして、暖流は宗谷海峡より來りて北見沿海を流れ、知床に至りて更に國後附近に達するもの是なり。彼の國後、擇捉の兩島に於て、昆布の西海岸に繁生せざるは此の暖流の影響を受くるものに外ならずと云ふ。

氣候上 海流は亦氣候に偉大の關係を有するものにして、暖流は寒氣を溫和し、寒流は氣溫を低下せしむ。而してこの影響は水其の物の直接の作用によらずして、水上を吹掃

する空氣に依るものなり。即ち暖流上の空氣は暖かに寒流上の空氣は冷なり。されば其の空氣が陸地を洗ふことにより、陸上の氣溫も上下する理なり。而して陸上より海の方に風吹けば、之れが爲めに空氣は陸上に至ること難く、從つてかゝる場合は海流の影響は皆無と謂ふべく、我國の太平洋方面は冬季は北西風の爲め黒潮上の暖氣陸地上に流ること能はず、因て此の方面は黒潮の影響は殆ど無しと云ふて可なり。之に反し日本海方面は此の風の爲め海上の暖氣陸上に來るを以て、裏日本は黒潮の分流たる對馬海流の影響を受け、殊に東北地方の西海岸は著しく溫暖なり。

航行上 海流の方向及び速度は以て交通に影響す。即ち我邦より米國に至るには往航北緯四十度の近邊を過るは、之れ黒潮の海流を利用するが爲にして、歸航に往々二十度邊を帆走船の馳走するも、貿易風に伴ふ海流を利用するによるものなり。

其他親潮が流木を占守島附近に流し、又は氷塊を北見の海岸地方に運搬すると、北海道の海岸及び金華山(陸前の)沖の深霧なるは、皆此の海流の影響なり。

海流の原

海流の原因 一比重説(鹽分説) 熱帯地方は太陽熱の爲めに、海水暖まること多く、從て海水蒸發して鹽分多きが故に比重高し、此の理によりて熱帯地方より運動を起すに至ると云ふ。然れども熱帯地方は或は幾分鹽分多

く比重に差異なきにあらざるも、極に至るに従ひ温度低くして却て比重を高からしむ。故に其の結果熱帯地方も兩極地方も比重に大差なし。従て比重によりて海水の流動を起すと云ふは非なり。況んや海水の成分尤も多きは熱帯地方にあらずして、降雨少くして蒸發盛なる貿易風帯地方なるをや。

二水準説 赤道地方は水温高きが故に水準高し。故に水準高き所より兩極地方に向て海水流動すと云ふ。然れども赤道地方の水温高きは只表面のみにして、海水全體の尤も暖なる所は北緯三十度乃至四十度附近なり。是れ此地方は降雨少くして蒸發盛なるが故なり。故に水準説も亦非なり。

三風説 そも海流の初め運動を起すは全く風の爲めにして、即ち赤道海流は貿易風の結果なり。赤道逆流は赤道無風帯中にありて赤道流の反動なり。我黒潮及び灣流、ブラジル海流、モザンビック海流の如きは赤道海流に起因し、其大陸に衝突したる餘力によりて流るゝなりと云ふ。獨逸人ツチブリッツ氏(二十四五年前)の研究によれば若し大洋の深さを四千米とし、一定の風四十年間吹けば表面より下百米は上部の水分子流動の十分の一の速力にて同方向に流動す、若し二百九十年間吹けば表面の水の速力の二分の一にて流動す、若し二千年間吹き続けば水盤全體は表面と同方向に運轉すと云ふ。以て風力の海水に與ふる影響を知るべし。斯くて大陸の東岸には北風及北西風多きが故に極より南下する海流あり。千島海流、タピス海峡流(北亞米利加の東北海上)の如きは即ち是の例証なり。

第一〇章 日本の氣候

氣候てふ普通用語の中には、一地方に於ける寒暖、陰晴、風、雨、雪等種々の天氣に關する現象を網羅し、又天氣なる語は是れ等氣界現象の要素を包含し、宛ながら同意にして名稱のみを異にせる如く使用せられつゝ、あれども、更に仔細に二者を區別的に比較すれば、短時間に於ける氣圈の状態は即ち之を天氣と呼び、氣候とは之れが一地方一定の時期に於ける平均の状態を云ふ。而して此等の名稱が諸現象を包含する如く、此の原因に於ても頗る複雑にして錯綜せるものなるは、之れを第一章氣候の項下に説明したれば今は氣候の三要素たる空氣の溫度、濕度、運動に就て我が國に於ける状態を明かにせんとす。

我が國は亞細亞大陸を西に控へ、太平洋を西南に控へたる島嶼より成れるを以て、氣候は概ね此の二者の爲めに支配せらるゝ大なり。然れども概ね乾濕寒暖中和を得て、四季愉快なる生活を營み得べし。されど又其の土地斜に南北に長く、且其の地勢の變化甚じきが故各地の氣候大に異なること勿論なり。地方により炎熱にして雨量多きあり、嚴寒積雪の甚し

さあり。或は寒暑の間に於ける隔りの著しきと、然らざるとありて全く一樣ならず。
 温度 我が國の位置は、南方僅に熱帯に入れども、概ね北温帯にあるを以て、到る所温
 度温和にして四季快活に生活すべし。而して諸外國の同緯度の地、韓國清國沿海州等に比
 しては温暖なれども、歐米の各地より稍寒冷なるは、多少亞細亞大陸の影響と、低温なる
 寒流に洗はるゝを以てなるべし。且地形千三百里の長き南北に延長し、緯度殆んど三十度
 間に亘れると、内地の形勢とは、北方と南方とに温度の差異を生じ、又日本海方面太平洋
 方面とに懸隔ある等、各地に於て多少の差を表はせり。今我が國の重要な地方の温度を
 擧ぐれば左の如し。(温度ハ測候所創立以來最近マテノ平均ナリ)(一ハ水點下ノ印)

地名	全年平均温度	八月平均温度	最高温度	一月平均温度	最低温度	最高最低の差
石垣島	二四、四	二七、五	三三、四	二〇、六	九、八	二四、六
澎湖島	二二、五	二七、三	三三、五	一九、二	八、二	二五、四
臺東	二二、三	二七、三	三三、九	一九、二	八、二	二五、七
基隆	二二、五	二七、五	三三、四	一九、六	八、二	二五、二
臺北	二二、五	二七、七	三三、五	一九、六	八、二	二五、三
臺中	二二、〇	二七、三	三三、二	一九、一	八、〇	二五、一
恒春	二二、〇	二七、三	三三、二	一九、一	八、〇	二五、一
鹿耳門	二一、八	二七、一	三三、〇	一九、一	八、〇	二五、一
鹿兒島	二一、八	二七、一	三三、〇	一九、一	八、〇	二五、一
熊野	二一、五	二六、九	三二、六	一八、八	七、九	二四、七
熊賀	二一、五	二六、八	三二、六	一八、八	七、九	二四、七
佐保	二一、八	二六、八	三二、六	一九、二	八、二	二五、四
佐世	二一、〇	二六、三	三二、四	一八、八	七、九	二四、九
福岡	二一、八	二六、七	三二、七	一九、三	八、二	二五、一
長崎	二一、五	二六、七	三二、七	一九、三	八、二	二五、一
大分	二一、二	二六、一	三二、〇	一八、八	七、五	二四、三
宮崎	二一、六	二六、八	三二、七	一九、〇	八、二	二五、二
嚴原	二一、七	二六、八	三二、七	一九、〇	八、二	二五、二
松山	二一、八	二六、二	三二、〇	一八、八	七、九	二四、九
別子	一九、九	二二、〇	三〇、七	一〇、一	三、六	二六、七
多度津	一五、二	二七、二	三五、八	五、四	六、一	二九、五
徳島	一五、二	二六、八	三五、八	五、二	九、三	二六、一
高知	一五、六	二六、一	三六、二	五、五	七、〇	二九、二
下関	一五、一	二六、三	三五、九	五、五	六、五	二九、四
廣島	一四、六	二六、七	三五、五	五、二	八、四	二九、六
吳島	一五、一	二六、八	三五、六	五、二	七、一	二八、三
味野	一四、八	二六、九	三五、五	四、七	五、八	二九、三
岡山	一四、五	二六、八	三五、五	三、七	八、一	二九、六

九州及西南諸島	四國島	本州島	第一編
那覇	二二、〇	二二、〇	二九、八
大島(名瀬)	二〇、八	二七、七	二九、八
鹿兒島	二一、八	二七、四	三〇、二
熊野	二一、五	二七、一	三〇、二
熊賀	二一、五	二七、一	三〇、二
佐保	二一、八	二六、八	三〇、二
佐世	二一、〇	二六、三	三〇、二
福岡	二一、八	二六、七	三〇、二
長崎	二一、五	二六、七	三〇、二
大分	二一、二	二六、一	三〇、二
宮崎	二一、六	二六、八	三〇、二
嚴原	二一、七	二六、八	三〇、二
松山	二一、八	二六、二	三〇、二
別子	一九、九	二二、〇	三〇、二
多度津	一五、二	二七、二	三〇、二
徳島	一五、二	二六、八	三〇、二
高知	一五、六	二六、一	三〇、二
下関	一五、一	二六、三	三〇、二
廣島	一四、六	二六、七	三〇、二
吳島	一五、一	二六、八	三〇、二
味野	一四、八	二六、九	三〇、二
岡山	一四、五	二六、八	三〇、二

第一編	本島州本										地内島州本										
	金	福	敦	舞	西	境	濱	山	福	宇	足	熊	前	長	松	飯	甲	高	岐	彦	八
編	澤	井	賀	鶴	郷	田	形	島	宮	尾	谷	橋	野	本	田	府	山	早	根	木	都
自然地理概説	一三、一	一三、三	一三、八	一三、五	一三、三	一四、二	一四、五	一〇、七	一一、七	一二、二	九、六	一三、一	一二、九	一〇、九	一一、五	一三、二	九、九	一四、二	一三、六	一四、三	一三、六
日本の氣候	二五、五	二五、六	二四、八	二五、二	二四、一	二六、一	二五、七	二三、八	二三、九	二四、二	二〇、八	二四、八	二四、四	二四、〇	二三、六	二五、三	二二、八	二六、四	二五、七	二六、二	二六、一
	三八、五	三七、一	三六、八	三六、一	三一、二	三七、八	三六、七	三六、八	三六、〇	三四、九	三五、八	三六、六	三四、七	三六、三	三五、〇	三六、六	三五、四	三三、九	三五、〇	三五、五	三六、九
	二、四	二、六	四、四	三、七	四、五	四、〇	五、二	一、六	〇、六	〇、八	〇、九	二、六	二、五	一、五	〇、〇	一、四	二、五	三、〇	三、三	三、九	二、五
105	九、七	一五、一	一〇、九	九、七	七、八	九、七	六、七	二〇、〇	一八、五	一四、八	一八、六	九、七	九、一	一六、四	一五、九	一七、二	二二、三	一一、七	八、九	五、七	一一、九
	四七、九	四七、七	四七、七	四五、八	三九、〇	四六、〇	四三、四	五六、八	五四、五	四九、七	五四、四	四五、六	四三、四	五二、四	四九、九	五三、八	五七、七	四九、九	四三、九	四一、二	四八、八

第一編	面方洋平太島州本															面方海内					
	青	宮	金	石	水	銚	布	父	八	東	横	横	長	沼	濱	名	津	潮	和	大	神
編	森	古	山	卷	戸	子	真	島	島	京	濱	賀	呂	津	松	屋	岬	山	阪	戸	
自然地理概説	九、一	九、九	一〇、三	一〇、九	一二、五	一四、七	一五、三	二二、二	一七、六	一三、七	一四、三	一四、四	一六、一	一五、〇	一四、五	一四、五	一四、五	一五、〇	一四、八	一五、〇	
	二二、七	二二、〇	二二、五	二二、九	二四、八	二四、七	二四、七	二六、七	二五、六	二五、四	二五、五	二五、〇	二五、四	二五、七	二五、九	二六、六	二六、一	二六、八	二七、一	二六、七	
	三五、六	三六、二	三一、二	三四、八	三四、九	三三、六	三三、九	三四、四	三〇、八	三六、六	三五、二	三六、五	三五、二	三四、八	三七、二	三六、七	三五、四	三三、二	三六、六	三六、一	
	二、八	〇、七	二、八	〇、三	二、三	五、二	六、八	一七、八	一六、五	二、九	四、二	四、八	八、一	五、一	四、九	三、四	四、二	八、四	四、八	三、九	四、九
104	一九、〇	一五、七	一八、一	一三、六	九、九	七、三	三、七	九、〇	二、九	九、二	七、二	六、七	二、六	八、七	五、五	九、五	七、八	三、六	五、四	七、一	五、五
	五四、六	五一、九	三九、三	四八、四	四四、八	四〇、九	三六、六	二五、四	二七、九	四五、八	四二、四	四三、二	三七、八	四三、五	四二、七	四六、二	四三、二	三五、八	四二、〇	四三、七	四一、六

於ても十勝に三十六度(明治二十七年八月廿七日)の暑熱に達せることあれば、我國の夏季の暑氣は全國を通じて、各段の大差なしと云ふも敢て當らざるにあらず。然れども冬季に到れば夏期と相比して其の差の頗る著大なるに驚くべく、極南極北を以てせば僅に五十度の差あり。是れ全く冬期に於て我國北部の烈寒なるが爲に、かゝる懸隔を生ずるに至るものなり。即ち冬季北海道内地の寒氣は頗る烈しく、毎冬氷點下三十度以下に降るを常とす。彼の上川の測候所は我國最低温を計り得るの地にして、氷點下四十一度(三十五年一月二十五日)に降ることあり。此れ位置十州島の殆ど中心に位し、海岸に遠かりたる山間の地なればなり。

世界最寒地と稱せらるゝ亞細亞ロシア内地ヘルコーヤンスクは氷點下五十四度を示す、而して其の地と上川との位置は緯度に於て大凡二十三度の差あるに係はらず、世界最寒地の最低温度と僅に十三度の差あるに過ぎざるを思へば、以て驚くべき寒地なるを知るべく、尙上川の位置たる北緯四十三度四十七分は、歐羅巴にありては佛國馬耳塞及び温暖なる伊太利の中心地點に相當するより考ふれば、如何に其寒地なるかを下すべきなり。

約言すれば我國は四圍海に包まれ、沿岸寒暖二流の洗ふありて、東北の一部は稍寒冷なりと雖も、全體より之を見れば、實に寒暖中和の好氣候にして、暑熱の人を傷害するなく、寒氣の稼穡を妨ぐるの地稀なり。是を以て生物の生成均しく其の所得、剩さへ風光の秀麗なる亞細亞州中の樂園と稱せらる。

雨量

雨量 我國が江山の美を以て國民性を標榜し、清水到處に湧出して青翠を濃かならしむ地積の比較的小なるに山骨秀で、連脈縦横なるに係はらず峽間も尙水田拓け、灌漑の便利に富み、古來農を以て本とせる、蓋し其の原由を雨量の多きに蒙むる所多しとせざるべからず。然り、我國は北温帯中の多雨地なり。

〔雨量及び分布〕雨雪霜露の何たるを問はず總て空中より降下する水の量を雨量又は降水と云ひ、之を計るに雨量計を用ふ。而して雨量は土地の狀勢によりて甚だ異れり。

- 一、低緯度の地方は高緯度の地方よりも多し。
 - 一、海岸の地方は陸地の内部よりも多し。
 - 三、山脈の海に面する側は之に背する側よりも多し。
 - 四、海面及び低緯度の方より風を受くる地は、大陸の内部及び高緯度の方より受くる地よりも多し。
- 之れ即ち水の變態の主因より、打算したるものにして、之によりて考ふる時は、我國四周の境涯及び内地の形勢は、確かに多雨地たるべき理なり。但し各地各季節によりて差等あるを忘る可からず。

今全國各地を、降雨の多寡によりて分類すれば左の如し。
降雨の最も多き地

一、臺北より大島大隅を経て志摩に達する南太平洋岸一帯の地。			
基隆、三四八三耗	石垣島、二二五五耗	那覇、二二六三耗	
大島、三三五八	鹿兒島、二二六六	宮崎、二五六七	

高知	二七四一	潮岬	二八九四
二、越前加賀能登等の日本海岸地方		福井	二四〇〇
金澤	二五七五	敦賀	二一九九
輪島	二〇八四	伏木	二二五九
境	一九三四	舞鶴	二〇九四
三、臺中臺南恒春の臺灣西南部		臺中	一八八九
恒春	二一七五	澎湖島	一一〇九
臺南	一六八〇		

澎湖島が此の地において雨量の割合少きは高き山岳なければなり。

雨量の少き地方

一、樺太及十州島東北海岸地		網走	七二八〇	根室	九二二耗
宗谷	八五八耗	大泊(樺太)	七〇四耗		
紗那	九八〇				
二、本州島の中央内地		松本	一、一六七耗	甲府	二、二六四耗
長野	九八六耗				
前橋	一、二四一	新居濱	一、五〇一耗	松山	一、三三〇耗
三、瀬戸内海沿岸		味野	一、〇八九	岡山	一、一〇二
多度津	一、一四三耗	大阪	一、三三三		
廣島	一、四九二				
神戸	一、三九一				

而して我が國最大湿度の場所は基隆にして、三四八三耗に上り、次は大島(薩南)三三五八耗なり。其他薩南の諸島は約二〇〇〇耗に達せり。然るに之に反し最乾の所は大泊にして僅に七〇四耗に過ぎず。次は網走の七二八耗なり。

以上は其の各地に於ける大體観なれば、以下他の重なる地に就いて示せば左の如し。

牛深	二、〇九一耗	熊本	一、七四七耗	佐世保	一、八四一耗
長崎	一、九四三	福岡	一、五六五	別子	三、〇一七
津	一、八一九	名古屋	一、七六三	濱松	一、八七五
横濱	一、六七二	東京	一、四九二	筑波	一、三九〇
彦根	一、八〇七	岐阜	二、〇八〇	高山	一、八七三
飯田	一、八九二	足尾	一、八一四	新潟	一、七八六
福島	一、二二六	山形	一、一九五	秋田	一、七八一
青森	一、三二六	函館	一、二二六	札幌	九六二
釧路	一、〇三二	上川	一、〇四〇		

季節に就いて云へば、太平洋岸即ち表日本は總べて南來の感化を被り、之に反し日本海岸即ち裏日本の方は總べて大陸の影響に依りて北來の感化を受く。されば太平洋岸は夏季に於て南より來る多濕にして温暖なる氣流を受け濕氣多く雨繁し。殊に降雨最多量なるは所謂五月雨の節即ち六月にして、霖雨連日開かず實に陰濕なり。日本海方面にては夏季は雨

濕に乏しき乾風を被り、往々旱魃の害を受くることあるも、冬季は之れに反し亞細亞大陸より甚寒なる西北風日本海を渡り來るに際し、蒸騰する水蒸氣を運び來りて、脊梁山脈の爲め凝集して大方は雪となりて降下せしむ。而して此の氣流太平洋岸に達する時は既に乾風となるを以て晴天多く、その乾濕冬夏に於て全く相反せるを見る。

梅雨

●梅雨 六七月の交は太陽最も高く日射頗る強きが故に、清國揚子江流域の如き平原の間に大河のある所、又は其上流の盆地には、此熱の強き爲低氣壓發生し易く、其發生したる低氣壓は東方に進行し、支那東海に入ると同時に暖濕なる空氣の爲めに涵養せられ、益々助長せられて本邦の西部を襲ひ來る。然るに此六七月の交は北太平洋に高氣壓發達せるが故に、之れが壓迫を受け、低氣壓の進行頗る遅緩となり、殆んど數日間停滞せるを以て霖雨となる。是れ即ち梅雨なり。本邦曆には天度の八十度(毎年六月十一日前後)に達したる日を入梅の季とし、通例三十日間と云へり。

◎我國は準熱帶性を帯び殆判明なる乾濕兩期を別つべし。即ち寒候の中年は雲雨收まり濕氣少く、一般に乾燥なりと雖も、暑候中年は雨多く陰濕なり。春雨時雨の雨節毎に連日驟々として明けざる梅雨の期あるが如きは我國固有の雨節なり。而して斯く乾濕兩期に分るゝ所以は、全く我國に流行する定期風の方位に基くものにして、暑候は西南位の溫暖多濕なる氣候風吹き、之れが爲め此の風の流行する地方は霖雨連旬に亘るを常とす。又寒候には變じて北西位の風向となり、太平洋方向にては、この影響晴天となるを以て一に兩無風と呼ぶ。此の期間は日本海方面の霖雨にして、雨となり或は嚴寒の候なるより多くは雪となる。而も加越能の地方にありては、此の日本海を洗ふ、對馬暖流の蒸騰せる多量の水蒸氣を正面に受けて積雪多く、北國の深雪として夙に知らるゝところなり。

降水の確度

◎降水の確度 一ヶ月中降水の平均日数を其の月の日数にて除せしものを、其の月の降水の確度と云ふ。即ち平均

降水日数の割合を示すものにして、之れが降水其のものゝ多少よりも、尙ほ一層農業上其他に大關係を有す。降水日数なくとも規則的に度々降ることが、一時に多量の降水あるよりも植物生育等に利ありとす。而して降水の確度は、寒日本に大にして降雨日數一ヶ月二百日内外に達し、瀬戸内海は最も小にして百二十日内外なり。又北海道上川が雨量の多からざるに拘はらず、降水確度の大きなるは特に注意すべく、紗那に於ても尙然りとす。降水日數(年)を各地により擧ぐれば左の如し。

基隆	二一九	澎湖島	九二	石垣島	二〇六
鹿兒島	一六六	熊本	一五五	長崎	一六六
福岡	一六三	大分	一三四	下関	一五七
廣島	一三一	吳	一三三	松江	一四四
岡山	一二六	味野	一二四	多度津	一三九
大阪	一三六	高知	一四五	濱松	一三五
東京	一四三	高山	二〇〇	甲府	一三四
松本	一四五	山形	二〇〇	境	二〇六
宮津	二二八	福井	二二九	金澤	二二〇
伏木	二一九	秋田	二三〇	青森	二二四
函館	一八一	札幌	一八八	宗谷	一八一
上川	二〇八	根室	一五五	紗那	二二二

風 は氣温によりて起る一種の氣流なれば、空氣温度の變化は直に以て風位、風速等に影響す。而して我國は一面大陸を控へ、一面大洋に瀕するを以て、常に此の二者に支配せらるゝものなり。即ち夏季六七八の三月は南風(南東又は西南)多く、他の季節に於ては北西

風多し。風力は海岸の方内陸より強く、表日本より裏日本強く、又北海道は殊に強し。而かも風力の平均より云ふ時は、夏秋は弱く、春冬は強し。風位は山脈の趨勢及海陸の分布等種々なる原因あるにより律すべからざる様なれども、實際の観測上よりせば一般に尤も多きは北西風にして、西風之に次ぎ南風東風は尤も少し。されど夏の終り秋の始めに強き旋風の襲來することあり。此の期は恰も暑候より寒候に移る氣候風變更の期節なれば、氣界に一大變動起るを以てなり。世俗の風日として恐るゝ時にして、二百十日（九月一日、八朔）及び二百廿日（九月十一日）にして『二八月は可愛子の旅立をさするな』と云へる程なり。此の暴風雨の襲來は、其の源フイリピン近海附近に起り、西北西に進行し、該群島又は臺灣四近に於て曲折し、本邦の地形に沿ひ北東に進み、日本海を横ぎり北海道地方に至るを常とし、本邦各地共甚しく其の害を蒙る。實に我國民の二大災厄として地震と共に恐るゝも理りなるべし。

表、裏日本氣候比較

【表、裏日本氣候比較】 以上を一括して、表裏日本の特殊なる影響によりて、所謂表裏を風土上に表はせるは、之れを各章に述べたり。今氣候を了るに當り之を一括して要項を摘記せば左の如し。

- 表 日本 裏 日本
- 一、表日本（太平洋岸）の風位は變化ありされど夏季 一、風位は規律的にして殊に冬季は大方西北風なり而かも

- は大抵南東風吹く、而も此の温熱なる氣流が多量の水蒸氣を齎らし來る爲め、落葉の期節をなし、又九月は暴風雨の來襲する多し。
- 二、冬季晴天多く、雪下少量、夏温冬乾なり。
- 三、年中に於ては日本海岸より晴多し。
- 四、海洋性的、（南化）黒潮の流駛するを以て氣候温暖。
- 五、氣壓寒中強し。

- も此の寒冷にして乾燥せるものなれども日本海を過ぎて多量の水蒸氣を送り來り、分水山脈に衝突し其の以北に降下し濕潤にす。
- 二、冬季落葉多く、雪下多量、冬温夏乾なり。
- 三、年中に於ては概して太平洋岸より晴天少し。
- 四、大陸性的、（北化）來滿海流（樺太海流めんど）流駛するを以て氣温寒冷。
- 五、氣壓寒中強し。

春たてとななし雪けの空の雲

くもるとや見んかすむとや見ん

夏衣きていくかにかなりぬらん

寝れる花はけふもちりつゝ

秋來ぬと目にはさやかに見へれとも

風の音にそ驚かれぬる

秋のうちはあはれしらせし風の音の

烈しさ添ふる冬は來にけり

前巻編輯長（千歲和歌集）

藤原敏行

源道濟

第一章 日本の天産物

動植物

動植物 各地の地理的事柄は直接に生物の分布に關して重要な關係を有するものにして殊に氣候は之を左右すること最も大なり。されば我國の如き、地形長く、二十九緯度に通じて、北は寒帯より、南熱帯に亘り、内面は大陸に近く、外面は大洋に面し、且つ地勢の變化多く、氣候各様なる所にありては、恰も動植物の爲に三の門戸を開くが如し。蓋し黒潮は南方より來りて熱帯の動植物を誘ひ、東北寒流は國の東北邊を洗ひて寒帯の動植物を迎へ、又季候風は以て灌溉を富饒ならしめ移住せる動植物の蕃殖を促せり。故に島嶼は其の近接大陸に比して動植物の種類少しと云ふ通則は、之れを我國に適用すべからず。

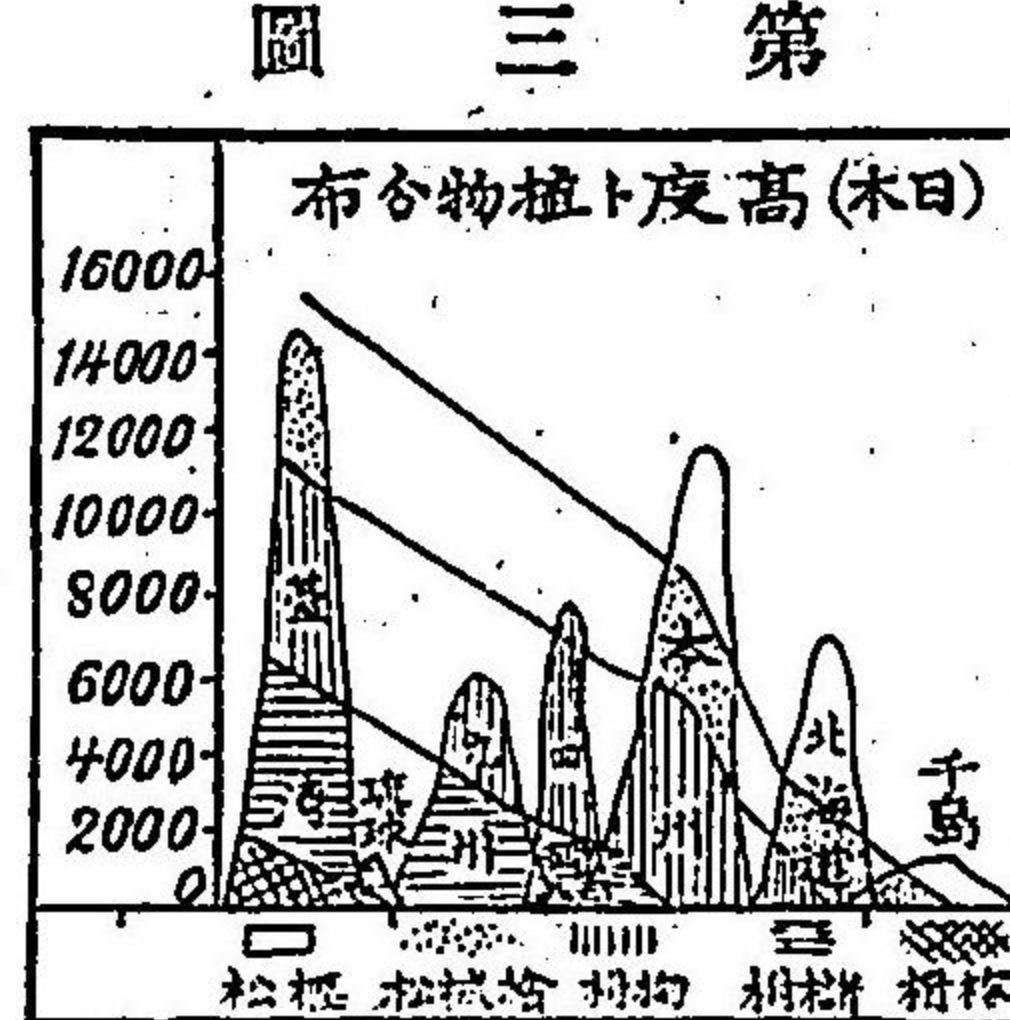
近接大陸に比し島國の生物の少きは、之を我國の如き地には該當せず。例へば全世界の顯花植物の三分の二は、我國にあり。而して銀杏の黄金色を染むる秋の風色は、外客の眼に珍らしく映じ、東京近郊のみにおいて、尙英吉利全國の昆虫を採集し得る程にして巨大なるものを缺くと雖、其の種類多趣多様に、各種の生物あり。然れども諸島の大半は温帯なるを以て、温帯の生物最も多しとす。

動物

動物 有用家畜禽鳥の繁殖著しく、猛獸虫類の有害有毒のもの少く、唯北海道に熊狼を産し、臺灣に山猫及び豹を棲ましむ。而して内地に尤も多き獸類は馬、牛を始め野生の猪、鹿、狐、狸、鼬、兎、猿の類とす。(猿は北海道に見ず)對馬には朝鮮雉子、野猫等を産し朝鮮に稍近似す。而して鳥類にありては、歩行動物の如き著しき分布區域なしと雖、風候の變化多様なるを以て候鳥等約三百八十餘種に達すと云ふ。而して津輕海峽は本土北海道に於ける鳥類分布の境界をなし(之をブラキントン線と云ふ)以北は北亞米利加之北部及び西伯利亞地方の性質を帶ぶと云へり。又海接動物就中魚類は種類と數との豊富なる世界豊魚帶中に數へられ、殊に貴重なる海接哺乳類をも産す。是れ我が國は亞細亞大陸及び海産動物の中心たる東印度諸島に近く、而かも寒暖二流の影響は以て彼等動物の移轉來往に密接の關係を與へ、所謂廻游魚と稱する鯖、鮪、鰹、鰯等の如きは慥に海流の如何により其の處を移すこと甚だ著しとす。(ブラッツキントン線に付ては地方誌青森縣を参照せよ)

要するに動物は植物と異り、自ら移轉する力を有するが故に、植物の如く著しき帶觀をなさずと雖も、其の食物の種類分量は之を植物界に仰ぐを以て、到底氣候の影響を脱する能はず。されば氣候各趣なる本邦に於ては、勢ひ動物の種類に巨大なるものなしと雖も、多

植物 植物は氣候に左右せられ、土質の如何により完全なる其の發育を遂ぐるを得べし。故に本邦の如き温度の變化著しく、雨量概して多く、濕潤度に適ひ、爲めに土壤一般に膏腴なる處にありては、植物の豐饒なる到底動物及礦物等の比にあらず。即ち北緯三十二度以南なる九州南部臺灣、琉球、小笠原島及び其の他の諸島には熱帯の植物繁茂し、樟、榕樹、羊齒、蘇鐵、竹栢、露兜樹、椰子樹、檳榔樹、龍眼肉、芭蕉等特種の産あり。九州四國本州及び十州島の南部には温帯植物能く生茂し、禾穀類纖維植物能く生じ、喬木には杉、檜、樅、櫻、公孫樹、赤松、黒松、山毛櫸、梅、櫻、楓



等の有樹樹繁茂せざる地なし。又十州島の北部及び千島列島に至れば寒帯性の植物、赤楊、蝦夷松、偃松、檜松等を重なる特生樹とし、本州内地の高山には白檜、偃松等を生ず。故に我が日本列島は單に地形の花彩状をなせるに止ならず、斯く紅綠參差自然の美を以て、又之を装ふものなり。今各地によりて種類を異にし、所謂森林帶

をなす所のものを左に示さん。

森林帶 區 域

- ◎熱帯(榕樹帶) 同温線二十一度以上の地を領し、沖縄中央以南及び八重山列島、臺灣、澎湖島、小笠原群島等、高度(臺灣)二千尺以下
- ◎暖帯(亞熱帶、糖類帶) 同温線十三度以上二十一度以下の地即ち琉球本島以北、四國九州の全部、本州の南部北緯三十五度以下の地(海岸は北緯三十七度半)、高度(臺灣)六千尺以下。
- ◎温帯(樹帶) 同温線六度以上十三度以下の地、即前帶以北の本州全部及び北海道半の西南部即ち北緯三十五度(海岸三十七度半)より北緯四十三度半迄、高度(臺灣)一萬五百尺以下。
- ◎寒帯(白檜松帶) 同温線六度以下の地を占め、北海道の北東部にして、高度(臺灣)一萬五百尺以上に相當す。
- ◎植物と高度、以上の如く水平的に變化すると共に、又各地にて垂直的に差等あるは、宛がら熱帯地方より寒帯地方に至ると同様なるを、山麓より山頂迄の間に認むるは富士山にて馬返以上より森林帶に入り、初は落葉樹林にして尙上るに従て針葉樹となり、二三合目に入れば、既に樹木漸く稀疎となり、之に代るものは灌木帯にして更に上れば草本帯となり、七八合目に至りては最早矮小なる草類の點々岩石の間に叢生するのみ。更に地衣類の生ずるを其の上に認め、頂上に近ければ早や全く植物の生ぜざるに至るによりて明かに知らるゝなり。

其の他海藻には昆布、荒布、和布、海苔、海羅、鹿角菜等あり。

礦物 我が國の礦物は其の種類少からず。之れ地質の多種多様に、而かも地下の熱の未だ盛なるによるといへども、其の量より見る時は有用なるものに乏しと云はざるべからず。

其の中にありて産額の多きを硫黃とし、世界第二位に上り、銅之れに次ぎて第三位、アン

チモニーは第四位を占む、其の他石炭の産出稍多きも、其の素質の佳良なるもの少く、品位従つて優等ならず。而して亦金、銀、鐵、石油等を産するも、其の産額世界各地のものに比すれば多量なりと云ふを得ず。

荒海を四方にめぐらす日は

神のかためし御國なりけり

中島 廣 足

研究上の注意

研究上の注意

一 準備。地球儀 世界地圖 日本全圖(地勢を主としたる) 亞細亞全圖 海流、雨雪分布、同溫線等考案圖

二 地球の成因を知らんには是非とも星霧界の大要を研究するを要す。

三 太陽は吾人々類に最も必要にして、管に光と熱の源たるのみならず、人心修養上偉大の關係あり。彼の『光陰は矢の如し』又『流水の如し』等の言は、千載不易の金言にして、吾人の日常に非常なる刺撃を與ふるや必せり。

四 地球の球體なる例證は最も熟知を要す。富士見十三州とは如何。

五 地球の球體にして、自轉すると共に又公轉するは吾人の日常生活に影響を及ぼすや大なり。晝夜の關係受温の相違、四季の變遷等は皆此れか爲めなり。

六 曆の如きは平常用ひられるものなるに拘はらず、比較的其智識に乏し。殊に左の件の如きは何人も知らんと欲する所なるが故に研究を要す。

(イ) 閏平年の生ずる理 (ロ) 二月は何故に二十八日か (ハ) 太陽曆の精確なる理由

七 北斗七星は古來航海者、旅行家の目標となり、又地方方向の標準となり、非常なる恩澤を與えつゝあるものなり。

八 國家の盛衰は第一其の國の位置の良否によること大なり。我國の位置如何。

(イ) 世界に於ける位置 (ロ) 東洋に於ける位置 (ハ) 軍事上よりの位置

(ニ) 商業上よりの位置 (ホ) 工業上よりの位置 (ヘ) 交通上よりの位置

右の諸點より研究して我國の位置の優良なるを覺るべし。

九 世界列國に比して、我國の面積は狭小なり。然れども最近我同胞先輩の努力によりて擴張せられたり。之を引受けたる吾人は大に一層の努力を加へざる可らず。

- 一〇 我國は山岳國なり。從て此の山岳が國土を形成する状態を充分に理解せんと欲せば所謂二大山系、三大火山脈、其他の支脈の研究を要す。
- 一一 我國の山岳は大陸的の如く雄大高峻ならずと雖も、圓錐形を爲すこと多く美觀を呈し、且森林鬱蒼として、幽谷谿流潺湲たるあり。又山頂には多く名刹古社あり、更に歴史上の跡跡からず、一層山岳に對し趣味を深からしむ。
- 一二 我國の火山は概ね内帯即ち日本に多く、又日本北緯即ち北日本に多し。是れ内帯は所謂造山力の來りし方面にして地皮に弱點多く、火山噴出力を逞くせしめたるによる。
- 一三 我國は火山脈の縱横蜿蜒して、其山下に溫泉多きこと世界第一にして、青山幽邃の別天地に於て心身の保養を爲すことを得る等、實に國民に絶大の便利幸福を與ふ。
- 一四 我國は地形狹長に、山脈連亘するを以て、長大の河流を作る能はず。故に上、中、下流の完全なるもの少く、從て舟楫灌溉の便は大陸の河水に比して甚だ少し。加ふる地勢の急峻と降雨の豊沛なるとは往々汎濫の憂あり。
- 一五 以上の如き河流も、其の利用の如何に因ては人生に大なる影響を與ふ。水力を利用して電氣を起すが如き是れなり。

一六 平野も大陸に比して廣大なるもの少し。然れども相當に肥沃の平野ありて、人生に多大の利を與ふ。

一七 要するに我國の地勢は自然人文相關の理を説くに最も好箇の材料を與ふ。是れ大に研究に資すべし。因て本文中比較的に地勢を詳説して其の關係に及べり。精讀を乞はんと欲す。

一八 我國の海岸線の延長多きは多大の利益を與へ、國家開發上非常に好影響あることを充分に研究領得すべし。

一九 加ふるに沿海には暖寒二種の海流ありて、氣候、水産上に又多大の好影響を與ふ。

二〇 我國は島嶼的氣候の絶好の標本として、冬は暖に夏は冷に、又生産の繁殖に適すべく、風雨適順なり。間々大風の憂なきにあらざれども、他の大陸の乾害其の他の爲め野に寸青なき如きに比すれば、實に世上の樂土なり。

二一 斯の如く、我國は山青く水清く、空氣は新鮮にして、又風光絶佳の樂土、若し此の風景絶美にのみ憧憬して、韓國の落莫たる景を厭ひ、滿洲の荒寥たる地を嫌ふが如き國民あらんか、吾人は好風景亡國論を唱へざる可らず。我同胞よ風景の美を喜んで風光の

美に沈溺する勿れ。

二三 我國の氣候は良好なり。此の氣候に慣れて進んで海外異邦の熱大寒地に遠征する元氣を失はんか、國家の前途實に寒心に堪えず。行けや快男兒、立てや日本男兒。滿洲の寒地も、印度の熱地もものかわ。宜敷勇往邁進す可きなり。

二三 天産物豊富なりと喜び安心するは大に不可。此の蕞爾たる小天地、自然の惠澤は自ら限りあり。我が同胞たるもの尙一層の努力と奮勵とを要す。

第二篇 人文地理概説

第一章 住民

住民
人口

【人口】 人類は國家活動の根本にして、或は一家を形成し、或は共同團體となり、國家の進展に欠くべからざる基礎を組成するものなり。故に國家の生存活動の根本基礎は、常に一個人の生存活動より始まらざるものなく、國家の進展退歩も亦一個人の情況如何に原由するものなり。而して人口は共同生活の諸要素に對し、國家の實力を顯はす員數なれば、人口の消長は直ちに國力の盛衰に關するものなり。而して最近の我が帝國本土の人口は、五千一百四十五萬八千〇三十人(明治四十一年十二月調査)あり。之れに臺灣の人口三百二十一萬二千五百七十二人(明治四十一年十二月調査)樺太二萬七千七百十五人(明治四十一年十二月調査)を加ふるときは、我國の總人口は、約五千四百六十九萬八千三百二十四人を算す。これを面積に比すれば、甚だ密にして本國五千四百六十九萬八千三百二十四人のみを以てすれば、明治四十一年末一万里につき二千百五十九人ありて、世界列國中第四位に位す。

諸外國に於ける邦人

臺灣	三二一萬人	同	一、三八四人
北海道本土	一四四萬人	同	二四〇人
千島	四千人	同	四人
琉球	五〇萬人		三四八六八
樺太	二萬七千人		一三八

諸外國に於ける邦人 明治四十一年十二月調査の海外在留本邦人の數は合計四十一萬八千七百三十八人に上ると雖も、此は我が在外大使館又は領事館に届出しものを計算したるものにして、此の外未届のもの多く、且韓國の如きは近時著しく邦人の數を増して、最近は十四萬人に上るならんと云へば、此の合計は精確なりとは云ひ難し。今其の内譯を示せば左の如し、但し各州の内譯は重なるものゝみを擧ぐ。

亞細亞洲	一九〇、八八六八	韓國	四七、三二九人 <small>(是れ明治四十年の調査にして最近は十四萬人に上ると云ふ)</small>
滿洲	三九、二二六八	露領	四、八八二人
南洋洲	四七、三二九八	暹羅	一六六八
暹羅	一六六八	英吉利	四四一人
歐羅巴洲	一、〇六一八	獨逸	三一九八
英吉利	四四一人	佛蘭西	一三二八
獨逸	三一九八		
北亞米利加洲	一五五、〇三二八		

種族

北米合衆國	一五二、七四三九	秘魯	四、五三一人
南亞米利加洲	五、二八二人	比律賓諸島	一、九六九八
伯利西爾	七二四人		
大洋州	六六、四八七八		
布哇諸島	六四、三九四八		

【種族】 我國人種の起原に就きては、種々の説あれども、蒙古人種なる大園内に入るに疑議なきが如し。然れども遼遠の星霜、亞細亞の絶東に卓立して、大陸種族との因縁を絶ち、氣候風土の異なる自ら習俗氣風言語を異にし、所謂大和民族なるものを養成するに至れり。即ち吾等の祖先は、大率此國土を開き給ひし國祖の後裔と云ふも不可なく、宛も一家族の如く集結して、今日の國運を致したるなり。然れども大和民族以外、海外よりの歸化人及び土族(土蜘蛛等)蝦夷等異種族の血も亦混せざるにあらず、殊に最近台灣及び樺太を領有して以來、更に人種に混雜を來せり。今之を大別して、大和民族、アイヌ種族、支那種族、臺灣蕃族、ギリヤク種族、オロツコ種族の六種とす。

大和民族 と云へども、幾多の歲月外國人に接觸すること多かりし爲め、純一なりとは云ふべからず。然れども優秀なる此の民族は、幾多の異族を吸収し、陶冶し、全く大和民族と化せしむるに至りしなり。今之を古史の示す所により稽ふれば、大和民族も、尙、天

大和民族

孫種族（瓊々杵尊系に屬する）出雲民族（大國主命系に屬する）とに分つことを得べし。天孫種族は伊弉諾尊、天照大神、瓊々杵尊と系統を同ふし、出雲民族は伊弉册尊、素戔嗚尊、大國主命と其の系統を同ふし、此の兩系族が、或は根國（諸册二尊）に於て、或は高天原（大神と素尊）に於て、又は出雲（瓊々杵尊の將と大國主命）地方に於て、衝突せられしは、神話傳説ながら、兩派の異なるを示すにあらすや。出雲民族は伊弉册尊及び素戔嗚尊も高天原より根國に降り、其の後裔出雲地方に繁殖し、又諸神の根國に交通するには出雲地方を経たるを以て、出雲と根國とは、實に密接の關係あり、根國派の民族が朝鮮半島と關係ありしことは、古史に明らかに、爲に出雲民族は、韓種と同種族なりと稱するものあり。然れども、天孫種族も、出雲民族も、其の祖國は即ち高天原にして、此の兩種族は同一の地方より一は日向地方に降り（天孫種族）一は出雲地方に降りしものならんと云ふ。

大和民族の傳來

◎【大和民族の傳來】一説に日向の地、其の南方に僻在するを以て、天孫種族は或は馬來種なるべしと云ふと雖も、古史に於て南方との關係を證するもの、事實殆んど無く、常に北方朝鮮半島との關係を保てる事實少からず。即ち對馬、壹岐の二島が早くより、古史に著はれたるに南方の種子ヶ島、屋久島、琉球諸島が少しも關係を示さず。殊に韓國（辛國）の神は各地に之を崇れるも、一も南洋の神を祭る神社なく、殊に豐前國田川郡に鹿野神社あり、辛國の神、息長大姫（神功皇后の生家、息長氏の外戚は、天日槍即ち新羅皇子の裔なれば、日槍の妻、比賣語曾を後世追號して辛國息長大姫と云へるか）の神に配祀するに、忍骨尊、即ち忍孫耳尊を以てせる等、以て北方との

大和民族の眞價

◎【大和民族の眞價】世界に於ける優等なる種族の一なり。曾ては泰西人が文明を以ておのが専有物となし、我大和民族の如きは未開なる阿非利加人種と同じく、性來愚鈍にして共に語るに足らずとせり。是れ東洋歴史の知識に缺乏せると我が國民の性質とを知らざるに基因せる獨斷たるに過ぎず。特に過去三四十年間に於ける我が國民が精神上物質上に於て、文明の進歩駁々として底止する所を知らざるの事實は、我大和民族が毫も白哲人種に遜らざる優等なる種族なることを證明せるを以て、今や歐米諸國の人士も、有識の士は擧げて我が國民の眞價を認識し、敬畏の極、或は却つて黃禍を口にするものあるに至れり。

アイヌ種族

アイヌ種族 古史に熟蝦夷、麁蝦夷の別あり。麁蝦夷はアイヌ固有の風俗慣習を維持し大和民族と同化せざりし者なるが、後には漸次大和民族に壓迫せられ、次第に東北地方に逃れて現今北海道にアイヌ種族として存す。熟蝦夷なるものは、大和民族と接觸して、其の文化を採用したるものにして、今や全く大和民族に同化し終り、其の子孫たるものも之を知る能はざるに至る。然れども、大和民族の内に、蝦夷（アイヌ種族）の混入せるは疑ふ可からざるなり。而して現今北海道に存するアイヌ人は其の數合計一萬七千餘人にして（内、男、八千六百人、女、九千二百人に上り、日高國に住するもの最も多く、男女合計六千三百餘人あり）此の種族は今尙愚昧にして、且漸次滅盡せんとするの傾向あり。此の人種と同一のもの、樺太にも尙千五百九十一人あり。

大和民族
とアイヌ
の混種

◎【大和民族とアイヌの混種】 大和民族の内にアイヌ種族の混入せるは、古史に徴するも明かなり、王朝の末に陸奥に倭人の長阿部頼時を爲す(倭囚とは所謂、熱蝦夷なり)此の時頼時、貞任に従ひし兵士は勿論、武衛系衛の兵もアイヌ種族の民たりしのみならず、藤原泰衡の兵も此種に屬すべし。故に義経が北海道に逃れたり云ふ傳説を存するは、泰衡に屬せしアイヌ種族が北海道に渡りて訛傳を生じたるなるべし。

支那種族

支那種族 臺灣に住する民族にして、總人員三百〇一萬九千四百〇二人(明治四十年十二月)あり。本來は、支那より渡りし滿洲族、漢族及び印度支那等の移住したるものありしならんも、今や之れを區別するに難く、言語、風俗、習慣等全然支那固有の習をなし、阿片吸收等の惡風を存すれども、既に我が王化に浴して、漸次其の固習を失ひ、大和民族に同化せらるるに至らんとす。

而して臺灣には別に熟蕃と稱するものありて、支那種族の言語、風俗等を採用し、一見支那民族と識別し難し。是れ臺灣土蕃の支那種族と接觸し、其の競争に堪へずして、漸次支那民族に化せられしものにて、恰も熱蝦夷が大和民族に化せられたると同一なり。

臺灣蕃族

臺灣蕃族 臺灣の東方山地に住し、支那民族に化せられず。其種族固より一ならざれど前に述べたる熟蕃を除く外は、概して蒙味野蠻なるものにして、所謂是れを生蕃と呼び、全島一帯の地に散在したるを、漸次支那人に驅逐せられたるもの、其の性獐狂頑強にして

異族の其の境に入るを喜ばず、深山幽谷に割據するを以て、其の事情を知ること亦難く我が領臺以來、稍之を知ることを得たれども未だ明確ならず。要するに全島の中央に位置せる、埔里社を中心として、南北の二大部に分ち、北を有蹄蕃人、南を無蹄蕃人とし、其の發達の情態等大いに異なれり。人口約十一萬五千二百四十五人(四十年)あり。(詳細は後章の部を看るべし)

ギリヤーク種族

ギリヤーク種族 我が新領土樺太に住する種族にして、其人口僅に百八十五人に過ぎず未だ文明を知らざる蠻民なり。此の人種は獨り本島に居住せるのみならず、黒龍江下流々域及オホーツク海沿岸の大陸にも散在せり。思ふに其祖先漁獵の利を追ふて本島に移住したるものならん。(詳細は樺太の住民を見よ)

オロツコ種族

オロツコ種族 此の種族も樺太に住し二百六十三人あり、進歩せざる人種とす(尙樺太の住民の部に風俗其の他に) 此の種族も邦領樺太のみならず、露領ツイミ河沿岸及沿海州に居住せり。此の種族は往古本島に在住したるトンチ人種の後なりとも云ひ、或は大陸より移りたりと云ふ説あれども明白ならず。

風俗

【風俗】 已に幾多の人種を有し、各種族風俗を異にするも、茲には全族の支配者たる我が

大和民族に付て一斑を述べんとす。此の民族は古來實着なる自然風を貴び、華美に裝飾する風習は、務めてこれを避くるの傾向あり。その彩色の嗜好に徴するも、艶麗なるより寧ろ幽婉なるを尚び、濃厚よりは却つて淡泊なるを愛し、衣服を製するにも表面は綿布の質素なるを用ひ、裏面には却つて絹布を用ゆるが如く、所謂地味を貴ぶの極、世の粹人と稱せらるゝ輩は、却つて一種の奇癖に陥るものあるに至れり。

我國風俗の斯く質素朴直の風を貴ぶに至りし由因は、我國土の自然之をして然らしめたりと謂はざるべからず。抑々我國山水の景致及び四時の風光は、皆悉く優美の粹にあらざるはなく、到底人工の企て及ぶ所にあらず。既に天地自然の美あり。此の自然の美を有する風土にして、豈に又拙き人工を加へて華美を飾るを要せんや。この觀念は古來我國人の有する所にして、纏て素直なる我國風を作りたる所以ならん。

衣服 氣候温暖に植物鬱茂せるを以て、多く植物質の纖維にて織りたる、綿麻類にて製せる寛潤なる衣服を愛用す。然も最近歐米と交通以來、舶來品は世人の珍重するところとなり、羅紗、猩々緋等は最も翫賞せられ、洋服の如きも漸次に流行することとなり、宮廷の如き正禮の制服は洋裝に改められたり。故に學校、軍隊、警察等、制服ある者は、六月

衣服

一日乃至九月三十日を夏服とし、十月一日乃至翌年五月三十一日を冬服とするの例とまでなれり。是れ近時に於ける服制の一大變革と云ふべし。

食物

食物 亞細亞の重なる諸邦は温暖の地なり、故に亞細亞人が多く植物性の食物を採るは氣候自然の然らしむる處なり。特に亞細亞南部諸國は、夏期に至れば多濕なる西南氣候風流行し、所謂梅雨霖至、氾濫する河水は往々田圃を肥して、稻禾よく生茂し、頗る米作に適す。故に住民は米穀を以て第一の食料とす。特に日本は古より瑞穂ミズホの國と稱し、最も稻作に適するを以て、米作を常業とするもの多く、従て常食には重に米を用ひ、之に次ぐを麥及雜穀とす。其の外蔬菜、海草、木實等を食するものあり。

維新後飲食物も歐米風大に行はれ、器具となく食饌となく、上流社會には歐風勢力を加へ、肉食は一般に流行することとなり、都會は勿論各地に至るまで牛肉、豚肉、牛乳、麵包等の如き要需次第に増加し、特に衛生滋養の議は一層肉食を鼓吹するに到り、洋食の嗜好を劇増して、常飲食物も茲變革せられんとするの傾向を示せり。

住居

住居 我國古代に於ける住居の詳細は不明なるも、多くは不完全なる木造なりし如し。以來幾多の星霜を経て、技術發達し日本固有の家屋を建築するに至りしが、多くは平屋又

は二階屋にして、所謂大厦高樓なるもの甚だ少なし。之れ我が國の良材に富むが故に、廉價に之を建築し得ければなり。而して夏は開通して清風を容れ、冬は閉鎖して寒風を防ぎ、又葺及障子（シヨウジ）を以て風雨を防ぐ等、よく四周の事情及び氣候に適應す可く作らる。但し一般に堅牢ならず、火災にかゝり易き缺點あるを免る可からず。此點に於て現時の家屋構造は、利害得失相半ばせるが如しと雖も、氣候風俗質朴なる人民の住居としては、却つて當を得たるやも知る可からず。近來に到り洋風石造、煉瓦造を營み以て寒國の建築法に倣ふ者あるも、我國に於ける風俗及び地震多き點等より考察せば其の利害果して如何。是れ將來我國民の大に熟圖すべき一問題と云ふ可きなり。

【氣質】 我大和民族は、各種民族の血液を混じたるも、歴代の聖徳の下に同化融合し、且我が國の氣候溫和なると、秀麗なる山水の感化とは、知らずくの間、一種の風格を醸成し、遂に大和民族てう一種粹然たる團體となり、活達捷敏にして思考力に富む、所謂「日本魂」と稱する特種の性格を具し、信義を重んじ、結合力強く、誠實にして忠君愛國の念盛に、一旦漫急あるや水火を踏むも辭せざる國民性を成せり。加之ならず、工藝美術に長じ、日本美術の名は外人の最も賞讃して止まざる所なり。然れども外人の目に映じたる日本國

氣質

民の氣質は、忠勇義烈に富み、天稟の良徳美質あるに拘はらず、往々公徳心を缺き、忍耐力弱く、器局狭少小成に安んじ、宏大壯遠の氣象を缺き、新奇に走りて事に倦み易く、若し困難に遭遇せば、忽ち挫折廢絶するに至るとなすあり。以て他山の石となす可きなり。由來質素勤勉は邦人の特性なりしが、近時滔々として奢侈贅澤に流れ、大に剛健質實の風を缺くの傾向あるは慨歎に堪えず。されば吾人同胞は、此の天稟の美徳良質を維持保全して、之を練磨すると共に、外評の如き缺點を匡正し、須らく大國民たる襟度を養成し、一般の品性を高め、以て世界の競争場裡に雄飛せんことを期せざる可からざる所なり。

本居宣長

敷島の 大和心を人間は、

朝日に匂ふ山櫻かな

一方になびきそろひて花すゝき

風吹くときぞ亂れざりけり

大和民族の國民性

◎芳賀博士の國民性 文學博士芳賀矢一氏は、大和民族の國民性として、左の十箇條を擧げたり。(國民性十論に詳記せらる)

大和民族の國民性

- 一、忠君愛國心強きこと。
- 三、現世的實際的なること。
- 五、樂天洒落なること。
- 七、織麗精巧なること。
- 九、禮節作法を重んずること。

- 二、祖先を崇び、家名を重んず。
- 四、草木を愛し、自然を喜ぶ。
- 六、淡泊洒落なること。
- 八、清淨潔白を好むこと。
- 十、溫和寛恕なること。

藤岡博士の國民性

藤岡博士の國民性 文學博士藤岡作太郎氏は、我が國の自然が如何に大和民族の性情に關係を與へたるかを詳密に論ぜり。今左に其の概要を述べん。

「日本國民の最大の特徴は團結の強固なるにあり。小にしては家を成し、大にしては國を成し、家族は團結して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大陸と離れたる洋中、超然たる仙洞高く、壁を築きて外犯すべからず、内繋るべからざる強固なる國民は養成せられたり。日本は東洋の樂園と稱せられ、氣候中和、山水明媚、瘴烟瘴霧の擾ふことなく、猛獸毒蛇の棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩淼たる長流數百里の山野を浸すを見ず。雄大魁偉なる大陸的風致に乏しといへども、至るところ優麗調雅なる勝景に接す。これに接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穆和なり。これに馴れこれを愛する國民がまた優美にして穆和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化が致すところなるべし。

日本の土地は孔雀を生ぜずして雉子を産す。國民の性も、また孔雀の姿の如く瀟灑ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情、時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに威質猛烈ならずして穆健に、執着せずして洒脫なるも、また外國の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。日本の風土は國民の慈母なり。地球豐饒にして河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に優 穆和なる山川は常に險上に愛を湛ふるが如し。接するものはこれに親み、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ

ラット博士の國民性

ものは愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむるは自然の情なるべし。わが國民は自然を愛賞する餘、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫りに人工の手を加へずして自然の儘に自然を仰ぐ。蒼蒼は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の麗に香の芳しきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに願はくばこれに置く朝露をも落さざらんとする。儼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。西洋草花のナマリツプ、ヒアジンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖麗なるは寧ろわれらが眼に非々しと感ぜらる。秋の女郎花、尾花その花の何の美はしきことかある。されどあるかなきかの黄葩を捧げ、なほたまたと下陸の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色はやかて白くほゞけて霧に濡れ、風に靡く趣は、われらが胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり。直ちに自然の懐にわけ入つてその真意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。

ラット博士の國民性 又北米合衆國エール大學教授ラット博士は、日本人民の特性を左の如く説けり。記して以て参考に資すべし。
「感情的なることは日本人民の特性なり。夫れ感情的氣質は、くまなくの刺戟に應ずるに敏に、其の意志の動くや突飛にして忽ち掛け易きを以て其の特性となす。此の如き氣質は動もすれば政治上の調和を來すべき實際の事情を斟酌をなすこと、又絶えず一事業に敏勵して倦まず撻まざることを、又學術上の精微の理を開發する忍耐力を持つること、又高遠なる思想及び感情と日常の綿密なる事柄との間に確固たる關係を立つることとを離れず。之を離する代りに、斯かる氣象は頗る美術に適したる所あり。即ち是れ人をして雅趣あらしめ、巧手ならしめ、又天來のものならんが如き思ひ附きを懐かじむる氣質なり。
日本人が自然界に對する心構へは感情的にして、學理的ならず、又實務的ならず。日本の青年は君主、國家又は其の特に貴重する理想のために、滿腔の熱情を以て勤勉、勞苦をも辭せずして能く實踐すべき成績を擧ぐるもの珍なからず。然れども彼等の熱情は往々にして浮誇に陥る所あるを免れず。唯だ感

情に激せられ實際の如何を顧みずして、徒に空中樓閣を畫く弊あるを免れず。日本人民の心を支配する唯一の又凡てを侵蝕する徳義は、先づ國君に對して制限なく忠なること、次いで父母に孝に、主人に忠孝なること是なり。一般日本人民に取りては忠孝が至高至大の徳行、凡て他の徳行は是に從屬すべきものなり。其の人民の歴史には此處の山腹彼處の水頭、殆ど忠憤激烈の跡を語らざるはなし。日本人は恰爾なる人民なれども、商業には適せりと云ふを得ず。其の原因の一端は彼等が氣變りのし易きことあり。東洋を遊歴したるものは、皆其の信用を置いて可なるは日本商人よりも寧ろ支那人なりといへり。利害を精算して短氣を起さず、失敗することあるも落膽せず、約束を守りて眼前の小利のために迷はざる、是れ皆感情のなる日本人のなし難しとする所なり。

一時烈火の如く感情に燃えて、一事業に熱中するも、一旦其の爲し途げ難きを見るや忽ち之を抛ちて顧みず。實に其の心事の洒落なる驚くに堪へたり。日本人は早く運命を見て之に安んずるに急なり。一時の激昂一時の熱心に似合はず、些少ながらの障礙に逢へば、早く既に仕方がないと諦めて手を措く。是れ皆日本人の感情的氣質を表はすものに非ざるはなし。

今昔の國氣質

日本の風土と其の人民の氣質と如何なる關係を有するかを考ふるに、日本は山水の美に富めるの地、是れ實に美術を勤め冥想を催すの地なり。然れども又火山、地震、洪水、颶風の國、美にして奇なる地盤の下には恐るべき破傾力の宿れるあり、其の人民亦斯くの如し。一見誠可喜ぶべく親しむべく禮儀あり、親切なる又奇とすべき人民なりといへども、此の美はしき上層の下には、確固たる道徳的觀念を以て統理せられざる國民的感情の潜めるを見るなり。(國民性の項は山崎直方氏の日本地理教科書教授資料による)

◎今昔の國氣質(外人の評) 我邦にか對する外人の批評は、大かた我邦人の性質、風俗、習慣のうつれる處と見るべし。眼に近く見ゆるあり、遠く見ゆるあり、見る人亦謬なきにもあらざる可れども、大なる物は、自ら大なる影をなし、小さな物は、其影も亦小さかる可し。今より百八十餘年の昔、「セシエイト」派なるシヤルウチアなる者、日本の歴史を著はしけるが、その中に日本人の性質を論じたる處、當時の人情の寫眞と見らるべきものあり。其の人の曰く「支那人は智によりて動くも、日本人は體面によりて動く、體面は、日本人の行爲を定むる

惟一の主義なり。支那人は、名譽體面をば、利害得失の量りなる智慧に従ふ可きものとし、日本人は、智慧分別也程和也。用心深き也。師に對し、父母に對し、君に對し、懇懇の情濃なり。然れども、果して是れその眞情に出るや疑はし。且つ夫れ支那人は世界第一の利己的國民也。商業上の詐偽、社交上の詐術、竊盜、虚言は、支那に於て、殆んど默許也。日本人は、淡泊也、眞面目也、不思儀なる程に忠實也、大氣にして、財を輕んじ商業を以て職業と見做すに至る。世界何れの處か、日本人より貪しきものやある。然れども彼れの獨立は、此の貪しきより来る。初期の羅馬人が、他國人に勝れて、強かりしも、此の貪の徳なりき。日本人は、辛ふじて、只生活するのみなれども、その顔には、常に満足の色あり。日本人は眞理を愛す、人あり、彼等に眞理を教ゆれば、彼等は、其無學なりしを自白して憚ららず。日本人は、少しの詐だも許さず。虚偽、竊盜は僥なるも、死を以て之を罰す。日本人は常に「彼自身の主人也」と二百年前の日本人は、略ぼ此の如きものにてありき。試に之を今の日本人に較べ見よ。今の日本人の行に規矩標準となるものは、廉耻か、利害か、今の日本人は、虚偽をば常とするか、大なる罪とするか。今の日本人は、大氣なるか、こせつくか、財を輕んずるか、重んずるか、商業を賤しむか、將た政治、學問を商賣とじ、良心、主義を商品とするか。貧の中に獨立を守るか、富を追ふて、奴隷に甘んずるか。初期の羅馬人に似たりや、末世の猶本人に似たりや。生に安んじ、道を樂んで、乏しきに満足するか。終日役々として、夜だに安らかに眠らざるか。眞理に向て耳を開かんとするか。閉ぢんとするか。紳士に二百ありやなしや。學者に二枚舌ありやなしや。己れは果して己れの主人なりや、又た外物の奴隷なりや。支那人は、今も猶ほ、利己的國民ならん、今も猶ほよく虚言するに相違なし。然れども、日本人と比べて、何れが商業上の道徳に勝れたる。何れか。よく約束上の信義を重んずる。口頭の一約を以て、數萬金を取引する大氣と信用とは、支那人の間に、常に見る所なれども、日本の紳士豪商の間に之れありや、なしや。此點より見れば、二百年の歲月は、支那人には幸に、日本人には不幸にして過ぎしか。此間に日本人は退きて昔の支那人に似寄り、支那人は進みて、昔の日本人を學びたるか。兎にも角にも慨はしきことにこそ。久しく我邦に在りて、疾に十數部の書をかき著はし、専ら日本人の教化に力を盡しつゝある佛人リギョール氏は其近著「理想の青年」に

絶叫して曰く。『今や敗風汚俗の急潮は、駭々として進み來れり。昔時の道徳、君子國の美風、愛國の精神皆其念湖に引取られたり。武士道も大和魂も今それ何れの處にか在る。知らずや、今その渦中に捲込まれつゝあるを。嗚呼、吾れ、日本人ならざるも、日本人の爲めに、深く之を惜み、痛く之を慨す。吾は、日本の美を慕ふて來れり、其穢れなる状態を泣くが爲に來れるにあらざるなり』と。同じく外人の感ずる所也。昔人は愛し、今人は泣く。我人情風俗の變之を然らしむるか。富士の清き姿こそ、今も昔に變らざれ。世の習、人の心、日々賤くなり行くぞ痛ましき。(國民新聞人見市太郎氏述)

正氣歌

藤田東湖

天地正大氣 粹然鍾神州 秀爲不二嶽 巍々聳千秋 注爲大瀛水 洋々漲九州
 發爲萬彙機 柔芳維與儲 凝爲百鍊鐵 銳利可斷髮 靈臣皆熊羆 武夫盡好仇
 神州執君臨 萬古仰天皇 皇風洽六合 明德俾太陽 不世無汚辱 正氣時放光
 乃參大運議 侃々排私壘 乃助明主斷 猷々焚伽藍 中耶嘗用之 宗社鑿石安
 清塵嘗用之 妖僧肝膽寒 忽揮龍口劍 虛使頭足分 忽起四海風 怒濤漲胡氛
 志賀月明夜 陽爲風雲巡 芳野戰酣日 又代帝于屯 或投練倉窟 憂憤正憤々
 或伴櫻井驛 遺訓何懸懸 或殉天目山 幽囚不忘君 或守伏見城 一身當萬軍
 昇平二百歲 斯氣常獲伸 然方其辭風 生四十七人 乃知人雖亡 英靈未嘗泯
 長在天地間 隱然叙舞倫 執能扶持之 卓立東海濱 忠誠尊皇室 學敬事天神
 併文與奮武 誓要清初歷 一朝天步難 邦君身先淪 頑鈍不知機 罪戾及孤臣
 孤臣困萬萬 君冤向誰陳 孤子遠墳墓 何以謝先親 在昔二周星 唯有斯氣聞
 嗟予雖萬死 豈忍與汝離 風伸付天地 生死復奚疑 生當雪君冤 復見張綱維
 死爲忠義鬼 極天護皇基

第二章 教育

一國の隆盛增長は教育の盛否に關す。教育の進歩發達は克く時代の風潮、國民の觀念、活動、生活の程度其の性質を現はす者なり。されば將來國民が雄大の志想を有し、世界の競争場裡に赴かん徑路と命脈の如何は、眞に是れ教育に於て豫知すべきなり。

我國は古來國民一般が熱心に教育に向つて注意し計畫せしものゝ如く、之を遠き昔に求むれば天智天皇の御代、既に學校を開設し子弟を養育せられし以來、朝廷管轄の下大學を開き國學院設けられ、尙ほ一家一族の間私立學校を起して以て教育を奨励したりしが、維新以來今日に於ては特に教育の方法を講せられ、各所に大學、高等學校、中學校等を設置し今や、全國如何なる僻村遠隔の地に到るも、小學校の設けあらざるはなき有様となりぬ。更に教育の方針にあつては、初め歐米の學說方式は脱兎の勢力を以つ浸入し來り、智識啓發のみに勉めし結果は、茲に德義頹廢の缺點を招きしかば、或は國家主義、時に儒教主義、泰西主義等の教育方針を取りしが、何れも皆德義上缺如して統一する所なかりき。然るに明治二十三年十月三十日教育に關して 大詔勅を發布せられし以來、今日に於いては國民

教育の基礎愈々確立し、德育の唱導せらし結果、道德思想の統一は以つて智識啓發に伴ふ必然的現象となり、教育學術は彌々發揚せられ、其の隆昌なる實に未曾有の徵證を示せり。

◎教育の本旨 徳、智、體の三育を完成せしむるに存す。其の一を欠かば學なきに若かず。蓋し智育は萬有の智識を開發し以て人に活動の資源を得しむるに在り。體育は自體を健全にし以て智識を運用するに遺憾なからしむるに存し、德育は國民として將又人類として遵守すべき道德上の志念を涵養し、智力と體力とが偶以て世を害するなからんことを期するにあり。三育の輕重すべからざるを知るべし。我が國教育の現狀は智體二育に於ては今や殆ど其の極度に達せりと雖も、德育の一事は未だ其の完きを保せず。

◎我國教育の沿革 王仁百濟より來りて典籍を獻じたるを以て、我に文學あるの始とし、學校の設あるは天智の朝に始まり、大寶に至りて其制大に完し。大寶の制、大學寮、隱陽寮、典藥寮、雅樂三寮の外は庶人入學を許さざるを原則とし、其の卒業者は科賦を経て官に任ぜらる。故に學問は官吏の養養たるに過ぎりしなり。然るに其の後、文章、明法、明經、書算、醫藥、隱陽等、漸次諸家の專業に歸し、學寮も漸次衰進に向ひたるを以て、名族は各其私學を述て、同族の教育に任ぜり。其の主なるものは弘文院(延暦末年和氣氏創立)勸學院(天長三年藤原氏創立)學館院(嘉祥三年橘氏創立)非學院(元慶五年在原氏創立)淳和院(王氏の創立)等とす。武門國權を掌握するに至りて、文教また振はず、僧侶の外文字を解するものなく、苟も學業に志す者は皆緇衣に就く、寺小屋の稱是より起る。此の時學校と稱すべきものは國學の遺物たる下野の足利學校あるのみ。徳川幕府の立つに及び文教再び大に興り、寛永七年弘文院を興し、後、昌平校と改稱し、寛政中、終に之を官立學校となし、士分以上をして就て學ばしめ、其の他後年に至り番書取調所、天文寮、醫學館、和學講談所等の設あり。諸藩に於ても亦各學校を建つ、之を藩學と稱し、其の數前後通じて四百に垂んとす。其の著名なるものは會津の日新館、米澤の興讓館、尾張の明倫館、伊勢の有造館、加賀の明倫堂、岡山の閑谷學校、萩の明倫館、鹿児島造士館、肥後の時習館等とす。此の他又諸國の儒家、到る所皆其の家塾を有せり。

我國の教育は明治維新に至る迄は技能教育に於て、精神教育に於ては總て儒學を以てす。幕末の世藩學の興りたるも當時に於ては畢竟末技たるのみ。應神天皇以後、千六七百年の間儒學が我が文教の基礎を爲したるの事實は、我が國體の字内無比の美を致したるに於て、與て大に力あるところなり。

明治維新の後、四年文部省を置き五年學制を定めて、全國を八大學區、二百五十六中學區、(一)大學に三十二中學區、(二)五萬三千七百六十小學區、(三)中學區に二百十小學區に分ち、各區等に應じて大中小學各一を置かしめ、小學校を尋常小學、女子小學、村落小學、貧人小學、小學私塾、幼稚小學の六種とし、中學校を普通の中學校の外、工業學校、通算學校、農業學校、諸民學校、遊人學校とし、此の他師範學校を置きて師範教育に富らしむ。翌六年外國語學校、法學校、醫學校、礦山學校、理科學校、諸藝學校を加へたるも當時事實上施行せられたるものは師範學校、小學校あるのみ。其の他は見るに足るものなかりしが、世運の進歩は此等各種の學校の設立を促し、年と共に文化改まり、明治十八年、森有禮氏の文部大臣たるや、大に學制を改革し、大學令、師範學校令、中學校令、小學校令等を定め、益々其の發達を期せり。是先明治維新と共に社會の上下舉りて、歐米の文物を歡迎し我が國從來の文化は其の立脚地を失ひ、而も泰西の精神上の文明は未だ完全に我に輸入せられず、故に教育の方面に於ても其の標準適從する所を知らざりしが、明治二十三年十月三十日教育に關する勅諭を文部大臣に下し賜はり、茲に我總育の方針確立せり。爾來制度に於ても實際に於ても教育の進歩せること、年に著しく以て現今の制を見るに至れり。

教育は其實質上より分ちて、學理教育、業務教育、豫備教育の三種とし、又形式上より分ちて、初等教育、中等教育、高等教育の三種とす。今又其内容性質に従つて分類すれば左の如し。

幼稚園

幼稚園 幼稚園にて保育せらるべきものは、満三歳より尋常小學校に入學する迄の幼児にして、其の主旨は家庭教育を補助するに在り。其の數、官立一、公立百九十九、私立百六十合計三百六十あり。

盲啞學校

盲啞學校 官立に東京盲啞學校、公立に京都市立盲啞院あり。その他私立二十九校ありて合許三十一校とす。

中等教育

【中等教育】 我國に於ける中等教育機關は中學校、高等女學校、及び之に準すべき各種の學校と學習院中等學科となり。

中學校

中學校 男子に中等教育、即ち普通教育の高等なるものを教ふる所にして、北海道及び府縣は其の經費を以て(沖繩縣を除く)必ず一の中學校を設備すべき義務を負ひ、尙ほ文部大臣に於て、必要と認むるときは之が増設を命せらるることあり。

●現況 明治四十年度に於ける現在は、中學校數官立二、公立二百二十九、私立五十六、合計二百八十七校にして、教員五千四百五十七人、生徒十一萬一千四百餘人を養成す、即ち人口百萬に付校數は五校八分、生徒は二千二百三十九人にして人口の千分の二強は現に中

學校生徒たり。更に四十一年末現在の調査によれば設置認可せられたる校數三百三校(官公立二百四十三校、私立六十校)に上る。

高等女學校

高等女學校 女子に中等教育を興ふる機關にして、北海道、及び各府縣は之を設立する義務を負ひ、その他の公共團體及び私人の之を設立するを得ること中學校に異ならず。唯中學校と異なるところは、郡市町村立の高等女學校ある府縣に於ては、之を府縣立の代用とし、別に府縣立のものを設けざるを得ること是なり。

●現況 明治四十年度に於ける高等女學校は百三十三校(官立一、公立百〇七、私立二十五)生徒四萬〇二百七十三人(官立三百五十六人、公立三萬三千四百人、私立六千四百九十八人)を算す、即ち人口百萬人に付校數二校四分、生徒は七百四十餘人とす。更に四十一年末現在の調査に依れば設置認可せられたる總數百六十校(官公立百二十四校、私立三十六校)に上ると云ふ。盛んは盛なりと雖も未だ男子の中等教育の盛んなるに及ばざること遺憾し。

師範教育

【師範教育】 師範學校、中學校、高等女學校、小學校の教員たるべき者を養成するを以て目的とするものにして、高等師範學校、女子高等師範學校、師範學校の三種とす。

高等師範學校

高等師範學校 東京及び廣島にあり。師範學校、中學校、高等女學校の教員たるべき者

を養成するところなり。

學科 理科、文科、研究科に分ち更に本科を國語漢文、英語、地理歴史、動物化學、博物學の五部に分ち、東京には別に専修科及び選科を置く。

女子高等師範學校

女子高等師範學校 東京及び奈良にあり。共に師範學校女子部、高等女學校の教員たるべきものを養成する所なり。

學科 東京は文科、理科、技藝科に分ち、奈良は之を理科及び本科とし、本科を國語漢文、地理歴史、動物化學、博物學家等の四科に分ち。

師範學校

師範學校 小學校教員の養成所にして、北海道各及び各府縣は一枚以上を設立し、之に附屬小學校を置くの義務あり。

學科 理科、本科に分ち、本科は更に第一部、第二部の二とす。第二部は土地の情況により、之を設けざることを得。

專門教育

【專門教育】 程度の高下を問はず、專門の學術技能を教授する學校を總稱するものにして、法令上の所謂專門學校なり。帝國大學、師範學校、陸海軍諸學校、諸種の實業學校、私立專門學校等を包含し、其範圍甚だ廣し。

帝國大學

帝國大學 國家の須要に應ずる學術技藝を教授し、及び其の蘊奥を攻究せしむる學校に

して、帝國最高の學府たり。分つて大學院及び分科大學とす。分科大學は東京帝國大學にては法科、醫科、工科、文科、理科、農科の六科とし、京都帝國大學は法科、醫科、文科、理工科の四とし、其の醫科を第一、第二に分ち、第一醫科大學は京都帝國大學京都醫科大學と稱し、法、文、理、工の三科と共に京都にあり、第二醫科大學は福岡に置き、京都帝國大學福岡醫科大學と稱す。東北帝國大學は仙臺に置くに決し、其の農科大學は札幌にあり、札幌農學校の後身たり。農科大學の外東北帝國大學の他の分科大學は未だ開設せらるゝに至らず。

分科大學の學科 東京帝國大學の法科大學には法律學、政治學、經濟學の三科に、醫科大學を醫學、藥學の二科に(別に國家醫學講習科あり)工科大學を土木工學、機械工學、造船學、造兵學、電氣工學、建築學、應用化學、火藥學、探礦學、冶金學の十科に、文科大學を哲學、史學、文學の三科に、理科大學を數學、星學、理論物理學、實驗物理學、化學、動物學、植物學、地質學、礦物學の九科に、農科大學を農學、農藝化學、林學、獸醫學の四科(別に農學、林學、獸醫學の實科あり)に分ち尙各分科大學に選科を、醫、文、理の三分科に研究科を置く。
京都帝國大學の法科には法律學、政治學の二科、醫科は醫學科のみにし、文科は哲學、史學、文學の三科、理工科は數學、物理學、純正化學、製造化學、土木工學、機械工學、電氣工學、探礦冶金學の八科に分ち、別に選科生の設けあり。
東北帝國大學の農科大學に農學、農藝化學、林學、畜産の四科とし、大學理科、土木工學科、林學科及び水産學科を附屬す。林學科、畜産科は明治四十三年九月開始の豫定なり。

高等學校

修業年限 東京帝國大學は大学院五年、法科及び醫科大學醫學科は四年、其の他は三年なり。京都帝國大學に於ては大学院は一年以上、醫科は四年、法、理、工科は三年なり。
學生數 東京五千四百一十一人、京都一千四百一十二人、東北に六百九十四人、合計七千五百餘人に及ぶ。

高等學校 専門學科を教授するに在りて、大學豫科を置くは附帶事業なるも、實際は大
學豫科のみを置く。而して現今は第一(東京)第二(仙臺)第三(京都)第四(金澤)第五(熊本)
第六(岡山)第七(鹿兒島)第八(名古屋)の高等學校あり。

高等學校大學豫科の學科を第一部、第二部、第三部に分つ。第一部は法文科、第二部は理工農科、第三
部は醫學科の志望者を養成し、修業年限は三年なり。

専門學校

専門學校 専門教育機關の一部分にして、法制上の所謂専門學校を稱す。

官立専門學校 醫學校は五校あり千葉、仙臺、岡山、金澤、長崎醫學専門學校にして外に
東京外國語學校、東京美術學校、東京音樂學校あり。

公立専門學校 明治三十九年度現在公立専門學校は、公立三、私立三十九、合計四十
二校にして、生徒數公六千四百人、私立一萬九千四百人、合計二萬八千人あり。

- 公立専門學校表 (明治三十九年度現在)
- 公立...三 計六
- 私立...三 計六
- 京都府立醫學專門學校(京都)
- 大阪府立高等醫學學校(大阪)
- 愛知市立醫學專門學校(名古屋)

私立東京慈惠醫院醫學專門學校(東京) 私立熊本醫學專門學校(熊本)

公立...〇 計一

私立早稻田大學(東京) 私立慶應義塾大學部(東京)

私立日本大學(東京) 私立明治大學分校(東京)

私立京都法政大學(京都) 私立專修學校(東京)

私立關西大學(大阪)

公立...〇 計一

私立早稻田大學(東京) (本校は文學と共に政治、法律經濟の學をも教授するを以て茲に重出す)

私立慶應義塾大學部(東京) (前同) 私立東洋大學(東京)

私立青山學院高等科(東京) 私立明治學院高等學部(東京)

私立青山女學院英文專門科(東京) 私立女子英學塾(東京)

私立東京學院高等科(東京)

◎宗教を教ふる専門學校

公立...〇 計一六

私立曹洞宗大學(東京) 私立天台宗大學(東京)

私立日蓮宗大學(東京) 私立宗教大學(東京)

私立聖教社神學校(東京) 私立東京三一神學校(東京)

私立明治學院神學部(東京) 私立古義眞言宗聯合高等中學(京都)

私立同志社神學校(京都) 私立大阪三一神學校(大阪)

私立眞宗勤學院高等科(三重縣河野郡一身田村)

私立九州藥學校(熊本)

私立中央大學(東京)

私立法政大學(東京)

私立東洋殖民學校(東京)

私立國學院大學(東京)

私立日本女子大學校(東京)

私立同志社專門學校(京都)

私立眞宗大學(東京)

私立宗教大學分校(京都)

私立青山學院神學部(東京)

私立佛敎大學(京都)

私立東北學院專門部(仙臺)

實業學校

【實業學校】

工業、農業、商業等の實業に従事するものに須要なる教育を施す學校を謂

第三章 宗教

宗教

我が國民は憲法により、日本國民として安寧秩序を妨げず又義務に背かざる限り、信教の自由を有するものにして、現今最も多く信奉せらるゝは、神教、佛教、基督教なり。

神教 神教は純然たる宗教にあらず。即ち我國は古來敬神の美風あり、祖先を祀り英雄を拜す。之を名つけて神教と云ふを以て、假に宗教の範圍に屬するとするも、佛教、基督教に比しては大に徑庭あり。

神教は、元來皇祖皇宗の遺訓に基き、唱導せられたる我が國古有の教儀を崇奉するものにして、其の祭祀する所の神社は皇祖皇宗を祀り、又は國家に功勞ある者、朝廷に忠實なる武將、或は稀世の賢人を祀る。

神教の派別 祭祀教法に關し其の宗派は左の十三となる。
神道 大社教 扶桑教 實行教 黒住教 修成派
大成教 神習教 御嶽教 禊教 神理教 金光教 天理教

神教の教師は最近の調査によれば七萬八千七百餘人あり、内神道大多數を占めて、三萬二

神教

千餘人を算す。此の他臺灣に神道の布教師十人あり。

神社格 を分ちて ①神宮、②官幣大社、官幣中社、官幣小社、③國幣中社、國幣小社、④別格官幣社、⑤府縣社、郷社、村社、無格社とす。

①神宮 伊勢大廟即ち大神宮なり。②官幣大社、③國幣中社 共に神代諸神及び天皇又は皇族を祭り、天皇以後の人臣にして官、國幣社に祀らるゝものは官幣中社に於て菅原道真、國幣中社に於て武内宿禰あるのみ。④別格官幣社 祭神は和氣清麻呂を始として都て人臣なり。又、官、國幣社の中には神寶を以て神祇とする者熱田神社、石上神社(大和國)、出石神社(但馬國)等あり。

【官國幣社表】 官幣大社 合計四十五社

神社名	祭	神	所	在	地
男山八幡宮	饗田別尊、神功皇后、比賣神	神	山城國綴喜郡八幡町八幡莊		
松尾神社	大山咋尊、中津島姬命	神	同 葛野郡松尾村上山田		
平野神社	今木神、久度神、古閑神、比賣神	神	同 葛野郡衣笠村小北山		
稻荷神社	倉稻魂神、猿田彦大神、大宮女神	神	同 紀伊郡深草村福稻		
賀茂別雷神社	別雷神	神	同 愛宕郡上賀茂村上賀茂		
賀茂御祖神社	玉依姬命、賀茂健甕命	神	同 愛宕郡下鴨村下鴨		
平安神社	桓武天皇	神	同 京都市上京區岡崎町		
大神神社	倭大物主櫛玉神	神	大和國磯城郡三輪町三輪		
大和神社	倭大國魂神、八千戈神、御年神	神	同 山邊郡朝和村新泉		
石上神社	布都御饗飯	神	同 山邊郡丹波市町布留		

官國幣社表

春日神社 武甕槌神、經津主神、天兒孫根命、比賣神
 廣瀨神社 若宇迦賣神
 龜田神社 天御柱神、國御柱神
 丹生川上神社 高麗神、罔象神(又罔象女神とも云ふ)
 權原神社 神武天皇、五十鈴媛命
 吉野宮 後醍醐天皇
 牧岡神社 天兒孫根命、健甕神、經津主命、比賣神
 大島神社 大島連祖神
 住吉神社 表筒男神、中筒男神、底筒男神、神功皇后
 生國魂神社 生國魂神、足國魂神
 廣田神社 權賢木殿之御魂天疎向津媛命
 熱田神社 草薙神劍
 淺間神社 木花咲耶姬命
 三島神社 玉殿入彦殿之尊代主命
 水川神社 紫雲鳴尊、大己貴命、稻田媛命
 安房神社 天太玉命
 香取神社 經津命
 鹿島神社 武甕槌神
 日吉神社 大山咋神
 建部神社 日本武尊
 氣比神社 神功皇后外六神
 出雲大社 大國主神

大和國奈良市奈良町春日野
 同 北葛城郡河合村河合
 同 生駒郡三郷村立野
 同 吉野郡(上社)川上村(下社)南芳野村丹生
 同 高市郡白檜村
 同 吉野郡吉野村吉野山
 河内國中河内郡牧岡村出雲井
 和泉國泉北郡鳳村大島
 攝津國東成郡住吉村
 同 大阪府東區生玉町
 同 武庫郡大社村廣田
 尾張國名古屋府南區熱田神宮阪町
 駿河國富士郡大宮町大宮
 伊豆國田方郡三島町三島
 武藏國北足立郡大宮町高鼻
 安房國安房郡神戶村大神宮
 下總國香取郡香取町香取
 常陸國鹿島郡鹿島町宮中
 近江國滋賀郡坂本村坂本
 同 栗太郡瀬田村神領
 越前國敦賀郡敦賀町曙
 出雲國簸川郡杵築町杵築東

官幣中社

◎官幣中社 合計二十六社

日前(神宮) 日前大神
 國懸神宮 國懸大神
 伊弉諾神社 伊弉諾尊
 香椎宮 神后皇后
 宇佐神宮 譽田別尊、比賣神、大帶姫命
 宮崎宮 神武天皇
 鶴戸神宮 鶴鷲草葺不合尊
 鹿兒島神宮 彦火々出見尊
 宗像神社 名祖理媛命、市杵島媛命、多紀都媛命
 霧島神宮 彦火瓊瓊杵尊
 札幌神社 大國魂神、大己貴神、少彥名神
 蘆澤神社 大國魂神、大己貴神、少彥名神、能久親王
 樺太神社 太國魂命、大己貴命、少彥名命

紀伊國海草郡宮村秋月
 同 同
 淡路國津名郡多賀村多賀
 筑前國糟郡香椎村香椎
 豐前國宇佐郡宇佐町南宇佐
 日向國宮崎郡大宮村
 同 南那珂郡鶴戸村宮浦
 大隅國始良郡西國分村內
 筑前國宗像郡田島村下北方
 大隅國東畷山村田口
 石狩國札幌郡圓山村
 臺灣臺北廳芝蘭一堡銀潭山
 樺太豐原町

八咫神社 素戔鳴尊、稻田媛命、八柱御子神
 白降宮 崇德天皇、淳仁天皇
 梅宮神社 酒解神、大若子神、小若子神、酒解子神
 廣船神社 罔象神(又罔象女神とも云ふ)
 大原野神社 健甕槌神、經津主神、天兒孫根神、比賣神
 吉田神社 同
 北野神社 菅原道真

山城國京都市下京區四條河原町
 同 上京區飛鳥井町
 同 葛野郡津村西梅津
 同 愛宕郡鞍馬村實船
 同 乙訓郡大原野村大原野
 同 京都市上京區吉田町
 同 上京區御前通馬喰町

水無瀬宮 後鳥羽天皇、土御門天皇、順德天皇
 生田神社 稚日女尊
 長田神社 奉代主神
 井伊谷宮 宗良親王
 鎌倉宮 護良親王
 日枝神社 大山咋神
 金鍬神社 天照大神、素戔嗚尊
 多賀神社 伊弉諾尊、伊弉册尊
 諏訪神社 健甕名方宮命、八坂刀賣神
 月山神社 月讀尊
 金崎宮 尊真親王、恒真親王
 海神社 底中、上津綿津見神
 赤間宮 安徳天皇
 龜山神社 五湖命
 箱崎宮 應神天皇
 大宰府神社 菅原道真
 英彦山神社 忍骨命
 阿蘇神社 健甕龍命
 八代宮 恒真親王

官幣小社

◎官幣小社 合計三社
 大國魂神社 武藏大國魂神

攝津國三島郡島本村廣瀬
 同 神戸市下山手通二丁目
 同 長田村
 遠江國引佐郡井伊谷村
 相模國鎌倉郡鎌倉町二階堂
 武藏國東京市豊町區水田町二丁目
 同 見玉郡青柳村二ノ宮
 近江國犬上郡多賀村多賀
 信濃國諏訪郡(上社)中洲村(下社)下諏訪町
 羽前國東田川郡立谷澤村及泉村
 越前國敦賀郡敦賀町泉
 播磨國明石郡垂水村西垂水
 長門國下關市阿彌陀寺町
 肥前國海草郡三田村和田
 肥前國糟屋郡箱崎町箱崎
 同 筑紫郡太宰府町太宰府
 豐前國田川郡彦山村彦山
 肥後國阿蘇郡宮地町
 同 八代郡八代町
 武藏國北多摩郡府中町府中

別格官幣社

◎別格官幣社 合計二十三社

鹿門神社 玉依姫命
 波上宮 速玉男神、伊弉册神、奉解男神
 豐國神社 豐巨秀吉
 建勳神社 織田信長
 護王神社 和氣清盛
 梨木神社 三條實光
 淡山神社 藤原鎌足
 四條畷神社 楠木正行
 淡川神社 楠木正成
 阿部野神社 北畠親房、顯家
 結城神社 結城宗茂
 東照宮 德川家康
 靖國神社 維新戦役及以後殉國士
 小御門神社 藤原師賢
 常磐神社 徳川光圀、同慶昭
 東照宮 徳川家康
 唐澤山神社 藤原秀郷
 蝦山神社 北畠親房、顯家、顯信、守親
 上杉神社 上杉謙信
 藤島神社 新田義貞

筑前國筑紫郡太宰府町北谷及御笠村大石
 琉球國那覇郡若狹町

山城國京都市下京區大和路通正面茶屋町
 同 愛宕郡大宮村東紫大門
 同京都市上京區烏丸通下立賣上ノ櫻橋四町
 同 上京區寺町通石薬師下ノ染殿町
 大和國磯城郡多武峰村多武峰
 河内國北河内郡甲可村南野
 攝津國神戶市兵庫多聞通三丁目
 同 東成郡住吉村住吉
 伊勢國津市江尻藤方村
 駿河國安倍郡久能村根古屋
 武藏國東京市豊町區宮士見町
 下總國香取郡小御門村名古屋
 常陸國水戸市常盤公園
 下野國上郡日光町日光
 同 安蘇郡出沼町栃木
 岩代國伊達郡靈山村大石
 羽前國米澤市雨畑端町
 越前國吉田郡西藤島村牧島

國幣中社

◎國幣中社 合計四十九社

- 尾山神社 前田利家
- 名和神社 名和長年
- 豐榮神社 毛利元就
- 菊池神社 菊池武時
- 照國神社 島津齊彬
- 敢國神社 敢國津神
- 淺間神社 木花咲耶姬命
- 寒川神社 寒川彦神、寒川姬神
- 越前八幡宮 應神天皇
- 玉前神社 玉前神
- 大洗磯前神社 大己貴神
- 酒列磯前神社 小彦名神
- 南宮神社 金山彦神
- 生島足島神社 生島神、足島神
- 貫前神社 經津主神
- 二荒山神社 二荒山神
- 二荒山神社 豐城入彦命
- 部々古別神社 部々古別神
- 部々古別神社 味鋸高彥根神
- 伊佐須美神社 大彥命、武沼河別命

- 加賀國金澤市四町
- 伯老國四伯郡名和村名和
- 周防國吉敷郡上宇野令村上宇野令
- 肥後國菊池郡限府町
- 薩摩國鹿兒島市山下町

- 伊賀國阿山郡府中村一ノ宮
- 甲斐國東八代郡一宮村一樓
- 相模國高座郡寒川村宮山
- 同 鎌倉郡鎌倉町雪ノ下
- 上總國長生郡一宮町一宮本郷
- 常陸國東茨城郡磯濱町
- 同 那珂郡平磯町
- 美濃國不破郡宮代村
- 信濃國小縣郡鹽田村下之郷
- 上野國北甘樂郡一ノ宮町一ノ宮
- 下野國上都賀郡日光町日光
- 同 宇都宮市馬場町
- 磐城國東白川郡棚倉町棚倉
- 同 近津村八槻
- 岩代國大沼郡高田町

- 志波彦神社 志波彦神
- 鹽竈神社 鹽竈神
- 大物忌神社 大物忌神
- 若狹彦神社 若狹彦神、姬狹姬神
- 氣多神社 大己貴神
- 射水神社 二上神
- 彌彦神社 天香山命
- 出雲神社 大國主命、三穗津姬神
- 籠神社 天中分神
- 出石神社 八種神寶
- 宇部神社 武內宿禰
- 美保神社 事代主神
- 熊野神社 神祖熊野大神、櫛御氣野神
- 水若酢神社 水若酢神
- 中山神社 金山彦神
- 安仁神社 安仁神
- 吉備津神社 大吉備津彦神
- 嚴島神社 市杵島姬神
- 住吉神社 表、中、底筒男三神ノ荒魂
- 伊太祁會神社 大屋彦神
- 熊野產神社 家都御子神
- 大麻比古神社 大麻比古神

- 陸前國宮城郡鹽竈町
- 同
- 羽後國飽海郡吹浦村吹浦及巖岡村杉澤
- 若狹國遠敷郡遠敷村龍前及遠敷
- 能登羽咋郡一宮村一宮寺家
- 越中國高岡市大字本丸
- 越後國西蒲原郡彌彦村彌彦
- 丹波國南桑田郡千歲村千歲
- 丹後國與謝郡中村大垣
- 但馬國出石郡神美村宮内
- 因幡國岩美郡國府村宮下
- 出雲國八束郡美保關村美保關
- 同 八束郡熊野村
- 隱岐國隱地郡五箇村宇都
- 美作國吉田郡一宮西一宮
- 備前國邑久郡大宮村藤井
- 備中國吉備郡真金村
- 安藝國佐伯郡嚴島町
- 長門國豐浦郡豐東上村楠乃
- 紀伊國海草郡西山東村伊太祁會
- 同 東牟婁郡本宮村
- 阿波國板野郡板東村板東

第二編 人文地理概説

- 忌部神社 天日鷲命
 - 田村神社 田村神
 - 金刀比羅宮 大物主神、崇徳天皇
 - 大山祇神社 大山祇神
 - 土佐神社 一宮主神
 - 高良神社 高良玉垂神
 - 西寒多神社 西寒多神
 - 田島神社 多紀理姫命、市杵島姫命、多岐津姫命
 - 新田神社 瓊々杵尊
 - 住吉神社 上、中、底筒男三神
 - 海神社 豊玉姫神
 - 函館八幡宮 照神天皇
 - 眞清田神社 大明神
 - 砥鹿神社 大己貴神
 - 小國神社 小國神
 - 神部神社 大己貴神
 - 淺間神社 木花咲耶姫
 - 大藏御祖神社 大藏御祖神
 - 水無神社 水無神
 - 戸隠神社 天手力雄命
- ◎國幣小社 合計二十六社
- 同 雄島市宮田浦町二軒屋町
 - 同 釧路國香川郡一宮村一ノ宮
 - 同 伊豫國越智郡宮浦村宮浦
 - 同 土佐國土佐郡一宮村一宮
 - 同 筑後國三井郡御井町
 - 同 豐後國大分郡東植田村栗田
 - 同 肥前國東松浦郡呼子村加部島
 - 同 薩摩國薩摩郡東水引村宮内
 - 同 豐後國豊後郡那賀村住吉
 - 同 對馬國上縣郡峯村木坂
 - 同 渡島國函館區谷地頭町
 - 同 尾張國中島郡一宮町一宮
 - 同 三河國寶飯郡一宮村一宮
 - 同 遠江國周智郡一ノ宮村立川
 - 同 駿河國靜岡市宮ヶ崎町
 - 同 飛騨國大野郡宮村宮
 - 同 信濃國上水内郡戸隠村戸隠

- 駒形神社 駒形神
 - 岩木山神社 宇都志國魂神、多都比呂賣命、宇賀能賣命
 - 出羽神社 伊弉波神
 - 湯殿山神社 大山祇神
 - 古四王神社 武甕槌神、大彦命
 - 白山比咩神社 菊理媛神、伊弉諾尊、伊弉册尊
 - 菅生石部神社 菅生石部神
 - 度津神社 五十猛神
 - 大神山神社 大己貴神
 - 日御碕神社 素戔鳴尊
 - 須佐神社 素戔鳴尊
 - 物部神社 可美真手命
 - 伊和神社 大己貴神
 - 沼名前神社 綿津見神
 - 玉祖神社 玉祖神、外一座未詳
 - 諏訪神社 健御名方神、八坂刀賣神
 - 都農神社 大己貴神
 - 枚聞神社 枚聞神
- 以上通計 百七十二社
- 同 陸中國股澤郡水澤町鹽竈
 - 同 陸奥國中津輕郡岩木村百澤
 - 同 羽前國東田川郡手向町
 - 同 東村參保
 - 同 羽後國南秋田郡寺内村寺内
 - 同 加賀國石川郡河内村三宮
 - 同 江沼郡福田村敷地
 - 同 佐渡國佐渡郡羽茂本郷村飯岡
 - 同 伯耆國西伯郡大高村尾高
 - 同 出雲國鏡川郡日御碕村日御碕
 - 同 石見國安濃郡川合村川合
 - 同 播磨國赤松郡神戶村須行名
 - 同 備後國沼隈郡鞆町後地
 - 同 周防國佐波郡石田村大崎
 - 同 肥前國長崎市西山郷
 - 同 日向國兒湯郡鹿村川北
 - 同 薩摩國揖宿郡須賀村十町

官國幣社の多數なるは畿内諸國にして、山城十八、大和十、攝津八、之に河内の二、和泉の一を加ふれば三十九社にして全國の四分の一弱を占む。二千五百年來多く帝都は此の畿

瀧を本據となし、淨土宗は京都、愛知、臨濟宗は静岡、日蓮宗は千葉に最も多し。概して寺院の多きは愛知、千葉、滋賀、新潟、京都にして、何れも三千ヶ寺以上を有し、鹿児島九十九ヶ寺、沖縄の四十三ヶ寺、高知の二百〇九ヶ寺を最も少數とす。即ち本州中部、近畿北越地方は盛にして九州、四國特にその南方に盛ならず。これ歴史上の由来もあるべく、人情風俗にも本づくるべし。

宗派本山所在地表 今十二宗、五十六派の本山名及所在地を左に示さん。

◎天台宗

本派 延暦寺(滋賀縣滋賀郡坂本村) 眞盛派 西教寺(滋賀縣滋賀郡坂本村)

◎眞言宗

東寺派 教王護國寺(東寺)(京都市) 大覺寺派 大覺寺(京都府葛野郡嵯峨村)

泉涌寺派 泉涌寺(京都市) 醍醐派 三寶院(京都府宇治郡醍醐村)

山階派 勸修寺(京都府宇治郡山科) 新義眞言宗智山派 智積院(京都市)

小野派 隨心院(京都府宇治郡山科) 新義眞言宗豐山派 長谷寺(奈良縣磯城郡初瀬村)

高野派 金剛峰寺(和歌山縣伊都郡高野山) 律宗 唐招提寺(奈良縣生駒郡藤原大字五條)

御室派 仁和寺(京都府葛野郡花園村) 眞言律宗 西大寺(奈良縣生駒郡伏見村大字西大寺)

◎淨土宗

本派 智恵院(京都市) 西山派 誓願寺(京都市)外三ヶ寺

臨濟宗 天龍寺(京都府葛野郡嵯峨村) 向嶽寺派 向嶽寺(山梨縣東山梨郡七里村)

相國寺派 相國寺(京都市) 妙心寺派 妙心寺(京都府葛野郡花園村)

建仁寺派 建仁寺(京都市) 建長寺派 建長寺(神奈川縣鎌倉郡小阪村大字山内)

南禪寺派 南禪寺(京都市) 東福寺派 東福寺(京都市)

大徳寺派 大徳寺(京都府愛宕郡大宮村) 方廣寺派 方廣寺(静岡縣引佐郡奥山村)

圓覺寺派 圓覺寺(神奈川縣鎌倉郡小阪村) 佛通寺派 佛通寺(廣島縣豊田郡高阪村)

永源寺派 永源寺(滋賀縣愛知郡高野村) 國泰寺派 國泰寺(富山縣永見太田村)

曹洞宗 永年寺 (福井縣吉田郡志比谷村) 總持寺 (石川縣鳳至郡柳比村大字門前)

黃檗宗 萬福寺 (京都府宇治郡宇治村)

眞宗 本願寺派 西本願寺(京都市) 佛光寺派 佛光寺(京都市)

大谷派 東本願寺(京都市) 出雲路派 菩提寺(福井縣今立郡味真村大字清水頭)

高田派 専修寺(三重縣河内郡一身田村) 山元派 證誠寺(福井縣今立郡新横江村大字横越)

木邊派 錦織寺(滋賀縣野洲郡中里村木部) 誠照寺派 誠照寺(福井縣今立郡鮎江町下深江)

興正派 興正寺(京都市) 三門徒派 專照寺(福井市)

日蓮宗 本派 久遠寺(山梨縣南巨摩郡身延村) 本門宗 本門寺(静岡縣富士郡北山村)

富士派 大石寺(静岡縣富士郡上野村) 本門法華宗 本能寺(京都市)妙蓮寺(京都市)外三ヶ寺

不受不施派 妙覺寺(岡山縣御津郡金川村) 法華宗 本成寺(新潟縣南蒲原郡本城村)

不受不施講門派 龍華教院(岡山縣御津郡金川村) 本妙法華宗 本隆寺(京都市)

顯本法華宗 妙滿寺(京都市)

時宗 遊行寺(神奈川縣鎌倉郡腰濱町)

淨土宗 淨光寺

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

臨濟宗 臨濟宗

大念佛寺 (大阪府東成郡平野郷町大字馬場)

◎法相宗

法隆寺 (奈良縣生駒郡法隆寺村) 外二ヶ寺

◎華嚴宗

東大寺 (奈良市)

基督教

基督教 天文十二年、葡萄牙人の種子島に漂着と共に我國に流入し、その傳播の勢頗る盛なるものありき。史家ランケ羅馬法皇史に於て述べて曰く、「十六世紀の中頃より十七世紀の始にかけて日本は英雄四方に割據し、國內分裂せるに乘じ、ゼスイト教徒は布教に盡瘁し、天正五年(西紀一五七七年)洗禮を受けたりし日本人三十萬人、慶長十一年(一六〇六年)には、三百の寺院ありき。然るに慶長十七年(一六四二年)葡萄牙船内にて日本人の西班牙に送りし書狀を發見し、家康、基督教徒を遇する殘酷を極めたれど、教徒は死を恐れず、互に相助けて教を奉ずるもの慶長八年より天和元年(一六六〇三年)の間に、二十三萬九千三百三十九人ありき」と、以てその勢力の大なりしを知るべし。天草亂後、殆んど絶滅したりしが、維新後開國と共に再び盛となり、傳播年を逐ふて著しく、信徒數は未だ佛教に及ばずと雖も、其勢力は侮るべからざるものあり。信者數約十三萬二千人、宣教師約千七百人にして内千一百人は日本人なり。會堂講議所數千五百二十五ヶ所あり、内東京市に百二十九ヶ所あり。

基督教派表 左の如し

天主教(舊教)	ハリスト正教(希臘教)	日本基督教會	組合基督教會
日本聖公會	浸禮教會	美以監教會	南英以教會
日本美以教會	美普教會	布美教會	福音教會
福音路帖教會	スカンヂナビアン	クリスチヤン	友會
同胞教會	セントパウルライオンズ	クリスチヤン	救世軍
基督教會	福音及福音教會	ユニヴァーサルズ	
セリフオーム下、プロテスタント	セブンスデー	アドベンチエリスト	
チャーチオブイングランド	ペンテコステ	メソヂヤン	
信者數及分布 信者の數は約十三萬二千人なり。其中最も多きは、日本基督教會、ハリスト正教は各約一萬五千人にして、次は日本聖公會一萬三千人、組合基督教會一萬一千人を多しとす。	其の地方分布の狀況は、長崎の三萬四千人を最多として、東京は二萬人其次に位し、其の他は一萬人に及ぶものなく、北海道の七千人、大阪の六千八百人、神奈川、宮城各々五千五百人等あり。		

其他の宗教思想

【其他の宗教】 以上宗派の外、孔孟の教を傳ふる儒教あり、これ我が國人上下の倫理思想の基礎をつくれるものにして、吾人が以て世界に誇るに足る所の大和魂は、實に此の教によりて玉成せられたり。然れども儒教の説くところは、現世に於ける人倫の大道にして、未來の冥福に關せず。故に宗教にあらず。唯、無智の徒時に之を誤解して、釋典を以て宗教上の儀式とし冥福を祈るなきにあらず。現今儒教を信奉するもの表面甚だ少なきが如し、されど實際に於ける其の勢力は頗る強大なるものあり。

生業産物

第四章 生業産物

我國は氣候温暖にして、雨量豊多なると、土地の肥沃にして人口の稠密なるにより、天産物豊饒に、各種の産業また盛なり。今之を分ちて農業、林業、漁業、蠶業、工業、商業の六とす。

農業

第一節 農業

我國は古來「瑞穂國」と稱し、農を以て國本とし、世々之を奨励したるを以て能く進歩し従つて各種の穀産に富めり。農家の數は實に五百四十萬戸を算し(臺灣を除く)全國人口の六割餘(總戸數八百七十二萬五千戸三十六年十二月)を占む。然も耕地は、約五百二十萬町(内、田地二百八十萬町、畑地二百四十萬町)に過ぎざるを以て、其産物の殆ど總ては國民の消費する所となる。

【全國農産物生産總額】農商務省最近の調査に依れば、日本農産物の種類は多様にして其の産額亦年を逐うて増進の傾向を呈せり。今其の主要なるものを選びて、最近二三年

全國農産物生産額

間に於ける平均産出價額を算すれば、十一億六千二百餘萬圓に達す。此は全國に亙る一般的農産物のみにて猶斯の如し、若し比較的預未なる各地方特産物と多少の手工を加へたる農業の副産物をも計上するときは、一年間の生産總額は優に十五億圓に上るべしと云ふ。今總括的種類の下に其の産額を擧ぐれば大要左の如し(明治四十一年調査)

穀 菽 類	八三四、七二七、八二八圓
特用作物(其一)	三二、四〇一、三二五圓
同 (其二)	一五五、八九八、五五八圓
園藝作物(其一)	二八、八七三、九三七圓
園藝作物(其二)	七六、八〇八、一四八圓
飼料作物	一、三二〇、四七七圓
家 畜	一一、〇二四、四二四圓
家 禽	三、四七七、〇六六圓
畜 産 物	一六、七〇〇、九九一圓
合 計	一、一六二、二二二、七四六圓

猶明治四十二年度の調査は、我國の一般農産物生産總高十二億三千五百二十八萬八百四十六圓に上り、前年調査よりも七千三百餘萬圓を増加せり。之に各地方特産物を加算すれば尙十五億圓以上なるべし。今一般的農産生産額の内譯を示せば左の如し。

穀 菽 類	八六九、九九五、四九一圓
特用作物(其一)	三二、六七三、二〇九圓
同 (其二)	一八一、二九〇、二一六圓
園藝作物(其一)	三〇、五九一、四七九圓
同 (其二)	八五、一二五、三三〇圓
飼料作物	一一、三二〇、三三三圓
家 畜	一一、六七九、〇〇六圓
家 禽	三、六一二、九二一圓
畜 産 物	一八、〇〇二、八七二圓
合 計	一、三三五、二八〇、八四六圓

◎農家の減少 農商務省最近の調査に、全國に於て専ら農業にて家計を立つる者の戸数は次第に減少しつつあり。

即ち耕作に従事せざる所の地主を除きたる、全國の農家の戸数は五百四十萬六千七百七十二戸にして、本邦稅總數の六割六分に當り、實に農業國たるの觀あり。去れど此農家を専農と工商兼業とに區別すれば、専農は四割六分にして、三百七十七萬八千二百五十戸、兼農は二割にして百六十二萬七千九百二十二戸に當れり。今之を前年度に比するに全國總戸數二萬三千二百七十七戸を増したるに、農家は専農に於て四萬三千三百七十五戸を減じ、兼農に於て六萬九千二百十戸を増したるを以て、農家は二萬七千八百三十五戸を増加し、即ち全國戸數の増加は農家の増加なりとして、農業の發達なりとして國家の上より慶賀す可きが如くなれ共、仔細に之を稽ふれば、農家の増加したるは農工兼業の側の戸數にして、農業専門の戸數は次第に減少しつつある上より見る時は、農業經營の如何に困難にして、農業のみにて立つの如何に生存に耐へざるものあるを示すものなるが如し。(四十二年一月)

農産物中最も産出の多きものより左に記すべし。

米は我が國の農産物中最も主要なるものにして、一ヶ年の産額は四千三百八十六萬六千石(明治四十年より以前七ヶ年中産額の最多なる年)にして、特に明治四十二年度は、五千二百四十二萬三千九百七十九石の多額に上れり。今産額の最も多き縣を左に記さん。

新潟縣	二百三十三萬七千石(平年)	二、七三五、一三〇石(四十二年)
兵庫縣	二百〇八萬二千石	二、二二一、六〇九
福岡縣	百八十八萬九千石	二、二〇二、三三七
愛知縣	百七十九萬三千石	二、〇〇七、三二八
千葉縣	百五十二萬九千石	一、八四七、八〇七
富山縣	百四十三萬四千石	一、五九六、二九九
山形縣	百四十萬二千石	一、七七七、八〇四